大阪府埋蔵文化財調査報告2014－5

和泉寺跡・府中遺跡 Ⅲ

―都市計画道路大阪岸和田南海線整備事業に伴う発掘調査―

平成27年２月

大阪府教育委員会

和泉寺跡・府中遺跡 Ⅲ

―都市計画道路大阪岸和田南海線整備事業に伴う発掘調査―

大阪府教育委員会

巻頭カラー　1　自然流路土器溜り出土土器

a. 土器溜り出土壺

b. 土器溜り出土壺・淡路型器台

c. 土器溜り出土淡路型器台

序　文

本書で報告いたします和泉寺跡、府中遺跡は、和泉市の北西部に位置しています。和泉寺跡は、古くから古代寺院跡と想定されてきた遺跡ですし、府中遺跡は、縄文時代から近世に至るまで連綿と人々が生活を営んできた場所です。

このたび、都市計画道路大阪岸和田南海線整備事業に伴って発掘調査を実施し、弥生時代から古墳時代の多数の土器を出土する自然流路、中世の建物跡や耕作の痕跡など、重要な発見をすることができました。

これまでのところ、調査地周辺では弥生時代から古墳時代の集落は見つかっていませんが、多数の土器の出土は、周辺に人々が暮らしていたことを教えてくれます。中世には建物跡や水田耕作の跡も見つかり、農村の情景が浮かんできます。

また、今回の調査では「和泉寺」に関連するものは発見されませんでしたが、寺院の建立前のことや廃絶後の環境を明らかにすることができたことは、大変大きな成果と考えています。

最後になりましたが、調査にあたって数々のご協力をいただいた地元のみなさまや関係各位には記して感謝いたします。

平成 27 年　2 月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　荒井大作

例　言

１．本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受け、平成 24 年度から翌 25 年度にかけて実施した、都市計画道路大阪岸和田南海線整備事業に伴う和泉市府中町４丁目所在の和泉寺跡・府中遺跡の発掘調査報告書である。

２．発掘調査期間と担当者は以下の通りである。

平成 24 年度（調査番号 12072）　平成 25 年２月１日から３月 29 日

文化財保護課調査第二グループ　主査　竹原伸次・主査　辻本 武

平成 25 年度（調査番号 13005）　平成 25 年４月１日から４月 30 日

文化財保護課調査第二グループ　主査　竹原伸次・専門員　辻本 武

３．遺物整理事業は、調査管理グループ　主査　小浜 成・副主査　藤田道子、調査第二グループ　主査　竹原伸次・専門員　西口陽一・専門員　辻本　武を担当者として平成 25・26 年度に実施した。

４．発掘調査の基準点測量は和歌山航測株式会社に委託した。

５．本書に掲載した遺物の写真撮影は有限会社阿南写真工房に委託した。

６．本書で作成した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。

７．本書の編集は辻本・竹原が担当し、執筆は第２章第６節土器群２、３出土遺物を藤田、その他は辻本、西口、竹原が行なった。

８．発掘調査、遺物整理および本書作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。

９．本報告書は 300 部作成し、一部あたりの印刷単価は 1,145 円である。

凡　例

１．基準高は、T.P.（東京湾平均海水位を基準とし、プラス値を使用している。

２．座標系は、世界測地系により、第Ⅵ系に準拠している。単位はメートルである。

３．方位は、座標北である。調査地では、座標北は磁北より東へ６°　39′、真北より西へ０°　19′振れる

４．土層断面図の土色及び遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2001 年版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。

本　文　目　次

序文
例言
第１章　調査の経過と方法……1
　第１節　調査の経過……1
　第２節　調査の方法……1
第２章　調査の成果……2
　第１節　Ａ区の調査……4
　第２節　Ｂ区の調査……6
　第３節　Ｃ区の調査……9
　第４節　Ｄ区の調査……12
　第５節　Ｅ区の調査……14
　第６節　Ｆ区・Ｇ北区の調査……16
　第７節　Ｇ南区の調査……52
第３章　まとめ……56

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図……1
第２図　調査区位置図……2
第３図　各調査区配置図……3
第４図　Ａ－西区　断面模式図……4
第５図　Ａ区遺構断面図……4
第６図　Ａ区・Ｂ区遺構平面図……5
第７図　Ａ区出土遺物実測図……6
第８図　Ｂ－西区　断面模式図……7
第９図　Ｂ区遺構断面図……7
第 10 図　Ｂ区出土遺物実測図……8
第 11 図　Ｃ区　断面模式図……9
第 12 図　Ｃ区 003 －ピット断面図……9
第 13 図　Ｃ区・Ｄ区遺構平面図……10
第 14 図　Ｃ区出土遺物実測図……11
第 15 図　Ｄ区　断面模式図……12
第 16 図　Ｄ区 005 －土坑　平面・断面図……12
第 17 図　Ｄ区・08019 －４区　中世遺構平面図……13
第 18 図　Ｄ区　各ピット平面・断面図……13
第 19 図　Ｄ区　016 段　断面図……13
第 20 図　Ｄ区出土遺物実測図……14

第 21 図　Ｅ区　断面模式図……14
第 22 図　Ｅ区 001 自然流路断面図……14
第 23 図　Ｅ区遺構平面図……15
第 24 図　Ｆ区北半部　断面模式図……16
第 25 図　Ｆ区・Ｇ北区遺構平面図……16
第 26 図　Ｆ区包含層出土遺物実測図……17
第 27 図　Ｆ区北半部 第２面遺構平面図……17
第 28 図　Ｆ区北半部 第２面遺構断面図……18
第 29 図　Ｆ区北半部遺構出土遺物実測図……18
第 30 図　Ｆ区北半部 第３面掘立柱建物 平面・断面図……19
第 31 図　Ｆ区北半部・08019 区 中世遺構平面図 ……20
第 32 図　Ｆ区南半部・Ｇ北区　断面模式図……20
第 33 図　Ｆ区南半部・Ｇ北区第３面自然流路土器溜り遺物出土状況平面図・断面図……21・22
第 34 図　Ｆ区自然流路最上層出土遺物実測図……23
第 35 図　Ｆ区南半部土器群１遺物出土状況平面図……24
第 36 図　土器群１出土遺物実測図……24
第 37 図　Ｆ区南半部・Ｇ北区土器群２遺物出土状況平面図……25・26
第 38 図　Ｇ北区土器群３遺物出土状況平面図……27
第 39 図　土器群２・３出土壺実測図（１）……29
第 40 図　土器群２・３出土壺実測図（２）……30
第 41 図　土器群２・３出土壺実測図（３）……31
第 42 図　土器群２・３出土甕分類図……32
第 43 図　土器群２・３出土甕実測図（１）……37
第 44 図　土器群２・３出土甕実測図（２）……38
第 45 図　土器群２・３出土甕実測図（３）……39
第 46 図　土器群２・３出土甕実測図（４）……40
第 47 図　土器群２・３出土甕実測図（５）……41
第 48 図　土器群２・３出土甕実測図（６）……42
第 49 図　土器群２・３出土有段高杯の指数分布……43
第 50 図　土器群２・３出土高杯実測図……45
第 51 図　土器群２・３出土鉢・製塩土器実測図……47
第 52 図　土器群２・３出土器台実測図……48
第 53 図　和泉寺跡・府中遺跡出土淡路型器台実測図……49
第 54 図　淡路型器台の使用例……51
第 55 図　Ｇ区断面模式図……52
第 56 図　Ｇ区第１面溝群断面図……52
第 57 図　Ｇ区遺構平面図……53
第 58 図　Ｇ区３－ 001 溝断面図……54
第 59 図　Ｇ区３－ 002 溝断面図……54
第 60 図　Ｇ区出土遺物実測図……55

第 61 図　Ａ区・Ｃ区・Ｅ区・08019 － １区遺構平面図 ･････････････････････････････････････57
第 62 図　Ｂ区・Ｄ区・Ｆ区・08019 － ４区遺構平面図 ･････････････････････････････････････58
第 63 図　Ｂ区・Ｇ区・Ｆ区・10001 － ３区遺構平面図 ･････････････････････････････････････59
第 64 図　Ｆ区南半部・Ｇ北区・08019 － ４区第３面自然流路出土状況図 ･････････････････････61･62

表　目　次

第１表　壺観察表･･･28
第２表　甕観察表１･･･33
第３表　甕観察表２･･･34
第４表　高杯観察表･･･44
第５表　鉢・製塩土器観察表･･･46
第６表　淡路型器台観察表･･･50

図　版　目　次

図版１　Ａ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区遺構
図版２　Ｄ区・Ｅ区・Ｆ区遺構
図版３　Ｆ区・Ｇ区遺構
図版４　Ｆ区・Ｇ区土器溜り
図版５　Ａ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区・Ｆ区遺物
図版６　Ｆ区遺物
図版７　土器群２・３出土弥生土器　壺
図版８　土器群２・３出土弥生土器　壺
図版９　土器群２・３出土弥生土器　壺
図版 10　土器群２・３出土弥生土器　甕
図版 11　土器群２・３出土弥生土器　甕
図版 12　土器群２・３出土弥生土器　甕
図版 13　土器群２・３出土弥生土器　甕
図版 14　土器群２・３出土弥生土器　甕
図版 15　土器群２・３出土弥生土器　甕
図版 16　土器群２・３出土弥生土器　甕・鉢
図版 17　土器群２・３出土弥生土器　鉢
図版 18　土器群２・３出土弥生土器　高杯
図版 19　土器群２・３出土弥生土器　高杯・器台
図版 20　土器群２・３出土弥生土器　器台・製塩土器
図版 21　Ｇ区遺物

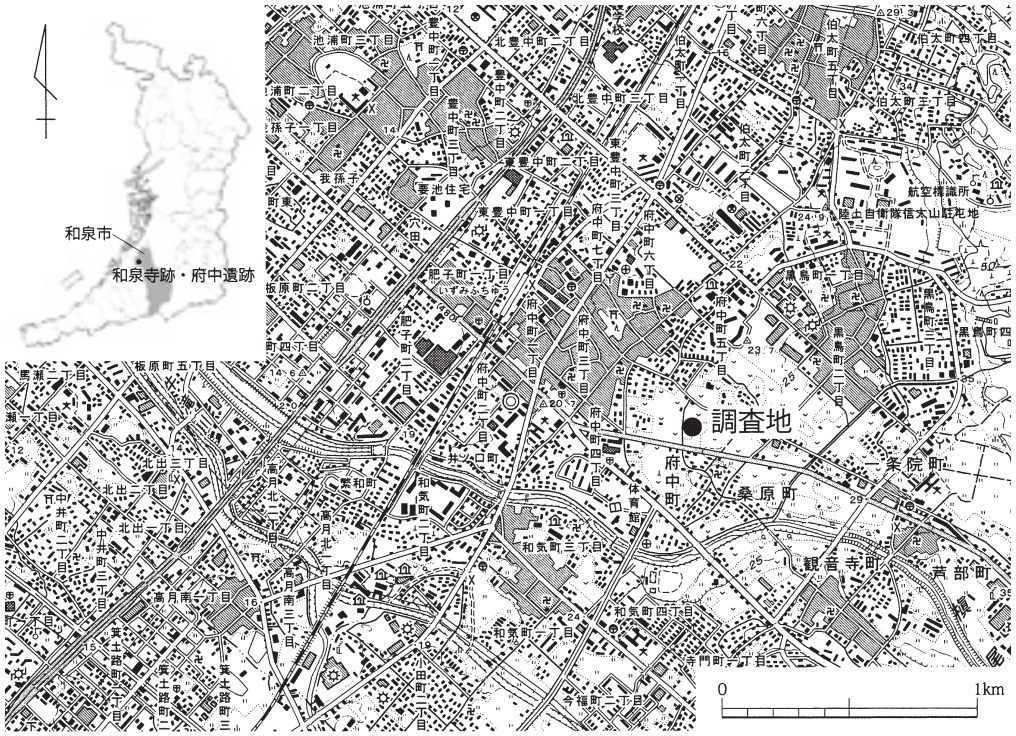
第１章　調査の経過と方法

第１節　調査の経過

今回報告する遺跡は「和泉寺跡」と「府中遺跡」の二遺跡である。前者の和泉寺跡は白鳳時代から奈良時代にかけての瓦が採集されたことから古代寺院跡と推定されている。また後者の府中遺跡はこの和泉寺跡およびその北に隣接する和泉国府跡を囲むように広がる遺跡で、これまでの発掘調査で縄文時代から中世に至る複合遺跡として知られている（第１図）。

和泉市を南北に貫く都市計画道路大阪岸和田南海線は、この和泉寺跡と府中遺跡の南西端部分を通過する位置に計画された。大阪府教育委員会は当道路事業予定地において平成 17・18 年度に試掘・確認調査を実施したところ、全域で遺構・遺物が発見されたため和泉寺跡および府中遺跡の範囲拡大を行ない、平成 20・22・23 年度の三ヶ年にわたり道路部分の全面発掘調査を実施した。また当道路事業に伴って交差する国道 480 号線が拡幅されることになり、試掘調査したところ遺物の出土が確認されたため、府中遺跡の範囲をさらに拡大し、この部分の発掘調査も平成 23 年度に実施した。

その結果、和泉寺跡では奈良時代の多数の瓦が出土し、その中には氏族名を刻んだ文字瓦も含まれており、古代寺院跡のより詳しい内容が明らかになった。また府中遺跡では弥生時代末～古墳時代初の土器溜り遺構や、中世の建物跡や耕作痕が見つかり、当時の集落や土地利用の様相がより明らかとなるなど、大きな成果を得ることが出来た。以上の調査成果は本府教育委員会より、国道 480 号線以北部分については『和泉寺跡・府中遺跡』(2012 年３月)、および同国道以南部分については『和泉寺跡・府中

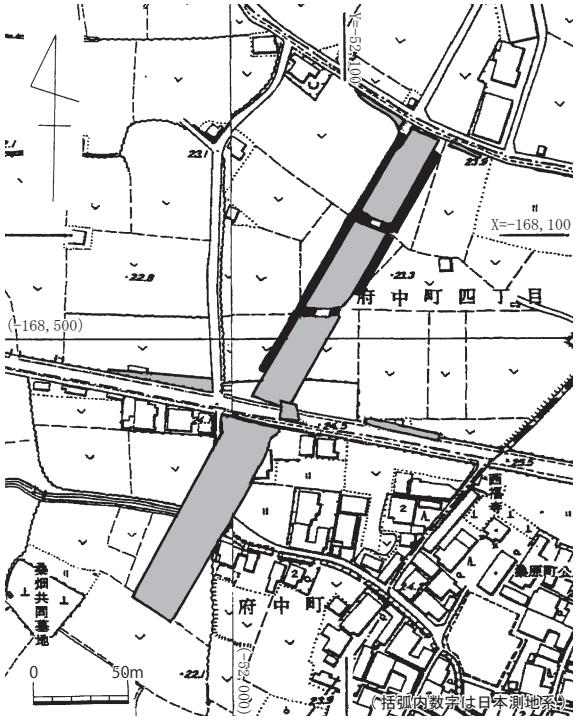


第１図　調査地位置図

遺跡Ⅱ』（2013 年３月）の二つの報告書にまとめて公刊した。

以上の発掘調査のうち、国道 480 号線と市道府中阪本線との間に挟まれた区間において平成 20・22 年度の発掘調査（調査番号 08019・10001）の周辺部分が未調査として残存した。今回はこの残存部分を発掘調査したものであるので、上記の発掘調査報告書うち『和泉寺跡・府中遺跡』（2012 年３月）で報告された調査の続きに相当するものとなる。

今回は平成 25 年２月に始まり４月に終了した。一連の調査ではあるが年度を跨っての発掘調査となったので、調査番号は平成 24 年度分が 12072、翌平成 25 年度分が 13005 の二つを使うこととなった。同一調査区でも調査番号の違う場合があるので、注意を要するところである（第２図）。



第２図　調査区位置図

今回の調査によって、都市計画道路大阪岸和田南海線建設予定地のうち、市道府中阪本線より以南の和泉寺跡・府中遺跡発掘調査については 30 ㎡程の未買収地部分を除き全て終了した。

第２節　発掘調査の方法

発掘調査は平成 25 年２月１日から４月 30 日にかけて、道路建設の本体工事と並行して実施した。調査面積は 740 ㎡である。

発掘調査着手時は道路を横断して施工する水路切り替え工事に伴う調査区をＡ・Ｂ区と名付け、調査を開始した。次に道路の両端に予定された擁壁工事部分について、東側は北からＣ・Ｄ区、西側は北からＥ・Ｆ・Ｇ区と調査区名を名付け、隣地の土地所有者との協議が整った調査区から発掘調査に取り掛かった。従って調査区名のアルファベットは、調査の着手順を示すものではない（第３図）。

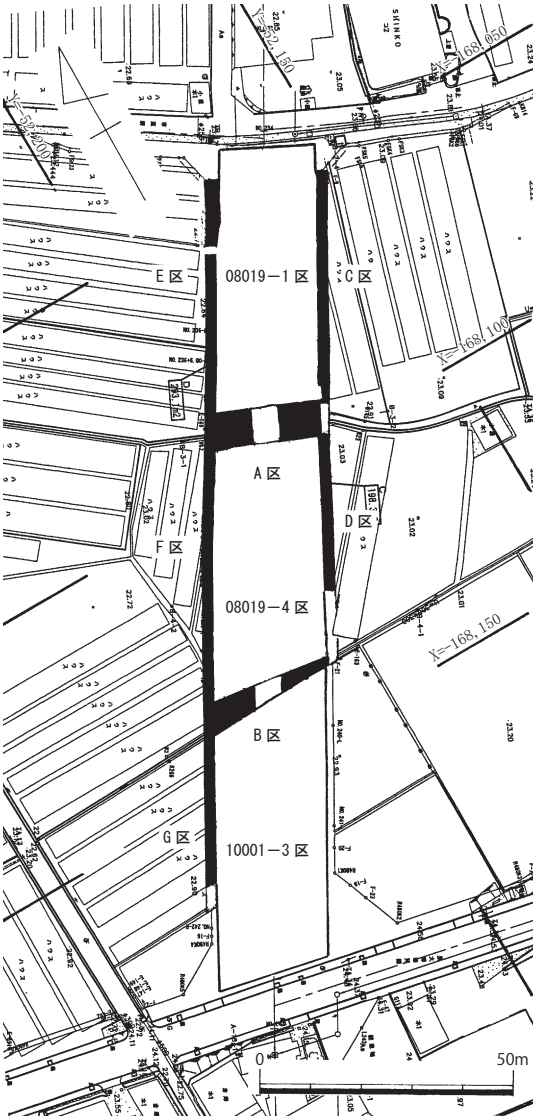
今回と前回の調査区の位置関係は、平成 20 年度の調査区 08019 － 1 区の東側にＣ区、南側にＡ区、西側にＥ区となり、同年度調査の調査区 08019 － 4 区の東側にＤ区、南側にＢ区、西側にＦ区、北側にＡ区となり、そして平成 22 年度の調査区 10001 － 1 区の西側にＧ区、北側にＢ区となる。

今回の調査において、遺構の測量については調査区ごとに４級基準点を設置し、それをもとに手作業で行なった。また各調査区の遺構撮影は、調査区の形状に合わせた位置に随時写真撮影用足場を建てて行ない、一部では状況によって脚立等を使用して行なった。

各調査区は発掘調査が終了次第に都市整備部側に引き渡し、都市整備部側は引き渡された調査区部分を順次道路建設工事に着手していった。発掘調査は同じ作業エリア内で道路建設工事と並行しながら施行することとなったが、都市整備部側との緊密な打ち合わせを繰り返し、無事に終了することができた。また当初は発掘調査と並行して出土遺物の洗浄を行なうこととしたのであるが、遺物量が大量であったため洗浄作業は発掘調査現場では完了出来ず、調査事務所に持ち帰ってから本格的に行なった。

なお和泉寺跡・府中遺跡における地理的・歴史的環境については、前述した本府教育委員会『和泉寺跡・府中遺跡』（2012 年 3 月）の６～ 12 頁、同『和泉寺跡・府中遺跡Ⅱ』（2013 年 3 月）の７～ 14 頁にまとめられている。また府中遺跡については平成 14 ～ 18 年度に調査し報告されている同『府中遺跡』（2010 年 10 月）の５～９頁、そして平成 15 ～ 21 年度に調査し報告されている同『府中遺跡･豊中遺跡･板原遺跡』（2012 年３月）の３～７頁にも、地理的・歴史的環境が記されている。

現在のところ和泉寺跡・府中遺跡の地理的・歴史的環境については、以上の報告書に記載された内容以上の情報は特にないので、これらを参考にして頂くことをお願いして、本書では省略することとした。



第３図　各調査区配置図

第２章　調査の成果

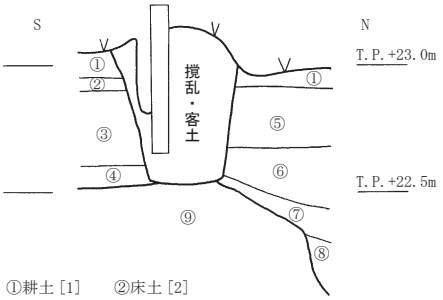
第１節　Ａ区の調査

Ａ区は道路建設に伴う水路切り替え工事予定地に設定した調査区である。平成 20 年度調査区の 08019 － 1 区と 08019 － 4 区との間に位置する。調査着手時には三本の下水道管および人孔の設置工事が終了しており、プライマリーな土層が残る所は西半分と東端のわずかな部分だけであった。そこで「Ａ－西区」「Ａ－東区」と名付けて調査を進めることとした。なお下水道部分は和泉市教育委員会によって調査が終了している。

Ａ区は農業用水路および里道があった箇所である。Ａ－西区では、その大半がこの用水路と里道によって客土された状態であり、この客土層を除去した面で地山となった。この地山面で遺構を検出した。

１．基本層序

上述したように、この調査区の大半は下水道・用水路・里道によって撹乱されており、土層を観察できる部分はわずかであったが、記録として残した。近年の①耕土、②床土の下は、③⑤にぶい黄橙色シルト、⑥にぶい黄橙色シルト、④⑦明黄褐色～にぶい黄橙色シルトで、前回調査によれば中世以降の土層である。⑧灰黄褐色シルトは調査区の北西端で急に落ち込む段状地形内の土層で、前回調査では古代～中世の土層とされている（第４図）。

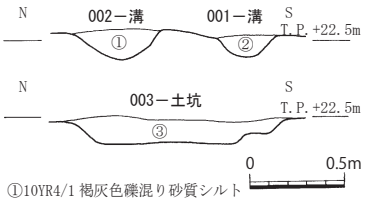


①耕土［1］　②床土［2］
③10YR6/3 にぶい黄橙色シルト［3A］
④10YR5/4 にぶい黄褐色シルト［3C］
⑤10YR6/4 にぶい黄橙色シルト［3A］
⑥10YR6/3 にぶい黄橙色シルト［3B］
⑦10YR6/6 明黄褐色シルト［3C］
⑧10YR5/2 灰黄褐色シルト［6A］
⑨10YR3/4 暗褐色粘質シルト（拳大礫　地山）［7・9］
［ ］内数字は前回調査の土層番号

第４図　Ａ－西区　断面模式図

２．遺構

Ａ－ 001 溝は幅 0. 3 m、深さ 0. 1 mで、検出長 6. 5 mを測る。方向は農業用水路のそれとほぼ同じで、この遺構がかなり新しいものと推定できる。一応近世以降としておきたい。埋土は浅黄色シルトで、土師器・須恵器の細片が出土した。



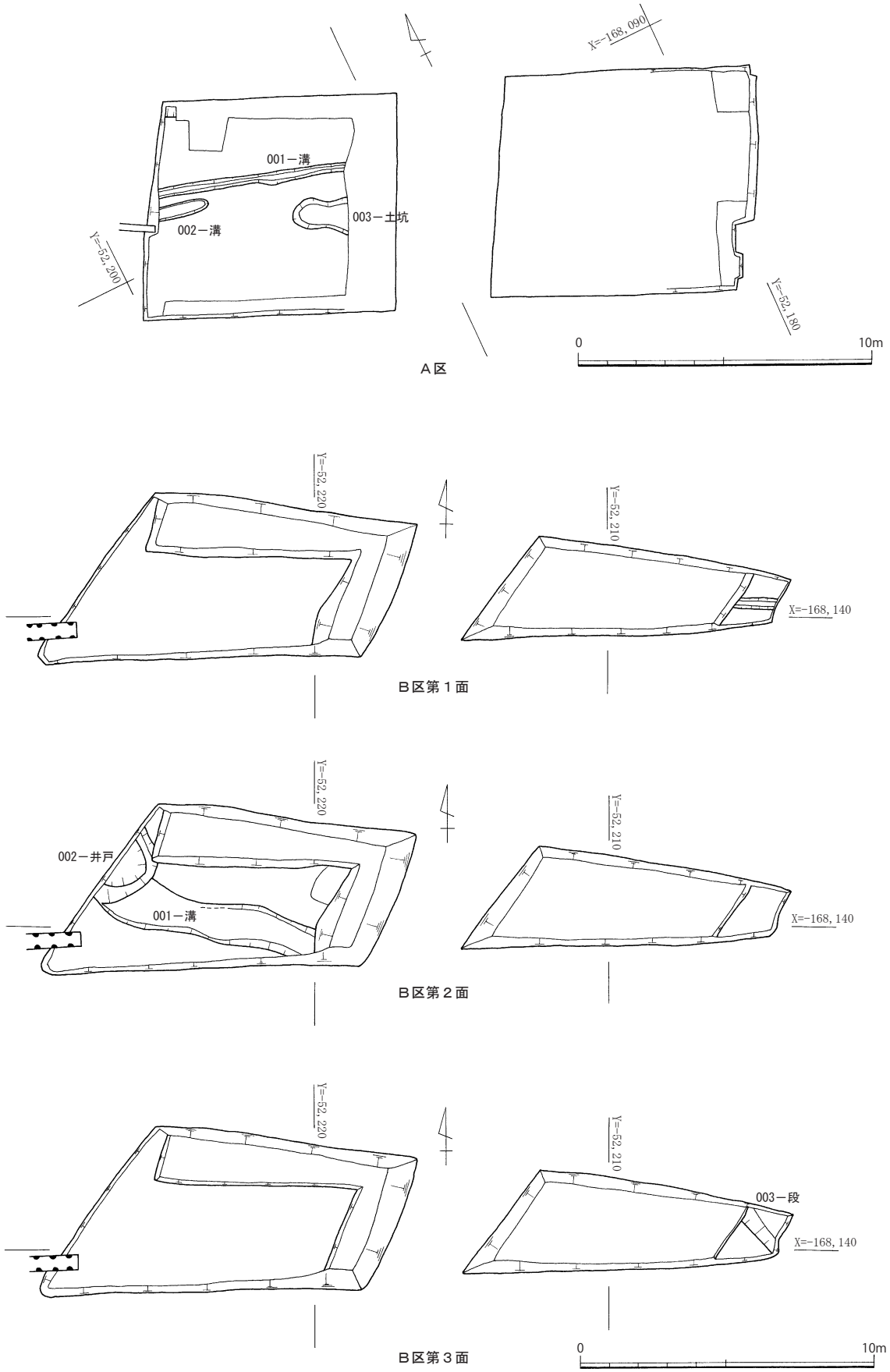
①10YR4/1 褐灰色礫混り砂質シルト
②10YR7/3 にぶい黄橙色シルト
③2. 5Y5/2 暗黄橙色シルト

第５図　Ａ区遺構断面図

Ａ－ 002 溝はＡ－ 001 溝の南に 0. 3 m離れて走るもので、幅 0. 4 m、深さ 0. 2 m、検出長 1. 8 mを測る。方向はＡ－ 001 溝と平行するので、時期は同様に近世以降と思われる。埋土は褐灰色礫混じり砂質シルトで、土師器の細片が出土した。

Ａ－ 003 土坑はＡ－西区のなかで東端に位置する。南北 1. 0 m、東西 2. 0 m以上の規模で、深さ 0. 15 m。形状から見ると、二つの土坑が重なった可能も考えられる。埋土は暗黄灰色シルトで、土師器の細片が出土した。時期は不明であるが、上述のＡ－ 001、002 溝と同時期としてもよいと思われる。

Ａ－ 004 段は、Ａ－西区の北西端でかろうじて確認できた地山面の落込み痕跡で、「段」状遺構とした。



第６図　Ａ区・Ｂ区遺構平面図

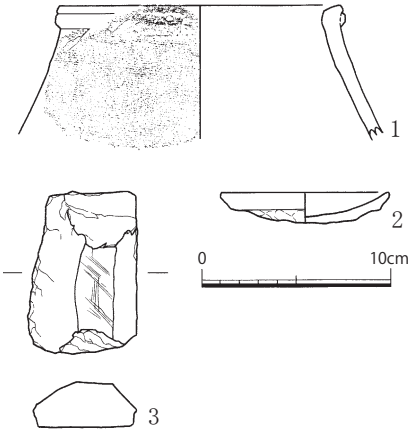
後述のＥ区の 001 －自然流路の南肩の続きに相当する。またこの段は､前回調査報告書における「08019 －１区　古代遺構検出面全体図」の南西部で東西に走る段状の遺構、および「自然流路全体図」の南端部で表現されている東西方向の段状遺構の続きに相当するものである。今回の調査ではこの段に関係する遺物は出土せず遺構の時期は不明と言わざるを得ないが、古代以前としておきたい。

Ａ－西区において近年の用水路と里道に伴う客土層は撹乱として扱ったが、この層の中から土師器・須恵器・瓦が出土した。瓦には布目痕があって古代瓦と思われる。しかしこれらの遺物は細片かつ摩耗しているので、周辺の遺物包含層が削平されてここまで移動してきたものと判断される。近在の和泉寺跡もしくは和泉国府跡に由来することが想定できる。

Ａ－東区は上述したように下水道敷設による撹乱が著しく、ごくわずかの面積の調査となった。近世と考えられる灰黄褐色礫混じりシルト層の上面と、この層を除去した地山面で精査したが、遺構は見つからなかった。また遺物の出土もなかった（第５、６図)。

３．遺物

Ａ区では近年の耕土・床土層の下から地山面までの③～⑦層より図化可能な遺物が出土した。（１）は縄文土器で、かなり磨耗している。周辺に縄文時代の遺跡の存在が考えられるものである。（２）は砥石である。かなり白に近い褐灰色を呈し、凝灰質と思われる。これだけでは時期は分からないが、出土層から中世以前のものとなる。（３）は中世の土師器小皿。他に注目すべきものは上述したように近年の遺構・包含層より出土した古代瓦であるが、図化できるものはなかった（第７図)。



第７図　Ａ区出土遺物実測図

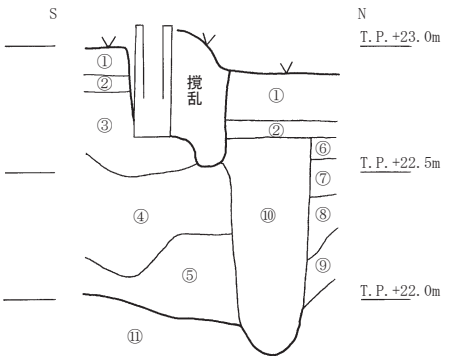
第２節　Ｂ区の調査

Ｂ区は道路建設に伴う農業用水路切り替え工事予定地に設定した調査区である。平成 20 年度調査区の 08019 －４区と平成 22 年度調査の 10001 －３区との間に位置する。Ｂ区の中央で南北方向に下水道管が走り、これより西を「Ｂ－西区」、東を「Ｂ－東区」と名付けて調査した。調査着手後、Ｂ－東区では別の下水道管が走ってかなりの部分が撹乱されていることが確認され、またＢ－西区の北半部では前回調査の 08019 －４区の南西隅と重なることが判明した。これらを除外してプライマリーに残る部分で調査を進めたため、Ｂ－西区では４×８ｍほど、Ｂ－東区では 1.5 ｍ四方ほどの調査範囲となった。

１．基本層序

基本層序は、①表土、②床土、③褐色粘質土、④暗褐色粘質土、⑤褐色粗砂混じり粘質土で、その下は⑪にぶい黄褐色砂質シルトで地山となる。各層に時期については､出土遺物が少なく即断できないが、①②は現在、③は近世以降、④は古墳時代～中世、⑤は弥生～古墳時代に相当するものと思われる。なおＢ－西区の西側断面では、後述の 002 －井戸遺構を境に北側の層位がかなり異なっていて、⑥にぶい黄褐色砂質土、⑦褐色粘質土、⑧暗褐色粘質土、⑨にぶい黄色粘質土となっていることが観察された。

これはこの部分に弥生～古墳時代の自然流路が走ったためで、⑧⑨がその自然流路の埋土に相当する（第８図）。



①耕土［1］　②床土［2］
③10YR4/4 褐色粘質土［6］
④10YR3/3 暗褐色粘質土［8］
⑤10YR4/4 褐色粗砂混り粘質土［9］
⑥10YR6/3 にぶい黄褐色砂質土［3］
⑦10YR4/4 褐色粘質土［4］
⑧10YR3/3 暗褐色粘質土［7］
⑨2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土［9］
⑩2.5Y5/2 暗灰黄色礫混り砂質土（井戸埋土）
⑪10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト（地山）［13］
［ ］内数字は前回調査の土層番号

第８図　Ｂ－西区　断面模式図

２．遺構

第１面

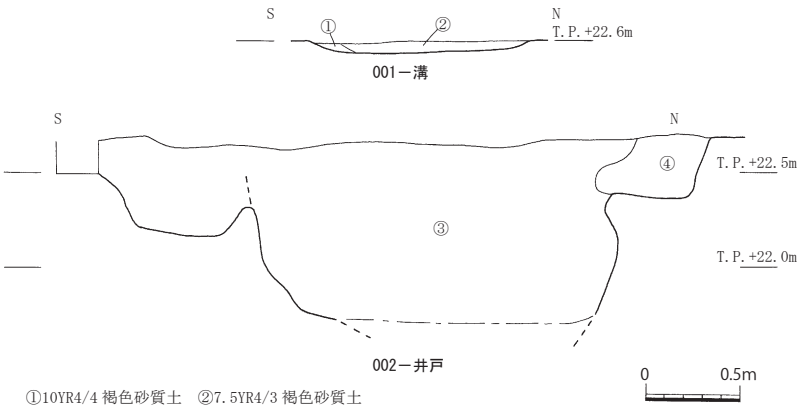
Ｂ－西区において①耕土、②床土、③褐色粘質土層を除去した面は、前回調査における「耕作溝検出面」（中世～近世）に相当する面である。この面を「第１面」として精査したところ、Ｂ－西区では遺構はなく、Ｂ－東区で東西に走る溝を検出した。幅 0.3 m、検出長 1.3 mであったが、現農業用水路の直下で方向も同じであるので、この用水路の掘り方溝の可能性も考えることができる。遺物の出土はなかった。今回は遺構番号を振らず、位置のみの記録に留めた（第６図）。

第２面

Ｂ－西区において④暗褐色粘質土層を除去した面は、前回調査における「中世遺構検出面」に相当する面である。レベルはＴ.Ｐ.＋22.2～22.3 mである。これを「第２面」として精査したところ、Ｂ－西区で溝と井戸を検出した。Ｂ－001 溝は幅 1.4～1.6 m、深さ 0.1 m、埋土は褐色砂質土。調査区内を東西にやや蛇行して走る。埋土から土師器・須恵器・瓦器・瓦片が出土した。いずれも細片である。Ｂ－002 井戸は径 3.0 m、深さ 0.9 mの素掘りのものである。埋土は暗灰黄色礫混じり砂質土である。埋土から弥生・土師器・須恵器・瓦の細片が出土した。遺物は弥生時代末以降の土師器や古代の布目瓦など古い時代のものが多いが、遺構は前述の 001 溝を切る関係にあり、時代的には中世あるいはそれ以降である（第６、９図）。

第３面

Ｂ－東区において⑤層を除去したＴ.Ｐ.＋22.3 mの地山面で、北東へ落ち込むＢ－003 段を検出した。段差は 0.3 m程で、段下のレベルはＴ.Ｐ.＋22.0 mほどであるＴ.Ｐ.＋22.3 m。遺物はなく時期は不明。



①10YR4/4 褐色砂質土　②7.5YR4/3 褐色砂質土
③2.5Y5/2 暗灰黄色礫混り砂質土　④2.5Y6/3 にぶい黄色砂質土

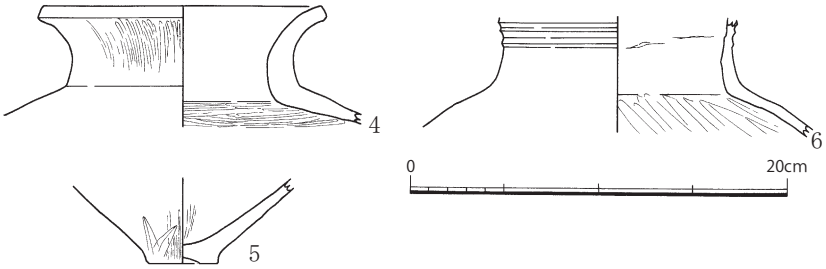
第９図　Ｂ区遺構断面図

前回調査における「自然流路全体図」（弥生時代後期～古墳時代後期）に相当する面となるが、今回のこの段遺構に関係あると思われる遺構は見当たらない。

Ｂ－西区では⑤層を除去した面が地山面となり、Ｔ.Ｐ.＋22.0ｍ前後を測る。この面で精査したが、遺構は検出されなかった（第６図）。

３．遺物

Ｂ区からの出土遺物は細片が多くて図化できるものは少ないが、Ｂ－西区の⑤層より図化できる遺物が出土した。（４）は弥生時代後期の壺の口頸部。かなり風化しているが、外面に縦方向のミガキの痕跡がある。（５）は弥生土器の壺底部。外面にヘラ描きで披針形の木の葉模様が３枚描かれる。（６）は須恵器壺の頸部で、断面三角形の貼り付け突帯２条以上をまわす。古い時期に属するものと思われる。（第10図）



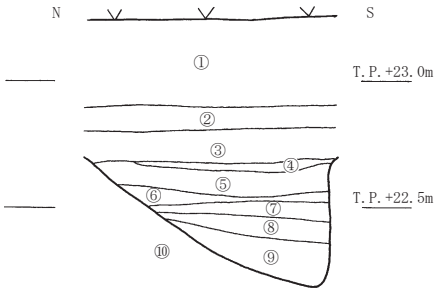
第10図　Ｂ区出土遺物実測図

第３節　Ｃ区の調査

Ｃ区は前回調査の 08019 －１区の東隣に接した位置に設定した調査区である。道路擁壁設置に先行する調査であったので、幅２ｍ、長さ 46 ｍほどの細長いトレンチ調査となった。

１．基本層序

基本層序は、現在の①表土・②床土の下は③旧耕土・④旧床土、⑤にぶい黄褐色砂質土（旧々耕土）・⑥褐色粘質土（旧々床土）、⑦黄褐色粘質土（旧々々耕土）・⑧褐色粘質土（旧々々床土）、⑨灰黄褐色粘質土、⑩暗灰黄色砂礫土（地山）となる。①～⑧は、耕作層がこれまでに四回積み上がっていった様相を示す。より高い収穫を求めて、地上げを繰り返しながら耕作した農民の努力の結果であろう（第 11 図）。



①表土　②床土　③旧耕土［1］　④旧床土［2］
⑤10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土（旧々耕土）［3A］
⑥10YR4/6 褐色粘質土（旧々床土）［3B］
⑦2.5YR5/3 黄褐色粘質土（旧々々耕土）［3C］
⑧10YR4/6 褐色粘質土（旧々々床土）［3D］
⑨10YR5/2 灰黄褐色粘質土［6A］
⑩2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫土（地山）［9］
［ ］内数字は前回調査の土層番号

第 11 図　Ｃ区　断面模式図

２．遺構

第１面

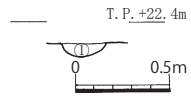
⑦の上面が前回調査の「耕作溝検出面」（中世～近世）に相当する面で、この面を「第１面」として精査した。面のレベルはＴ．Ｐ．＋ 22.4 ～ 22.6 ｍである。最近に設置されたネットフェンスの基礎により、0.5 ｍ四方の撹乱坑が２ｍ間隔に穿たれて精査面の破壊が進んでいたが、溝と段遺構を検出することができた。

Ｃ－ 001 溝はＣ区の南端部で検出した溝で、幅 0.2 ｍ、深さ 0.05 ｍ、検出長 2.2 ｍを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質土で、遺物はなかった。方向は前回調査区の東端で検出された溝群と同じであり、また位置も近接しているので、同一の性格を有する耕作痕であろう。

Ｃ－ 002 段は調査区の北半部で検出した。検出長 4.0 ｍで南北に走るが、南端で東に折れる。段差は 0.05 ｍと大きくはない。かつての田畑の区画段差になろうと思われる（第 13 図）。

第２面

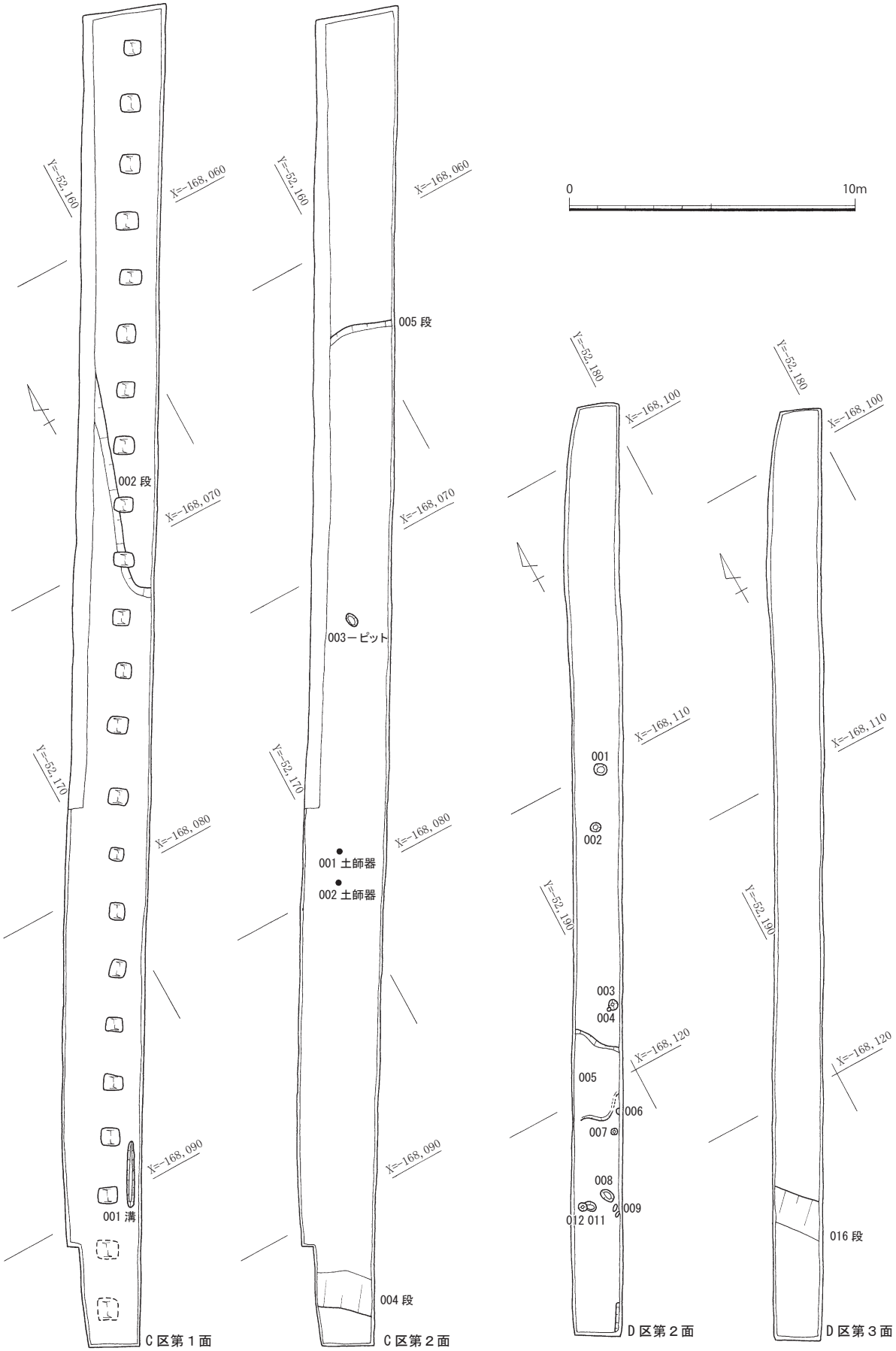
⑨層を除去した面は地山面となる。これを「第２面」として精査した。第２面のレベルは、北半部のＴ．Ｐ．＋ 22.7 ｍから南に向かって徐々に下がっていってＴ．Ｐ．＋ 22.2 ｍとなり、南端部で急に上がるものである。前回調査の「中世遺構検出面」「古代遺構検出面」「自然流路全体図」に相当する面である。小ピットと段遺構を検出した。Ｃ－ 003 ピットは調査区の中央で検出した。大きさは 0.5 × 0.25 ｍ、深さ 0.05 ｍ、埋土は褐灰色粘質土で、遺物はなかった。単独の小ピットで検出されたが、前回調査区の北半部で検出された 12 ～ 13 世紀の掘立柱建物・柵跡とは 13 ｍほどの距離にあり、これと関連することが考えられる（第 12、13 図）。



①10YR5/4 黄褐色粘質土

第 12 図　Ｃ区 003 －ピット断面図

Ｃ－ 004 段は調査区の南端で検出した。段差は 0.5 ｍ。従ってこの調査区南端で地山面が急に上がる地形となる。この段遺構は前回調査の「古代遺構検出面」および「自然流路全体図」（弥生時代後期～古墳時代後期）での面で検出された段の続きである。



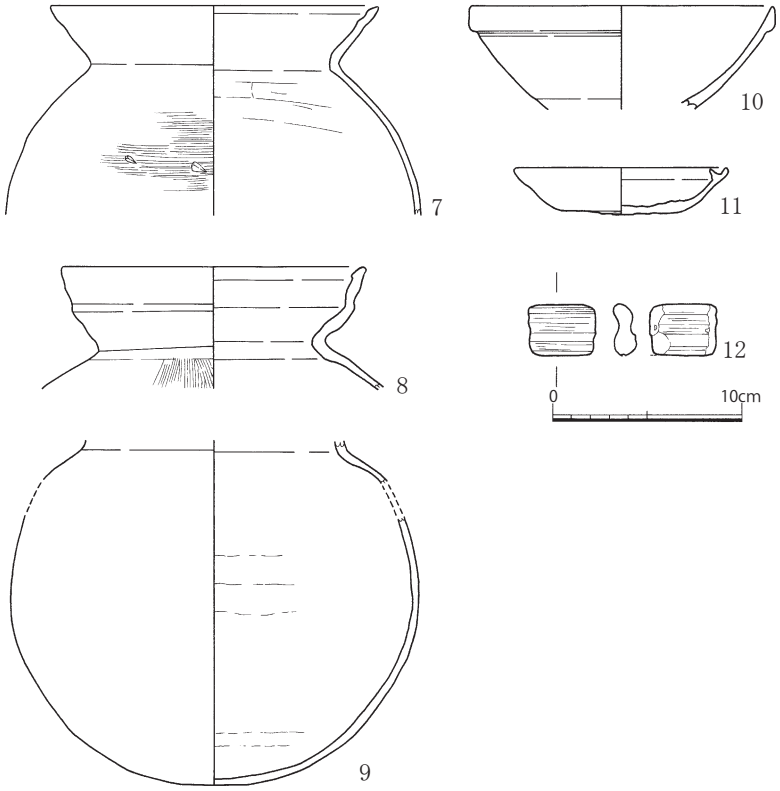
第 13 図　Ｃ区・Ｄ区遺構平面図

Ｃ－005 段は調査区の北半部で検出した。段差は 0.05 m。前回調査の「自然流路全体図」面の北東部で検出された段の続きに当たる。

調査区中央のこの第２面上で土師器甕が出土した。Ｃ－001・002 土師器と名付けて出土位置を記録したが、当初からその場所にあったものなのか疑問である。レベル的には前回調査の「自然流路全体図」に相当する面である（第 13 図）。

３．遺物

（７）は 001 －土師器と名付けた地点で出土した布留式の土師器甕である。口縁端部内面が肥厚するが、その稜線は鈍い。体部外面は磨滅が激しいが横方向のハケ目がかすかに観察され、内面はヘラ削りの痕跡を有する。（８）は同じく 001 －土師器と名付けた地点で出土した布留式の土師器壺である。二重口縁で、端部内面が肥厚する。体部外面に縦方向のハケ目を有し、内面はヘラケズリ。これらの土師器が出土した 001 －土師器より南へ 1.1 m離れた地点である 002 －土師器で（９）の土師器壺が出土した。風化磨滅が激しく調整は不明。内面に接合痕がかろうじて観察される。(10) は⑤あるいは⑥層から出土した白磁碗である。12 世紀頃のものと思われる。(11) は 004 －段を検出中に出土した須恵器坏。７世紀の所産である。(12) は⑨層から出土した砥石の破片である（第 14 図）。



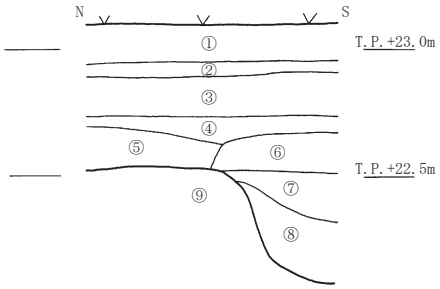
第 14 図　Ｃ区出土遺物実測図

第４節　Ｄ区の調査

Ｄ区は前回調査の 08019 －４区の東隣に設定した調査区であるが、その南側は用地買収が完了していなかったため未調査部分として残さざるを得なかった。調査区は幅 1.5 m、長さ 32 mの規模となった。またＤ区の北側とＣ区との間はＡ－東区の東に相当するところで、この部分は下水道管および現在も機能している石組井戸によって撹乱されていることが判明したので、調査から除外した。

１．基本層序

基本層序は、①耕土･②床土の下は③にぶい黄褐色粘質土（旧耕土）・④褐色砂質土（旧床土）、⑤暗褐色砂混じりシルト（北半部）、⑥黄褐色粘質シルト（南半部）、⑦褐色粘質土、⑧暗褐色粘質シルト、⑨灰黄褐色砂礫土（地山）となる。④を除去した面を「第１面」、⑤⑥を除去した面を「第２面」、⑨の地山面を「第３面」とした（第 15 図）。



①耕土［1］　②床土［2］
③10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土（旧耕土）［3Ａ・Ｂ］
④10YR4/6 褐色砂質土（旧床土）［3Ｃ］
⑤10YR3/4 暗褐色礫混りシルト［4・7Ａ］
⑥10YR5/6 黄褐色粘質シルト［7Ｂ］
⑦10YR4/6 褐色粘質土［7Ｃ・Ｄ］
⑧10YR3/4 暗褐色粘質シルト［10］
⑨10YR4/2 灰黄褐色砂礫土（地山）［13］
［ ］内数字は前回調査の土層番号

第 15 図　Ｄ区　断面模式図

２．遺構

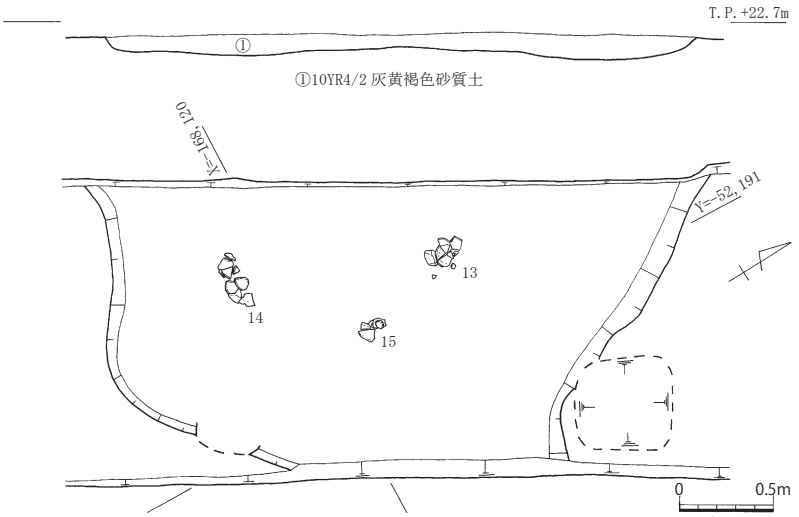
第１面

第１面は前回調査における「耕作溝検出面」（中世～近世）に相当する面である。レベルはＴ.Ｐ.＋ 22.7 mである。この面で精査したところ、最近設置されたネットフェンスの基礎の抜け跡が２m間隔で並んで出てきた。大きさは 0.5 m四方であり、撹乱として扱った。いわゆる遺構は検出されなかった。

第２面

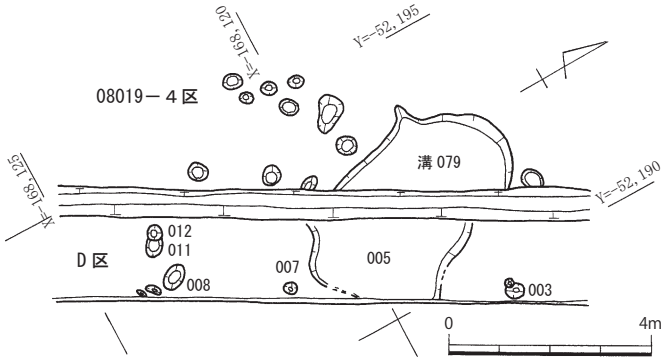
第２面は前回調査における「中世遺構検出面」（12 ～ 13 世紀）に相当する面である。レベルはＴ.Ｐ.＋ 22.5 mである。調査区の中央から南半部において、土坑１基、小ピット 14 基を検出した。

Ｄ－ 005 土坑は南半部にある不定形の土坑である。前回調査における溝 079 の続きに当たり、これを合わせると東西 2.5 m×南北 4.0 mの規模となる。底面は多少の凹凸があり、平らではない。深さは大体 0.1 mだが、最深で 0.15 mを測る。埋土は灰黄褐色砂質土で、瓦器碗が３点出土した（第 12、16 図）。

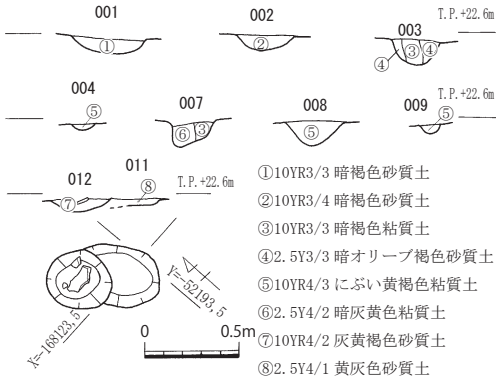


第 16 図　Ｄ区 005 －土坑 平面・断面図

Ｄ－ 001・002 ピットは、調査区の中央に２m離れて所在する小ピットである。径 0.4 m、深さ 0.1 m、



第 17 図　D区・08019 －４区 中世遺構平面図



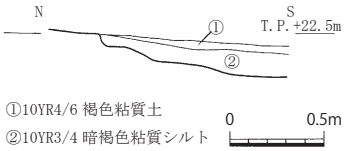
第 18 図　D区　各ピット平面・断面図

埋土は暗褐色砂質土である。この二つの小ピットは、前回調査で報告されている建物３の東に１m離れた位置にあるが、この建物の柱穴列の延長上には位置しておらず、従って建物を構成する柱穴ではないと考えられる。

調査区南半部では上述の 005 土坑の北側にD－ 003・004 ピット、南側にD－ 006 ～ 015 ピットの９基の小ピット群を検出した。径 0.2 ～ 0.4 m、深さは 0.05 ～ 0.15 mと様々な大きさがある。また埋土も色調が暗褐色、暗灰黄色、暗オリーブ灰色等々、また土質が砂質土、粘質土等々と様々である。003 ピットのように断面で柱根と思われる痕跡を残すものもあった。これらの小ピット群は、前回調査における柱穴 106 ～ 108、ピット 109 ～ 116 の遺構群の続きに相当すると考えられる。そこで今回と前回の調査で検出した小ピット群と遺構群を合わせた平面図を作成した。しかし建物としてまとまるものはなかった。柱穴の間隔や方向が不揃いの建物であったかも知れない。これらのピット群から、土師器・瓦器・羽釜片が出土した（第 17、18 図）。

第３面

第３面は前回調査における「自然流路全体図」（弥生時代後期～古墳時代後期）に相当する面である。レベルはT.P.＋ 22.5 mで第２面と同じであるが、上述の中世遺構群の基盤となる粘土層を除去した面となるので、別の面とした。この面では調査区の南端でD－ 016 段を検出した。段差は 0.4 m。前回調査の「弥生時代後期～古墳時代後期」面で検出された自然流路の段の続きに相当する。段内の埋土は褐色粘質土と暗褐色粘質シルトで、自然流路でも澱んでいた様相を示す。この遺構からは須恵器・土師器の細片が出土した。時期は古墳時代であろう（第 13、19 図）。

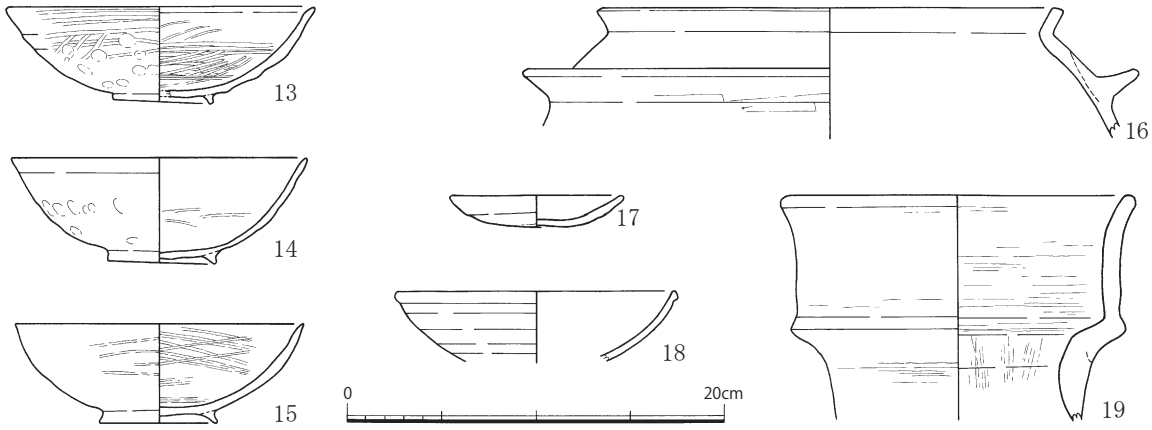


第 19 図　D区 016 段 断面図

３．遺物

(10 ～ 12)は 005 －土坑から出土した三点の瓦器碗である。口径は 15.2 ～ 16.3 ㎝、器高は 5.0 ～ 5.5 ㎝、高台径 5.2 ～ 6.2 ㎝を測る。和泉型といわれるもので、内外面ともに摩耗していたが、調整痕はかろうじて観察できた。内面はやや密なミガキ、外面はやや粗いミガキで、12 世紀の所産となろう。(13) は 012 －ピットから出土した土師質の羽釜。口径 24.5 ㎝、鐔径 32.5 ㎝。鐔の下面全体および口縁一部に煤が付着しており、使用後に廃棄されたことを示す。(14) は 001 －ピットから出土した土師器小皿である。(15) は調査区南半部で第２面の直上層から出土した白磁碗。口縁端部が外側に肥厚する。(16)

は調査区北半部の包含層から出土した土師器。一見古墳時代の複合口縁のように見えて違和感があるが、時期は中世あるいはそれ以降のものである。内面が全体に煤が付着しており、煙突か何かに使用されたものと推定される。少なくとも壺や甕ということは出来ない（第 20 図）。



第 20 図　Ｄ区出土遺物実測図

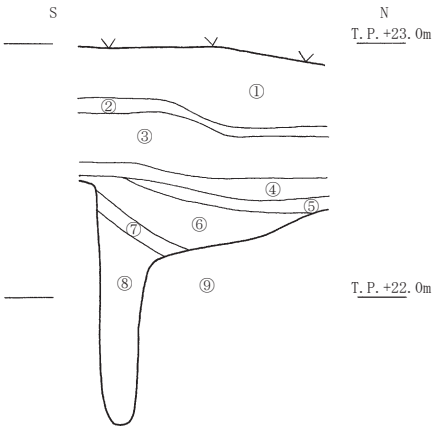
第５節　Ｅ区の調査

Ｅ区は前回調査の 08019 － 1 区の西隣に接して設定した調査区である。調査区北端から 13 ｍの地点で電柱があり、その周囲が撹乱されていると予想されたので調査から除外した。従ってＥ区は幅 2.5 ～ 4 ｍ、長さ 12 ｍの北半部と、幅 1.5 ～ 2.5 ｍ、長さ 33 ｍの南半部に分けて調査することとなった。

１．基本層序

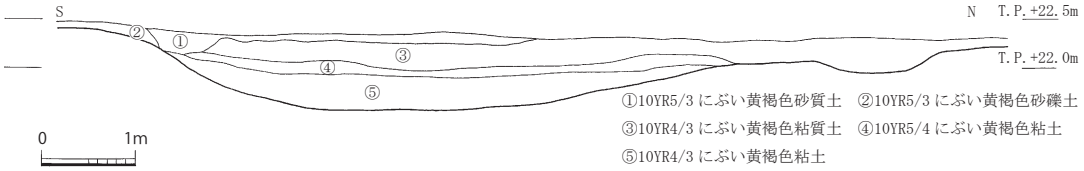
基本層序は、①耕土・②床土の下は③黄褐色砂質土（旧耕土）・④褐色粘質土（旧床土）、⑤暗灰黄色粘質土、⑥にぶい黄褐色粘質土、⑦にぶい黄褐色粘土、⑧にぶい黄褐色粘土、⑨暗灰黄色砂礫土

（地山）となる。④を除去した面を「第１面」、地山面を「第２面」とした。なお⑥⑦⑧は後述する 001 自然流路の埋土である（第 21 図）。



①耕土［1］　②床土［2］
③2.5Y5/3 黄褐色砂質土（旧耕土）［3A］
④10YR4/6 褐色粘質土［3B］
⑤2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土［4］
⑥10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土［6］
⑦10YR5/4 にぶい黄褐色粘土［6］
⑧10YR4/3 にぶい黄褐色粘土［7］
⑨2.5YR4/2 暗灰黄色砂礫土（地山）［9］
［ ］内数字は前回調査の土層番号

第 21 図　Ｅ区　断面模式図



①10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土　②10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫土
③10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土　④10YR5/4 にぶい黄褐色粘土
⑤10YR4/3 にぶい黄褐色粘土

第 22 図　Ｅ区 001 自然流路断面図

２．遺構

第１面

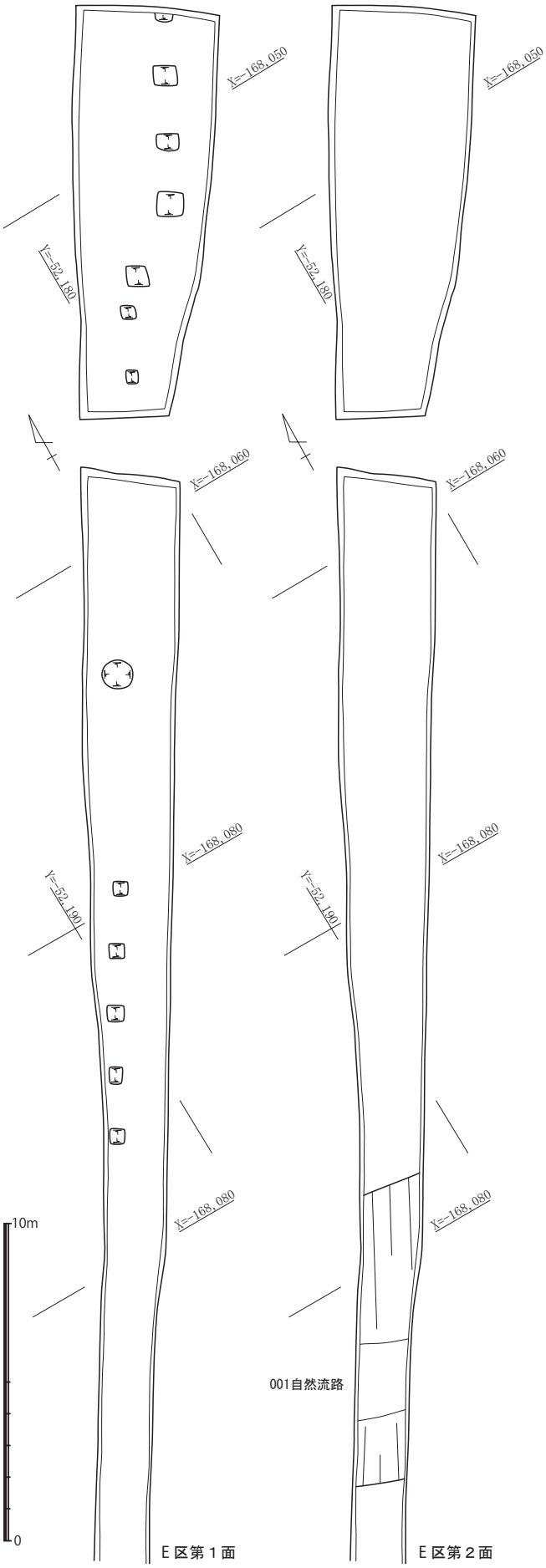
第１面は前回調査の「耕作溝検出面」（中世～近世）に相当する面で、レベルはＴ.Ｐ.＋22.4～22.5ｍである。この面で精査したところ、最近に設置されたネットフェンスの基礎の抜け跡および年の素掘り井戸によって第１面が撹乱されていることを確認した。いわゆる遺構は検出されなかった。

第２面

第２面は前回調査の「中世遺構検出面」「自然流路全体図」（弥生時代後期～古墳時代後期）に相当する面で、レベルは北半部でＴ.Ｐ.＋22.4ｍ、中央部でＴ.Ｐ.＋22.2ｍ、南端でＴ.Ｐ.＋22.5ｍである。調査区の南端部でＥ－001自然流路を検出した。幅9.0ｍ、深さ0.9ｍ。この流路の南肩は、前述のＡ－004段に続く。自然流路としたが埋土がにぶい黄褐色粘土で、澱む地形であったと思われる。前回調査の08109－１区ではこの流路の続きは遺構線ではなくコンター線で表現している（第22、23図）。

３．遺物

Ｅ区での出土遺物は少なく、また細片であった。時期を推定できるものは001－自然流路の埋土上層にあたる⑥層から出土した瓦である。これは須恵質で内面に布目のある平瓦で、古代と思われる。



第23図　Ｅ区遺構平面図

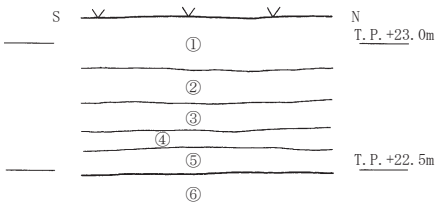
第６節　Ｆ区、Ｇ北区の調査

Ｆ区は前回調査の 08019 －４区の西隣、Ｇ区は 10001 －３区の西隣に設定した調査区であるが、調査工程の都合で、本来Ｆ区の南端部となるべき箇所についてはＧ区とともに調査したのでＧ区に含めることとし、この部分を「Ｇ北区」と称した。しかしＦ区南半部からこのＧ北区にかけては、後述する弥生時代後期～古墳時代前期の土器溜りがまとまって検出されたので、この部分については両者を合わせて「Ｆ南半部・Ｇ北区」とした。

１．基本層序

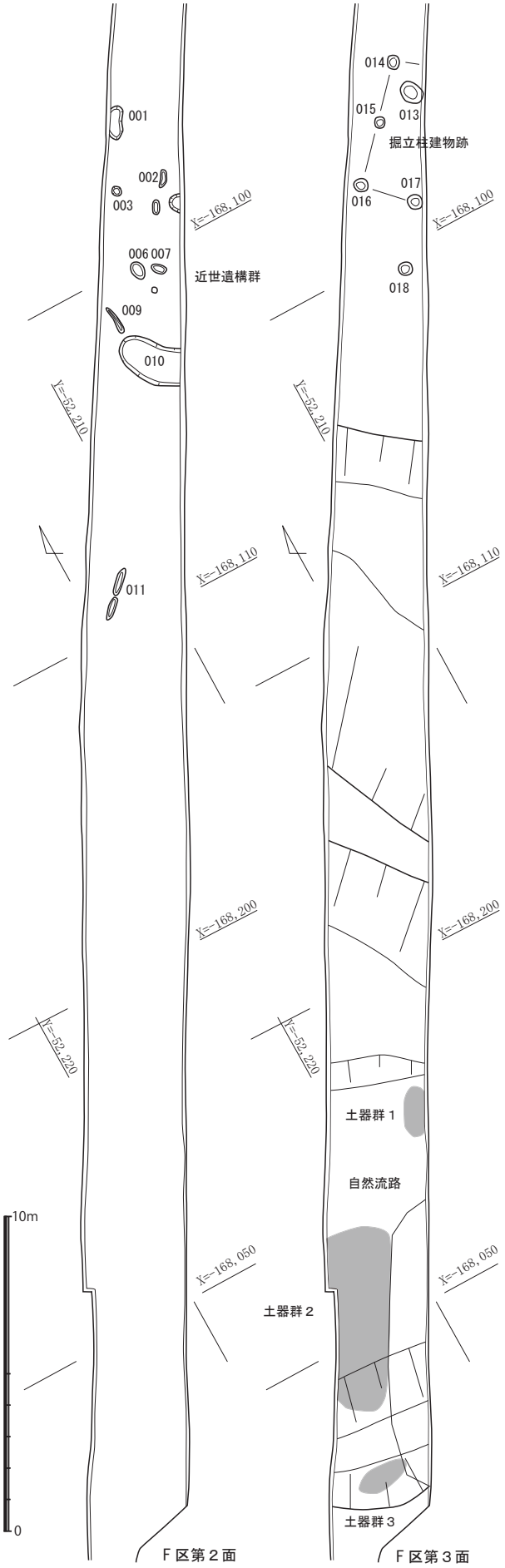
Ｆ区の基本層位は、北半部では①耕土、②床土、③旧耕土、④旧床土、⑤にぶい黄褐色粘質シルト、⑥褐灰色砂礫土（地山）である。当初③層を除去した面を第１面、④層を除去した面を第２面、⑤層を除去した面を第３面として調査したが、その後の検討で第２面は前回調査の「耕作溝検出面」（中世～近世）に、第３面は調査区の北半部で前回調査の「中世遺構検出面」（12 ～ 13 世紀）に相当することが判明した（第 24 図）。

包含層中からは古墳時代中期後半の須恵器高杯（21）・蓋（20）が出土している。（22）は、古墳時代後期の須恵器甕口縁部片である（第 26 図）。



①耕土［1］　②床土［2］
③旧耕土［3A］　④旧床土［3C、4］
⑤10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト［7］
⑥2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫土（地山）［9］
［ ］内数字は前回調査の土層番号

第 24 図　Ｆ区北半部　断面模式図

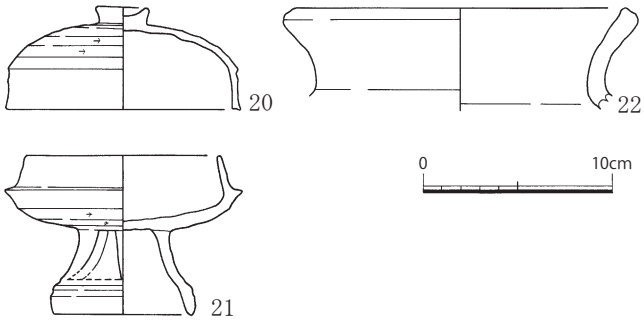


第 25 図　Ｆ区・Ｇ北区遺構平面図

２．遺構

Ｆ区第１面

Ｆ区では③層を除去した面を第１面して精査した。レベルはＴ．Ｐ．＋22．７ｍである。最近のネットフェンス基礎や近年の井戸跡があるのみで、遺構は検出されなかった。この面の時期は近世以降である。



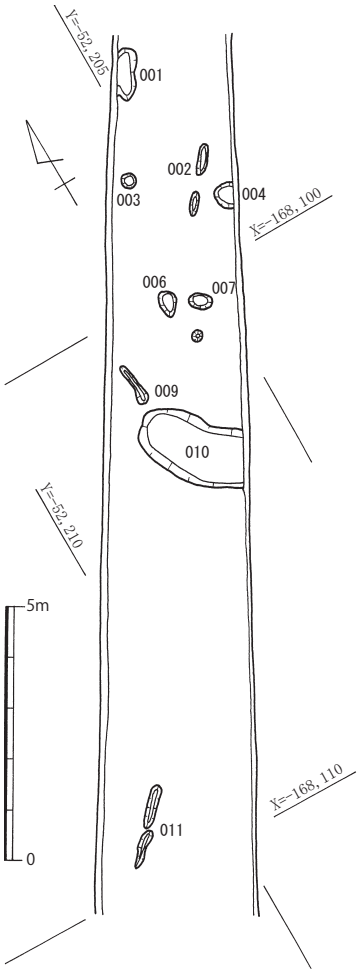
第 26 図　Ｆ区包含層出土遺物実測図

Ｆ区第２面

④層を除去した面を第２面として精査した。レベルはＴ．Ｐ．＋22.5 ～ 22.6 ｍである。この面では調査区北半部において、ピット群および溝を検出した。当初はこの面を中世と考えたが、検出面のレベルおよび検出した溝の方向から前回調査 08019 －４区の「耕作溝検出面」に相当するものと判明した。

遺構はピット９基、土坑１基、溝１条を検出した。Ｆ－ 001 ～ 009 ピットは径 0.15 ～ 0.7 ｍの様々な大きさがあり、また形状も円形や溝状に細長いものなど多様である。深さは 0.05 ｍ、埋土はにぶい黄褐色シルト～灰黄褐色シルトである。これらのピット群は柱穴とは言い難く、位置関係でも建物としてまとまらない。Ｆ－ 010 土坑はピット群より南に接する位置にあり、幅 1.2 ｍ、長さ 2.1 ｍ以上の大きさで、深さ 0.1 ｍ。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトである。Ｆ－ 011 溝は 010 土坑より南西へ６ｍ離れた位置にあり、幅 0.1 ｍ、検出長 1.7 ｍ、深さ 0.1 ｍ、埋土はにぶい黄色砂質土である。この溝の方向はＮ－ 45°－Ｅで、前回調査の「耕作溝検出面」における溝 070 ～ 076 の方向とほぼ一致する（第 25、27、28 図）。

出土遺物は土師器・瓦器・須恵器の細片で、詳しい時期は不明である。前回調査ではこの面を中～近世としており、今回もこれに倣いたい。

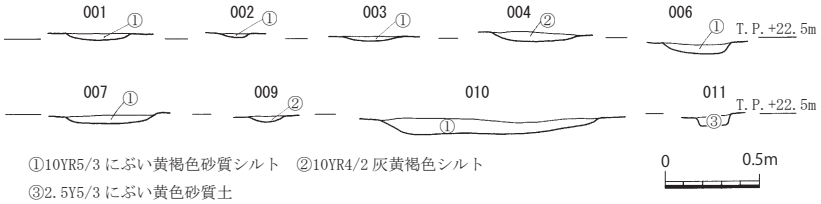


第 27 図　Ｆ区北半部 第２面遺構平面図

Ｆ区第３面北半部

⑤層を除去し、⑪層の地山の上面を第３面とした。この面ではＦ区の北半部で中世のピット群、南半部では弥生時代後期～古墳時代後期の自然流路を検出した。ここでは北半部のピット群を扱い、南半部の自然流路については「Ｆ南半部・Ｇ北区」として後述する。

北半部でＦ－掘立柱建物とそれに伴うピットを検出した。検出面レベルはＴ．Ｐ．＋22.4 ｍである。掘立柱建物は、Ｆ－ 014 ～ 018 ピットからなるもので、このうち 014 ～ 016 ピットの３基は２ｍの等間隔で一直線に並び、016 ピットで南東方向に直角に曲げて 1.8 ｍ離れた位置に 017 ピット、さらに南西方向へ 95 度に曲がって２ｍ離れた位置に 018 ピットがある。以上の５基のピットは径が 0.3 ～ 0.4 ｍ、深さが 0.2 ～ 0.25 ｍとほぼ同じで、断面に柱痕が観察された。埋土は柱部分が灰黄



第 28 図　Ｆ区北半部 第２面遺構断面図

褐色砂質シルト、掘方部分が黄褐色砂質シルトである。018 ピットは他と比べて位置的にずれるが若干の誤差であり、ともに掘立柱建物を構成するものとみていいであろう。013 ピットはこの掘立柱建物の内にある土坑で、径 0.6 m、深さ 0.2 m、埋土はにぶい黄褐色～黄灰色砂質シルト。断面には柱痕は見当たらなかった。このピット内からは完形の瓦器碗や瓦器小皿等が出土しており、建物の祭祀に関係する遺構かと考えられる（第 30 図）。

前回調査で検出された「建物１」図と今回の掘立柱建物跡図を合成してみると、両建物は方向を同じくしており、また建物１の柱穴列の延長上に今回の掘立柱建物のピットが位置し、そして建物１の西端から今回の掘立柱建物の 016 ピットまでの距離は 4.0 m、および 014 ～ 016 ピット列までの距離は 6.0 mを測り、これが両建物の柱間距離である 2.0 mの倍数となっていることが判明した。これにより両建物は互いに非常に関係のあることが確実となった。同一建物かどうかは即断できないが、可能性はあると考えられる（第 31 図）。

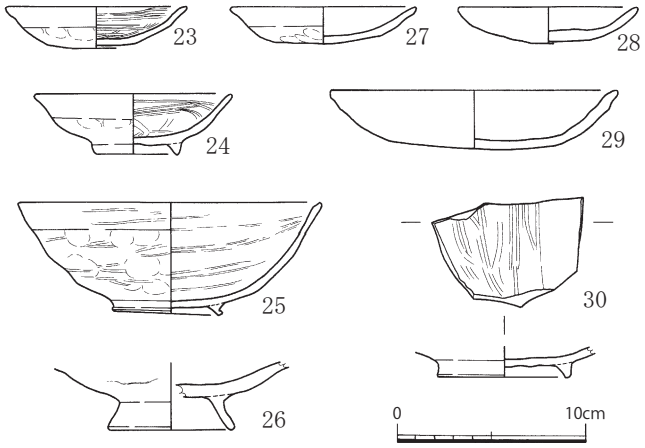
２．遺物

23 から 26 は、013 ピットから出土した中世土器である。

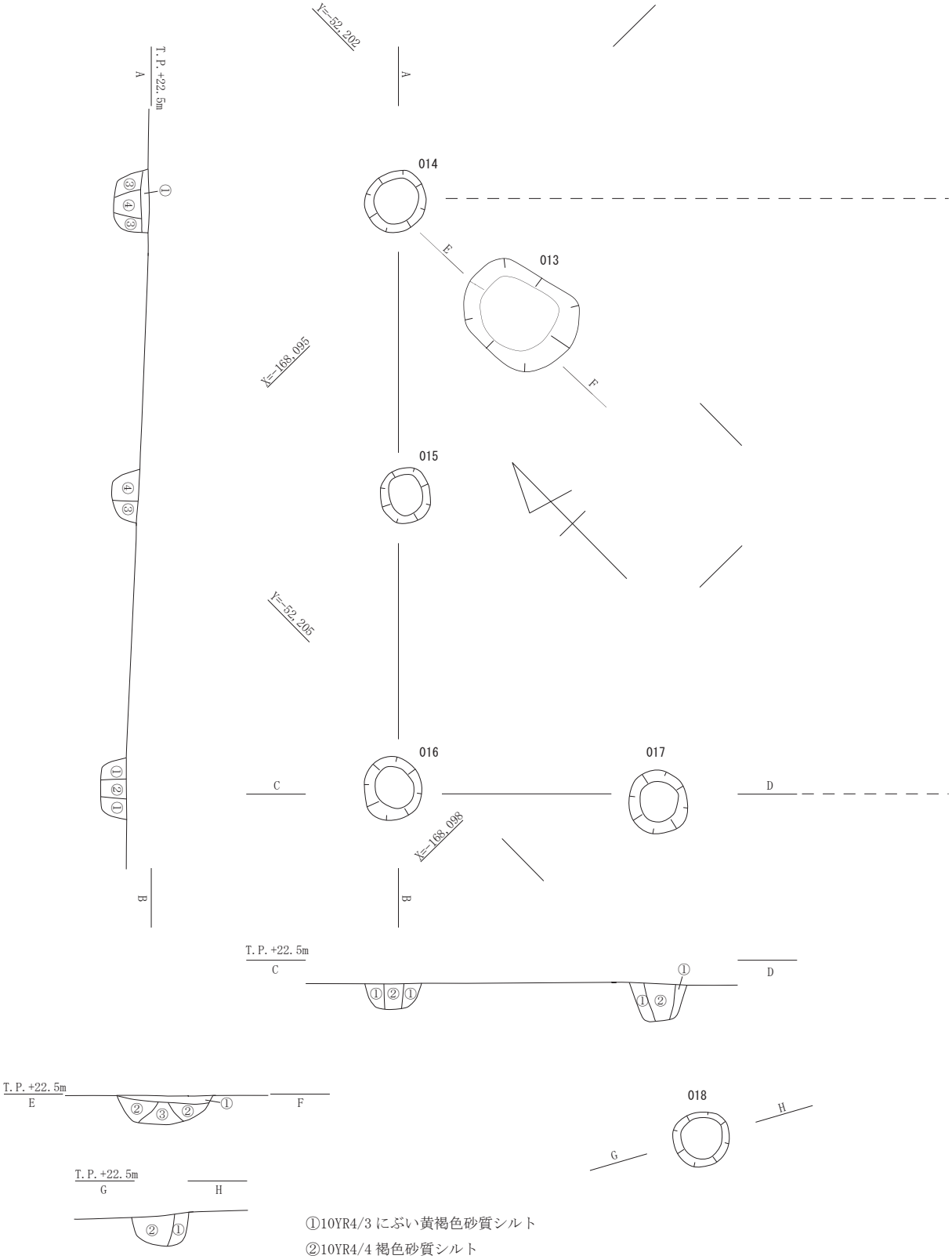
23 は瓦器小皿、24 は瓦小椀、25 は瓦器椀、26 は高台付き土師器皿である。25 の瓦器椀は器高が 5.9 cmあり、時期は平安時代後期、12 世紀中頃である。

27 から 30 は、包含層から出土した中世土器である。

27、28 は土師器小皿、29 は土師器大皿、30 は瓦器椀である（第 29 図）。



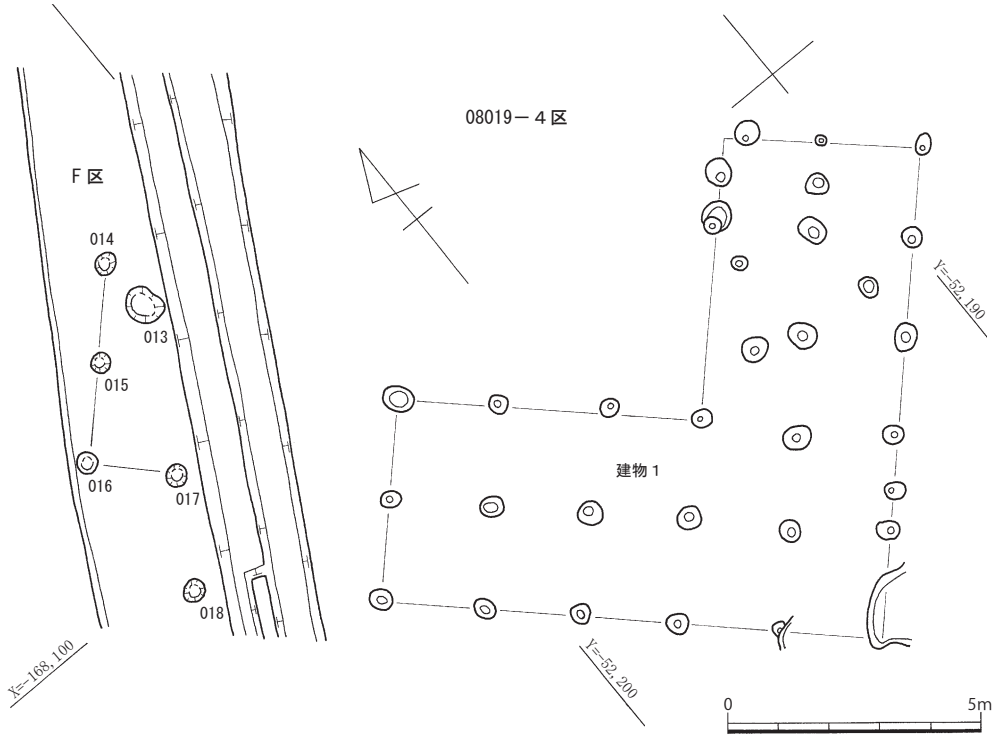
第 29 図　Ｆ区北半部遺構出土遺物実測図



①10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
②10YR4/4 褐色砂質シルト
③10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
④2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト

0　4m

第 30 図　Ｆ区北半部第３面掘立柱建物 平面・断面図

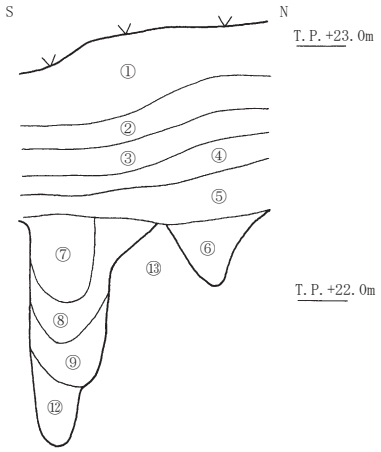


第 31 図　Ｆ区北半部・08019 区 中世遺構平面図

Ｆ区南半部・Ｇ北区第３面

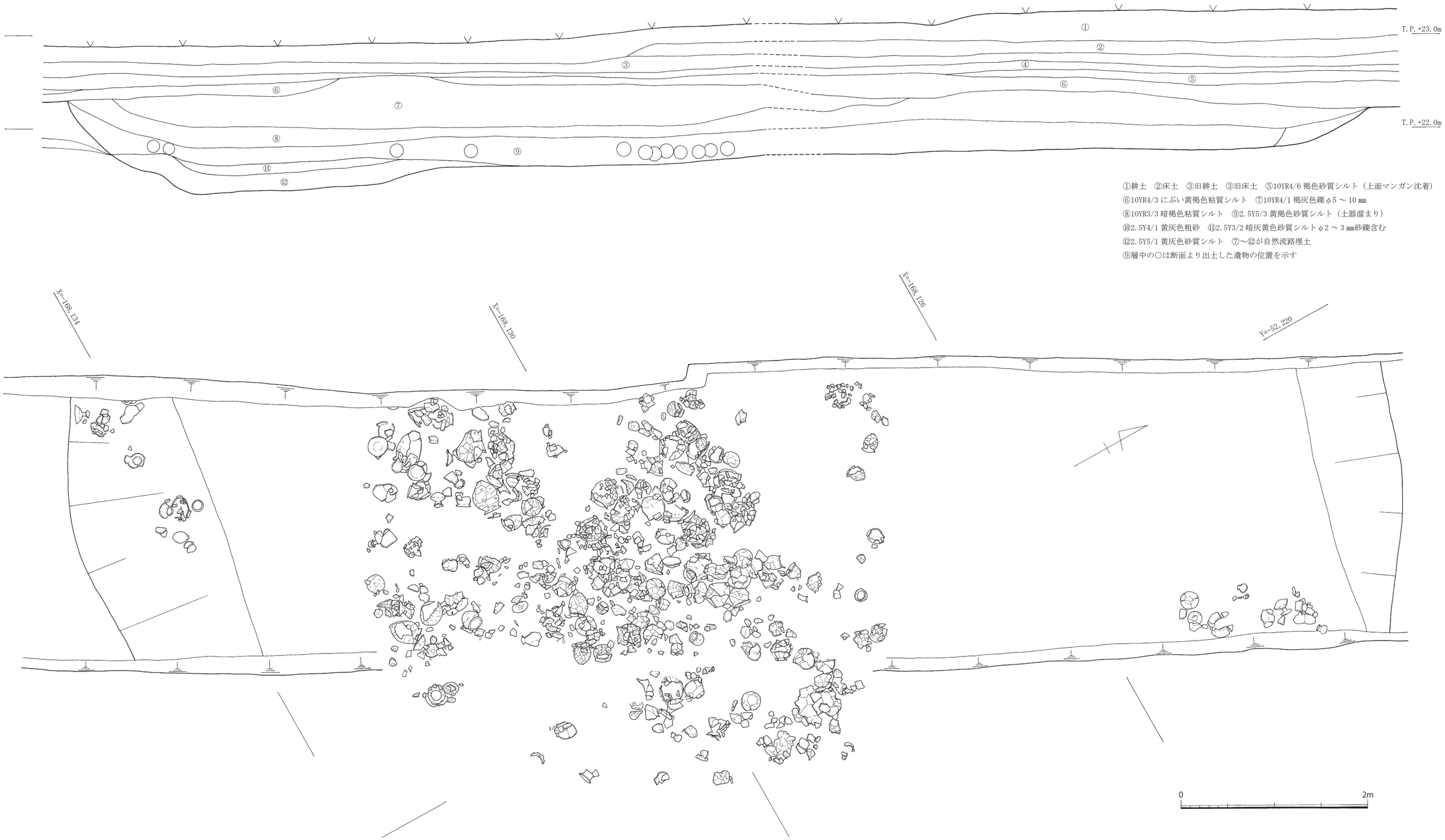
Ｆ区の南半部およびＧ北区では自然流路を検出した。前回調査の 08019 －４区における「自然流路全体図」にある「自然流路 031」の延長に相当する。この時の調査ではこの自然流路の西端で古墳時代期の庄内式の土器溜りが検出され、この時代のまとまった遺物の出土として注目を浴びた。今回の調査ではこの土器溜りがさらに西に広がることを確認し、この遺構のより詳しい状況を明らかにすることができた。

Ｆ区の南半部での基本層位は①耕土、②床土、③旧耕土、④旧床土、⑤にぶい黄褐色粘質シルト、⑥褐色細砂、⑦褐灰色砂礫、⑧暗褐色粘質シルト、⑨黄褐色砂質シルト、⑩黄灰色砂質シルト、⑪褐色粗礫砂（地山）である。このうち①～⑤層は上述のＦ区北半部の層位と一致する。⑥～⑩層は地山面上で検出した自然流路内の埋土である。当初③層を除去した面を第１面、④層を除去した面を第２面、⑤層を除去した面を第３面として調査したが、その後の検討で第２面は前回調査の「耕作溝検出面」（中世～近世）、第３面は前回調査の「自然流路全体図」（弥生時代後期～古墳時代後期）に相当すると判明した。なお⑨層から後述の弥生～古墳時代土器溜りを検出した（第 32 図）。



①耕土［1］　②床土［2］　③旧耕土［3Ａ］　④旧床土［3Ｃ、4］
⑤10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト［7］
⑥10YR4/6 褐色細砂［9］
⑦10YR4/1 褐灰色砂礫［8］
⑧10YR3/3 暗褐色粘質シルト［11Ａ］
⑨2. 5Y5/3 黄褐色砂質シルト（土器溜まり）［11Ｂ］
⑫2. 5Y5/1 黄灰色砂質シルト［11Ｃ、Ｄ］
⑬10YR4/4 褐色粗砂・礫（地山）［13］
［ ］内数字は前回調査の土層番号

第 32 図　Ｆ区南半部・Ｇ北区　断面模式図



第 33 図　Ｆ区南半部・Ｇ北区第３面自然流路土器溜り遺物出土状況平面図・断面図

検出された自然流路は南北 14 mの幅で、深さは北半で 0.6 m、南半で 1.1 mを測る。埋土は第 33 図のように上から⑦褐灰色砂礫、⑧暗褐色粘質シルト、⑨黄褐色砂質シルト、⑩黄灰色粗砂、⑪暗灰黄色砂質シルトφ 2 ～ 3 ㎜、⑫黄灰色砂質シルトとなる。このうちの⑨層が土器溜りの出土した土層である（第 33 図）。

これらの土層を観察すると、自然流路は当初水の流れが余りない段階で⑧～⑫の砂・シルト層が堆積するのであるが、その堆積過程で大量の土器が埋没して土器溜りを形成した後、最終段階で激しい流れによって⑦の礫層を堆積させたものと思われる。

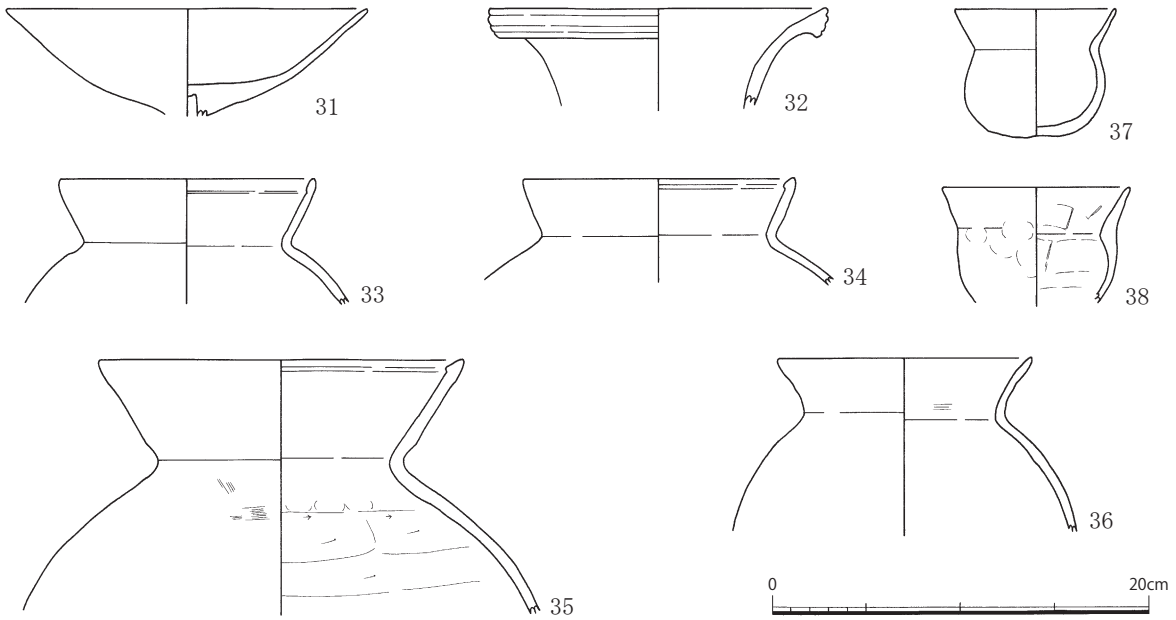
土器溜りは、自然流路内の底に⑪⑫層を堆積させた後に形成されたものである。出土した土器は完形に復元できるものが多く、また重なったものはほとんどなかった。これにより土器溜りは投棄されたものではなく意図的に、また積み重ねたのではなく平面的に置かれ、その後⑨層によって埋没したものと判断できる。土器溜りは自然流路内の北端にある土器群１と中央の土器群２、南端の土器群３の三つに分けることが出来るが、このうち中央の土器群２が最も大量で検出された。前回と今回調査の成果と合成した図面を作成すると、この土器群２はＴ．Ｐ．＋ 22.0 m前後のレベルにあり、南北 5.5 m、東西 4.0 m以上の範囲に広がり、非常に密集した状態であることが判明した（第 33 図）。

自然龍路最上層及び土器群１出土遺物

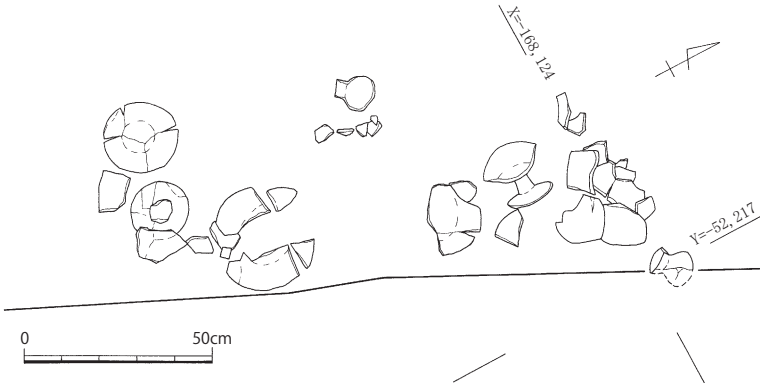
自然流路の埋土中からは土器溜り以外にも多量の土器が出土した。。最上層である⑧層からは高杯（31）、壺（32 から 36）、小形丸底壺（37、38）などが出土している（第 34 図）。

土器群１も⑧層中から出土した。高杯（39 から 49）、小形丸底壺（47 から 52）、壺（53 から 55）がなどが出土している（第 35、36 図）。

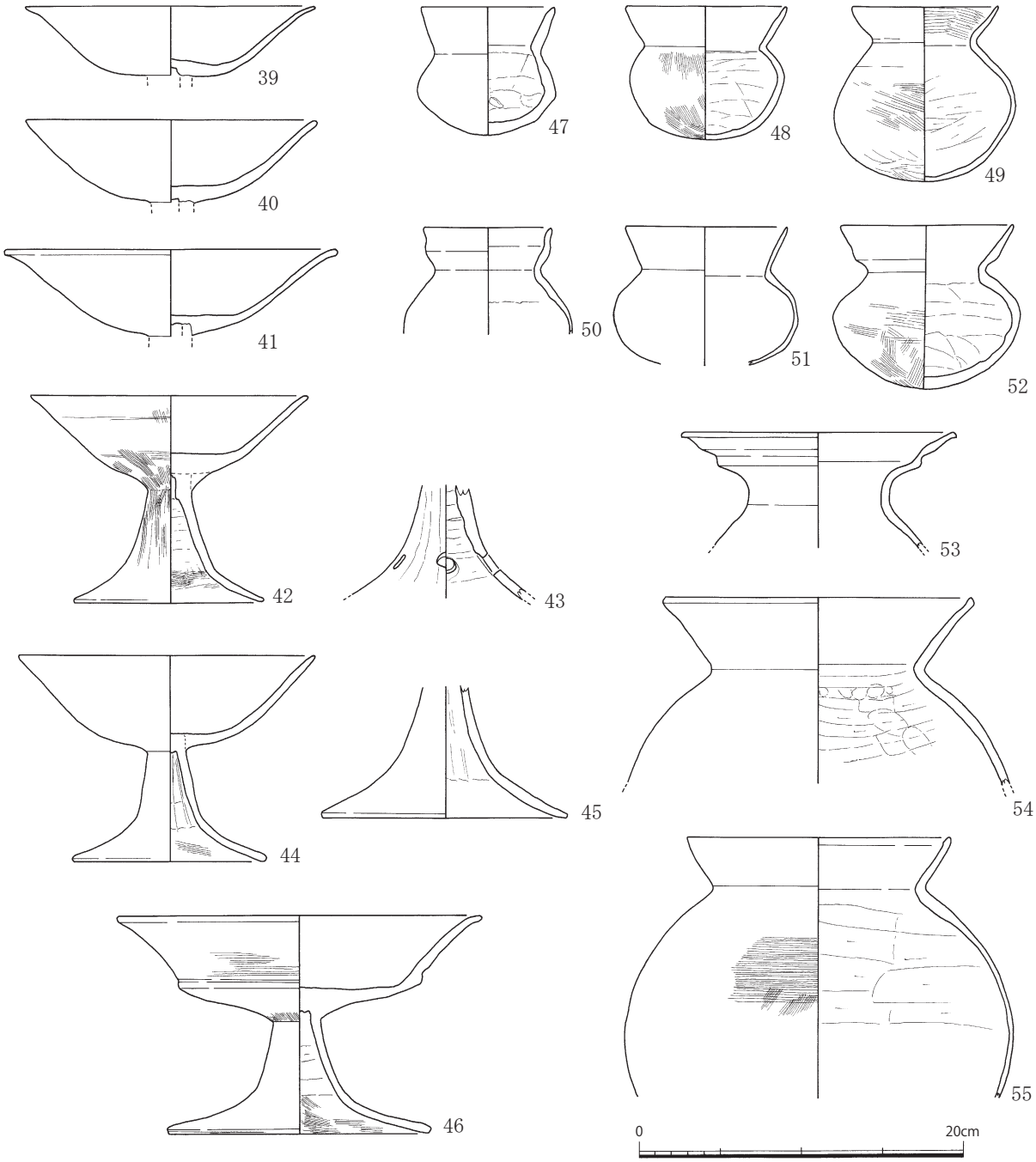
時期は、32 のみ弥生時代後期であるが、後述する土器群２，３より若干時期が下ると考えられる。



第 34 図　Ｆ区自然流路最上層出土遺物実測図



第 35 図　F 区南半部土器群 1 遺物出土状況平面図



第 36 図　土器群 1 出土遺物実測図

第 37 図　Ｆ区南半部・Ｇ北区土器群２遺物出土状況平面図

土器群２、３出土遺物

（1）壺

壺は体部、底部のみの個体も含めると 36 点図化掲載できた。口縁部の形状から広口壺･複合口縁壺･細頸壺・長頸壺・短頸壺の 5 種類に分けた。広口壺については、広口壺Ａ・Ｂ、小形広口壺、垂下口縁広口壺の 4 種類に細別した。種類別に法量、胎土、色調などを観察表にしたものが第 1 表である。

第 38 図　Ｇ北区土器群３遺物出土状況平面図

広口壺から詳細を記述する。第 39 図 56 ～ 59、63 ～ 66 は口縁部が外反する広口壺Ａである。56 ～ 59 は口縁部のみの個体で、56 は口縁端部に面を有し、円形浮文が施されている。58 も口縁端部に面を持ち、細かい線状の刻み目が施されている。64 はなで肩の体部を持ち、底部は欠損している。口縁端部はわずかに上下に肥厚する面を持ち、沈線が施されている。体部はタタキ技法により成形されているが、タタキ目はハケ調整によりほとんど消されている。63・65・66 は外面ヘラ磨きで仕上げられている。

第 39 図 67･68 は口縁部が上外方に短く伸びる広口壺Ｂである。67 は磨滅が激しく調整は不明である。68 は体部高と最大腹径がほぼ等しい球形の体部を持ち、タタキ技法により成形されている。底部から体部中位まではほぼヨコ方向のタタキ目が残り、体部中位から肩部下まではナナメ方向のタタキ目が残るがこの部分は大半がナデ消されている。肩部から頸部はハケ調整が施されている。

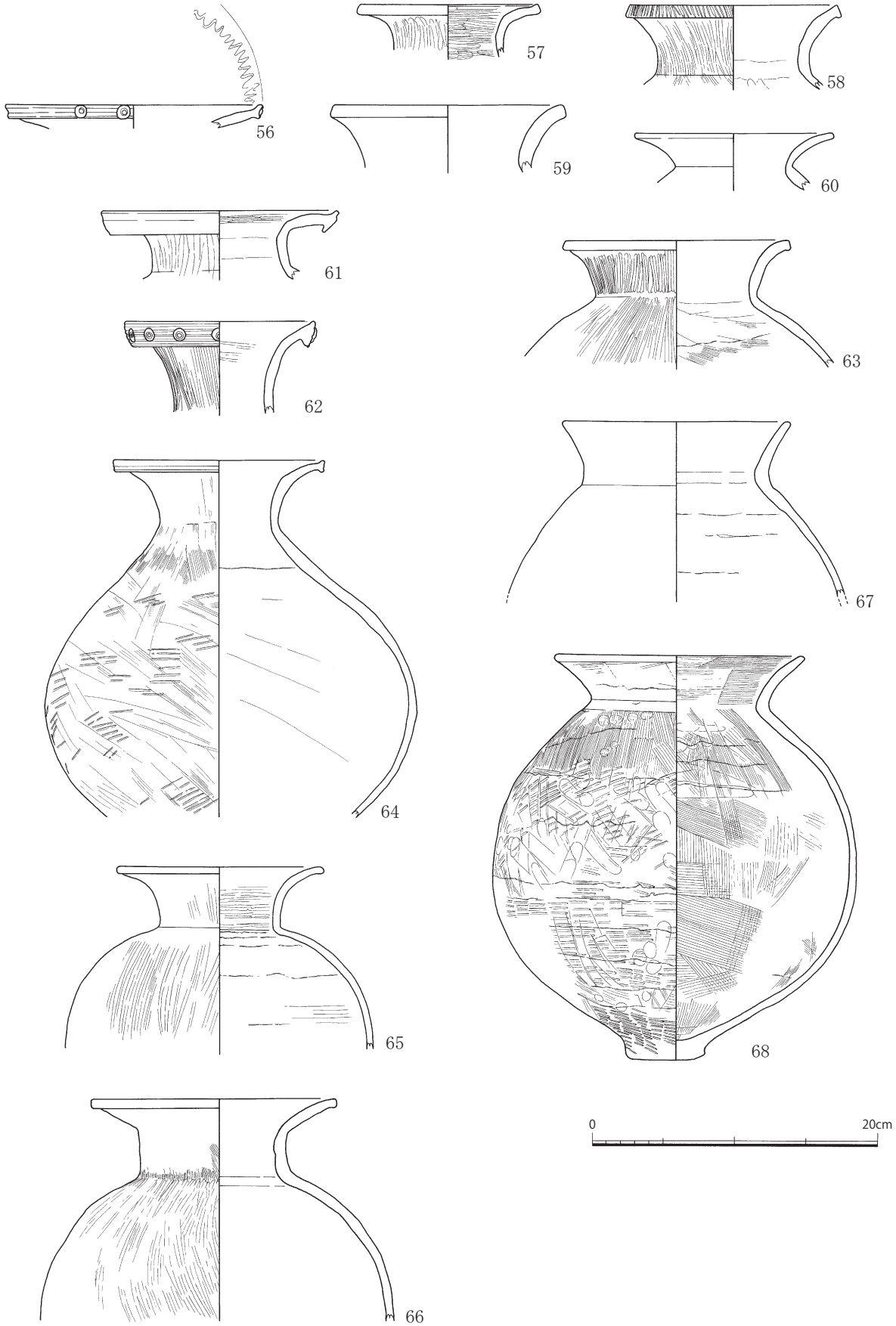
第 39 図 60、第 41 図 88 は小形の広口壺で、口径、頸部径ともに小さい。60 は外反する口縁部を持つ。88 は上外方に短く伸びる口縁部を持ち、体部外面はヘラ磨きが施されている。第 41 図 87 は底体部・89 は体部と頸部のみ残存している個体であるが、87 は 88 と体部の形状が類似していること、89 は頸部の形状から 2 点とも小形広口壺の可能性がある。

第 39 図 61・62 は垂下口縁をもつ広口壺である。61 は頸部から上方にたちあがったのち大きく外反する口縁部を持ち、端部は上下に肥厚する。62 は頸部から上外方に伸びる口縁部を持ち端部は下方に肥厚し、端面に 5 条の沈線、その上から竹管文付円形浮文が施されている。

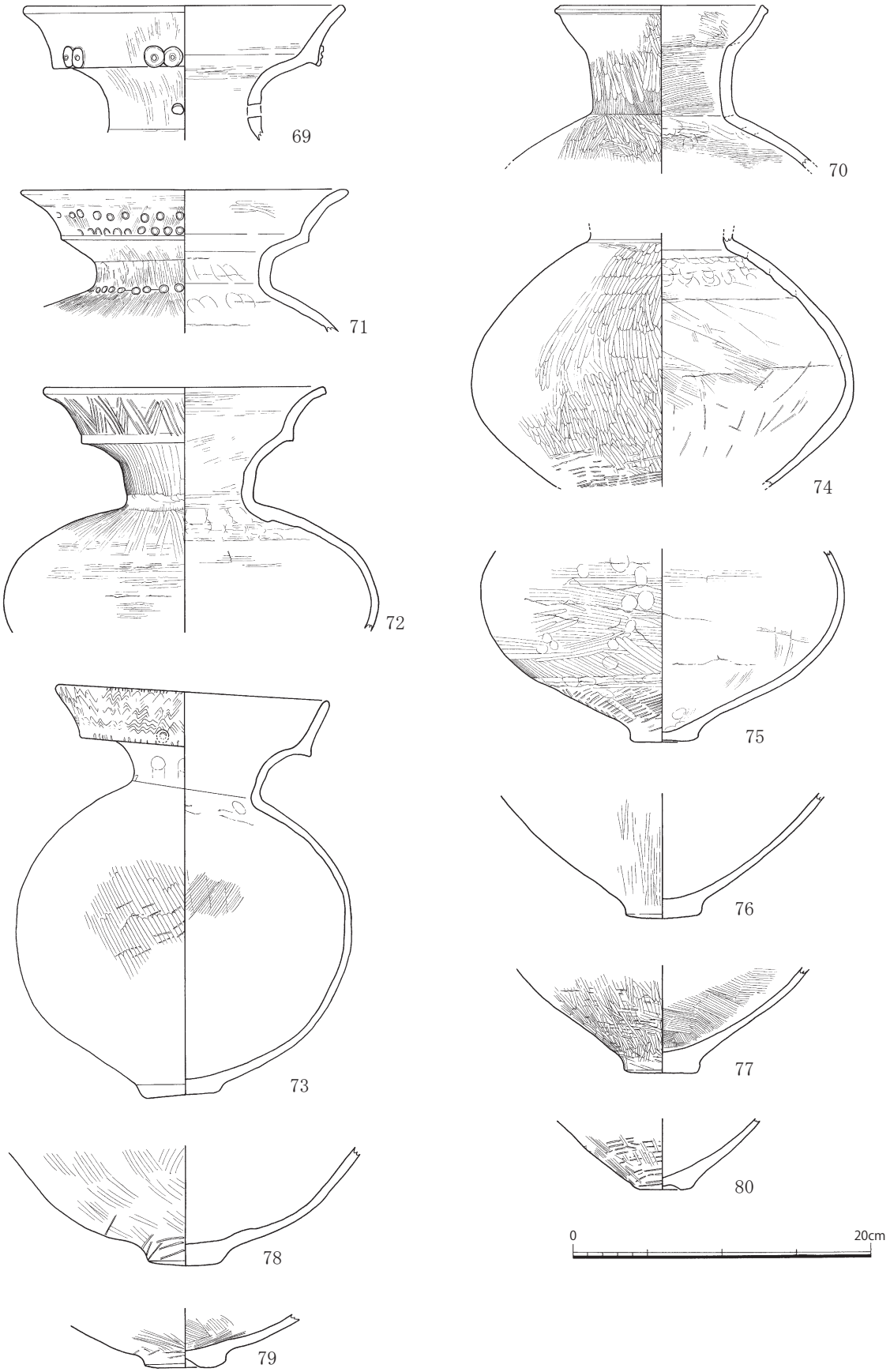
第 40 図 69 ～ 73 は複合口縁を持つ壺である。70 は頸部が長く、それに対して受部と口縁部は短くしかも両者の境の稜（屈曲）がはっきりしない。それ以外の 4 点は頸部が上方にたちあがり、受部は外反し屈曲した後さらに口縁部は外反する。69 は頸部三方に円孔が穿たれており、口縁部外面受部との境推定 7 カ所に 2 個で 1 組の竹管円形浮文が施されている。外面はタテ方向ヘラ磨きで仕上げられている。71 は口縁部外面に竹管文を上下 2 段、さらに頸部にも 1 周施されている。外面ヘラ磨きで仕上げられている。72 は口縁部外面に櫛描き状の鋸歯文が施されている。頸部径は 69・71 に比べると小さく、体部は扁平である。外面はヘラ磨きで仕上げられている。73 は磨滅が激しく全体に調整・装飾がはっきりしないが、口縁部外面に波状文と円形浮文、口縁端部と口縁部と受部との境の上下 2 カ所に刻み目

写真図版No.	挿図No.	遺物No.	種類	法量								胎土	色調 上段（内面） 下段（外面）	備考
				口径		器高		頸部径		底径				
	39	56	広口壺A	推	18	残	16.5					密	7.5YR6/6 橙 5YR6/8 橙	
	39	57	広口壺A	推	12.4	残	3.7					密	5YR5/6 明赤褐色 5YR5/6 明赤褐色	
8	39	58	広口壺A	推	14.4	残	6	推	11			粗	2.5YR6/8 橙 2.5YR6/8 橙	
	39	59	広口壺A	推	16	残	4.8	推	11.7			密	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙	
	39	63	広口壺A	推	15.6	残	8.6	推	11.3			粗	5Y2/1 黒 10YR8/4 浅黄橙	
7	39	64	広口壺A	推	14.6	残	25.2	推	8.3			やや粗	7.5YR3/1 黒褐 5YR6/6 橙	
8	39	65	広口壺A	推	14	残	12.8	推	8.7			やや密	7.5YR6/2 灰褐 7.5YR7/4 にぶい橙	
8	39	66	広口壺A	推	17.3	残	15.5		10.4			粗	7.5YR7/8 黄橙 7.5YR7/8 黄橙	
8	39	67	広口壺B	推	15.6	残	12	推	13			密	10YR7/6 明黄褐 5YR6/8 橙	
8	39	68	広口壺B		16.9		28		12.4		5.6	密	5YR7/8 橙 5YR7/6 橙	
	39	60	小型広口壺	推	14	残	4	推	8.2			粗	5YR5/8 明赤褐 5YR5/8 明赤褐	
	41	88	小型広口壺	推	11.7	残	13.9	推	9.1			やや密	7.5YR6/6 ～ 7.7YR5/4 橙 ～にぶい褐 7.5YR6/6 ～ 7.7YR5/4 橙 ～にぶい褐	
	41	89	小型広口壺？			残	12.2	推	8.2			粗	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙	
	41	87	小型広口壺？			残	13.9				3.8	粗	5YR6/8 ～ 5/8 橙～明赤褐 5YR6/8 ～ 5/8 橙～明赤褐	
7	39	61	垂下口縁広口壺		16.4	残	4.9	推	9.8			粗	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	
7	39	62	垂下口縁広口壺		13.2		6.5	推	7			やや粗	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙	
7	40	69	複合口縁壺		21		9.2	推	10.2			粗	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	
7	40	70	複合口縁壺	推	13.4	残	9.4		9.8			やや蜜	10YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/2 にぶい黄橙	
7	40	71	複合口縁壺	推	21.8	残	8.3		11.8			粗	5YR7/6 橙 5YR6/8 橙	
7	40	72	複合口縁壺		18.6		15.9		8.4			粗	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙	
7	40	73	複合口縁壺	推	18		27.8		8.6		4.7	密	7.5YR8/6 浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙	
9	41	81	細頸壺	推	11.5	推	19.4		6		1.9	密	5YR7/8 橙 5YR6/6 橙	
9	41	82	細頸壺	推	10.8		25.7		4.6		2.5	やや粗	2.5Y5/1 黄灰 10YR7/4 にぶい黄橙	
9	41	83	細頸壺			残	9.5				1.8	やや粗	10YR8/1 灰白 10YR7/4 にぶい黄橙	
9	41	85	細頸壺			残	13.9	推	5.1		3	やや密	2.5Y3/1 黒褐 5YR6/6 橙	
	41	86	長頸壺？			残	7	推	8.6			密	7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙	
9	41	84	短頸壺		10.5		20.6		11		3.8	やや粗	2.5YR7/8 橙 2.5YR7/8 橙	
8	40	74				残	17	推	9.6			密	10YR7/2 にぶい黄橙 7.5YR7/4 にぶい橙	体部のみ
8	40	75				残	12.8				4.6	やや粗	10YR8/4 浅黄橙 7.5YR6/6 橙	底体部のみ
	40	76				残	8.4				4	粗	10YR5/3 にぶい黄橙 10YR5/3 にぶい黄橙	底部のみ
	40	77				残	7				4.9	やや密	10YR2/1 黒 10YR7/6 明黄褐	底部のみ
	40	78				残	8				5	粗	2.5Y3/1 黒褐 5YR5/8 明赤褐	底部のみ
	40	79				残	3.6				5.4	粗	10YR4/1 褐灰 7.5YR6/6 橙	底部のみ
	40	80				残	4.8				4.1	やや粗	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙	底部のみ
	41	90				残	1.7				2.4	蜜	5YR6/8 橙 5YR6/8 橙	底部のみ

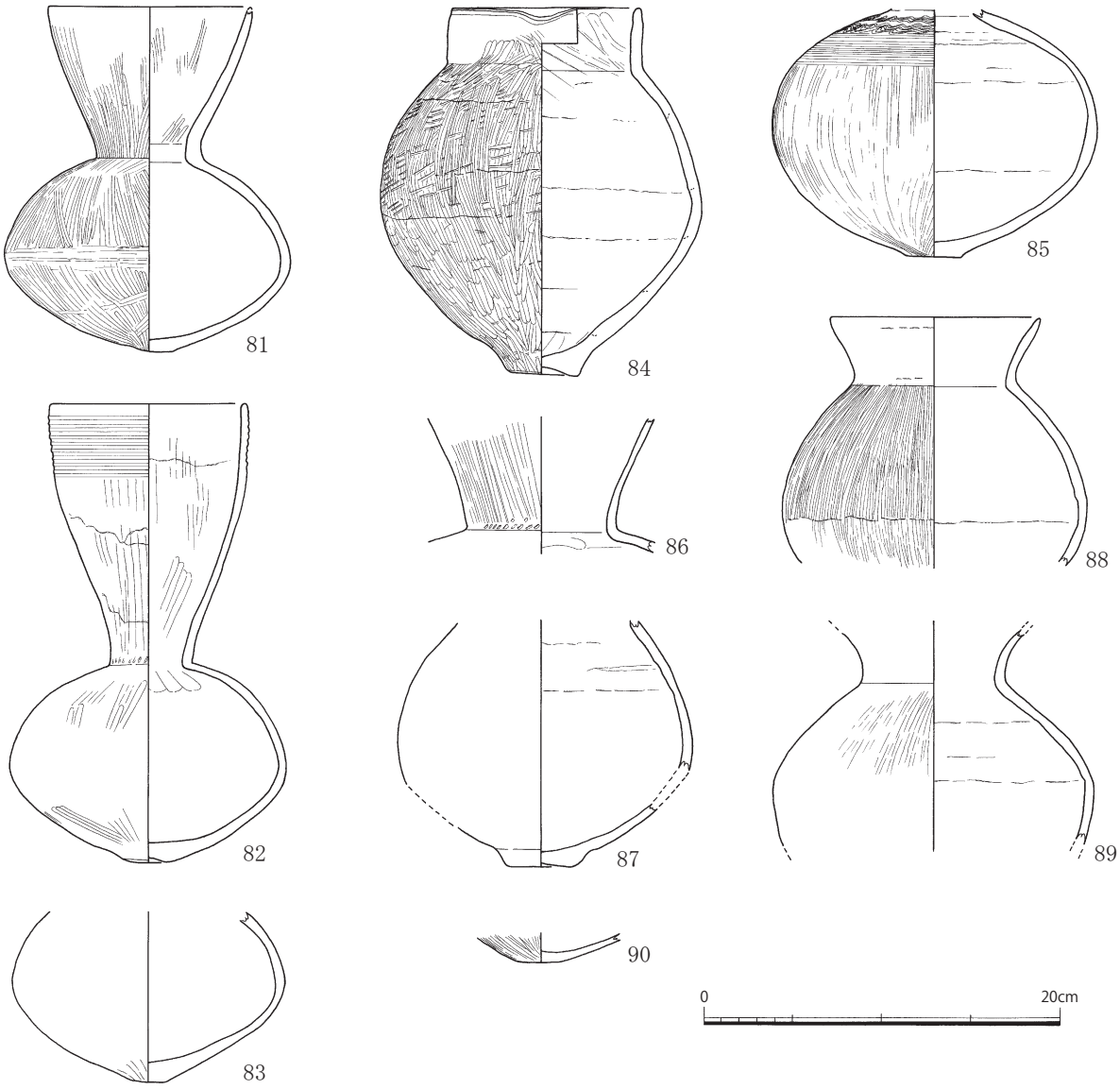
第１表　壺観察表



第 39 図　土器群２・３出土壺実測図（１）



第 40 図　土器群２・３出土壺実測図（２）



第 41 図　土器群２・３出土壺実測図（３）

が施されている。体部はほぼ球形で、タタキで成形した後ヘラ磨きが施されている。

第 41 図 81 ～ 83、85 の 4 点は細頸壺である。81 はやや肩がはるがそろばん玉のような扁平な体部を持ち、口縁部は上外方に伸びる。口縁部高と体部高はわずかに体部高が大きい。外面はヘラ磨きによりしあげられている。82 も 81 と同様な形状の体部をもち、口縁部も上外方に伸びるが、口縁部高は体部高の約 1.4 倍あり、口縁部外面上部には 10 条の浅い沈線が施されている。83 は口頸部より上部を欠損しているが、体部の形状、また胎土・色調が 82 とほぼ同一であるため、細頸壺とした。85 は体部のみ残存で、口縁部を欠損しているが、頸部径が推定 5.1 ㎝小さいことから細頸壺とした。体部肩部に直線文、波状文が施されている。これらの細頸壺はいずれも底径が 3 ㎝以下で非常に安定が悪く、器台に載せて使用したと思われる。

第 41 図 86 は長頸壺である。頸部のみの出土であるが、頸部径が推定 8.6 ㎝とやや広めであること、口縁部が上外方に伸びていることから、長頸壺とした。外面はヘラ磨きで仕上げられている。

第 41 図 84 は短頸壺である。最大腹径は体部の中位にもつ弥生形甕のような形状である。口縁部は上方

に短く伸びて終わる。体部は弥生形甕と同様タタキ技法により成形されているが、タタキ目はヘラ磨きで丁寧に消されており、わずかに肩部に残る程度である。口縁部には片口が作られている。

第 40 図 74 は底部を欠損しており体部のみの個体であるが、そろばん玉型のやや扁平な体部で外面はヘラ磨きが施されている。75 は底体部のみの個体で外面底部付近はタタキ目が残る。76 ～ 80 は底部のみの個体である。外面はすべてヘラ磨きが施されているが、77・80 はヘラ磨きが粗く、下に施されているタタキ目が残る。

（2）甕

図化掲載した資料は 57 点である。第 47 図 127 の 1 点を除きその他はすべて外面にタタキ目を残す弥生形甕である。器高により次の 3 グループに分けた。

大型甕－器高が 25cm 以上

中型甕－器高が 25cm 未満 20cm 以上

小型甕－器高が 20cm 未満

すべての甕について以下の項目について調べ、観察表にしたものが第２、３表になる。

・法量（口径・器高・頸部径・底径・最大腹径）

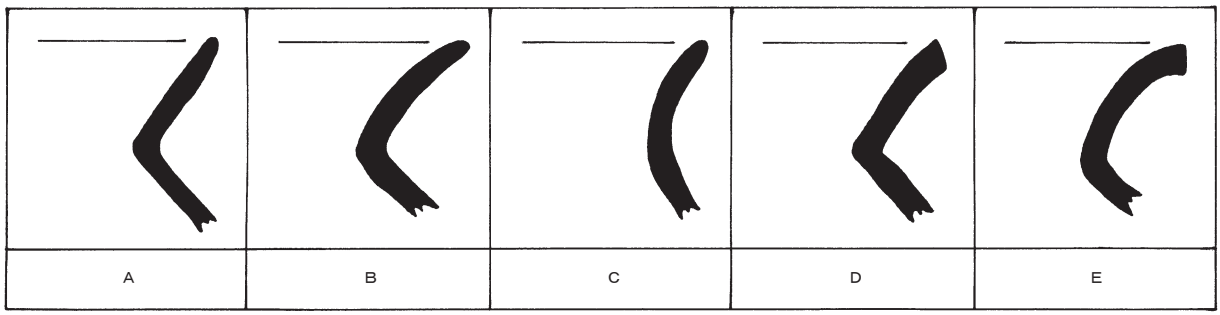
・口縁部の形状（A ～ E の５タイプ）（第 42 図参照）

・底部の形状（ａ～ｃ）（第 42 図参照）

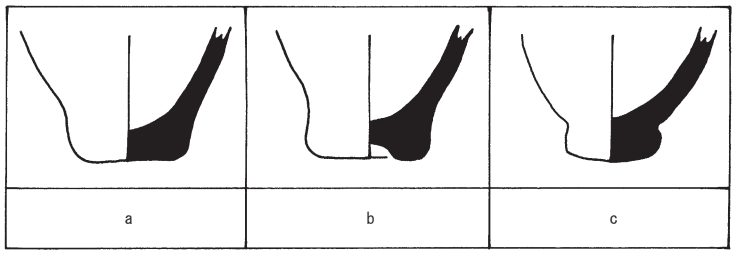
・外面タタキの方向（下～上）Ｎがナナメ、Ｙがヨコ方向

・胎土・色調

・最大腹径／器高



a. 甕の口縁部の形状



b. 甕の底部の形状

第 42 図　土器群２・３出土甕分類図

観察表は器高の高い個体から順に並べている。残存高より器高が推定できるものはそれぞれのグループの最終に続いて掲載した。底部のみ残存の個体は最後尾に掲載している。この観察表をもとに大型の甕のグループからその特徴など詳細を記述する。

写真図版番号	挿図番号	遺物番号	法量										口縁部の形状	底部の形状	外面タタキの方向（下～上）	胎土	色調 上段（内面） 下段（外面）	備考 ()の数字は最大腹径／器高を示す
			口径		器高		頸部径		底径		最大腹径							
10	43	93		18.5		34.5		14.3		5.5		26.7	E	b	N-N-N-N	粗	7.5YR7/6 橙 5YR7/8 橙	大型甕（0.77）
10	43	94	推	17		33.2		13.4		5.2		27.5	E	b	N-N-N-N	粗	7.5YR6/6 橙 7.5YR6/6 橙	大型甕（0.83）
10	44	100		20	復	32.9		15.8		5	推	25.8	B	b	Y-Y-Y-N	粗	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙	大型甕（0.78）
11	43	92		16.6		32.2		13.6		4.5		22.8	E	b	N-N-N-N	やや密	5YR5/6 明赤褐 5YR6/6 橙	大型甕（0.71）
10	45	106	推	18.4		31.7	推	14.6		4.7		24.5	A	a	Y-Y-Y	粗	5YR7/8 橙 5YR7/8 橙	大型甕（0.77）
12	44	99	推	19.2		31		14.9		4.7		24	D	b	Y-N-N-Y	粗	5YR6/8 橙 5YR7/8 橙	大型甕（0.77）
11	43	91		16.5		30.6		13.9		4.8		24.1	E	b	N-N-N-N	密	5YR6/8 橙 5YR6/8 橙	大型甕（0.79）
12	45	103	推	15.6		30.3		12.9		4.5		23.6	C	b	N-Y-Y-Y	粗	10YR8/3 浅黄橙 5YR7/8 橙	大型甕（0.78）
11	45	105	推	17.3		29.3		14.1		3.7		23.4	D	a	Y-Y-Y-Y	やや粗	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	大型甕（0.80）
10	44	96		15.8		29		12.4		4.8		23.2	B	a	Y-Y-Y	やや粗	10YR7/6 明黄褐 10YR7/6 明黄褐	大型甕（0.80）
10	44	95	推	15.9		27.9	推	12.2		5.8		22.3	B	a	Y-Y-Y-Y	やや粗	2.5YR6/6 橙 2.5YR6/6 橙	大型甕（0.80）
12	45	102	推	17.2		27.4		13.7		5.2		22.8	B	a	Y-Y-Y	やや粗	10YR7/6 明黄褐 10YR7/4 にぶい黄橙	大型甕（0.83）
12	44	97		16.4		26.9		12		4.3	推	21.3	B	a	N-N-N-N	やや粗	2.5Y5/2 暗灰黄 5YR7/6 橙	大型甕（0.79） 底部外面に刺突痕あり タタキが細い
11	44	98		16		26.1		13.5		4.7		20.8	E	b	N-Y-Y-N-N	やや密	5YR6/6 橙 7.5YR6/6 橙	大型甕（0.80）
	45	101	推	16.8		25.5	推	13.8		4.5	推	20.8	B	b	Y-Y-Y-Y	粗	10YR7/3 にぶい橙 10YR7/3 にぶい橙	大型甕（0.82）
	45	104			残	25.8				5.8	推	23		b	Y-Y-Y	粗	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	口縁部欠損 大型甕？
	46	114	推	14.3	復	24.8	推	11.6	推	5.6	推	21.6	A	b	Y-N-N	粗	7.5YR6/6 橙 7.5YR7/6 橙	中型甕（0.87）
11	46	109		15.8		24.4		12.6		3.6		18.9	B	b	Y-N-Y	密	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	中型甕（0.77）
	46	113	推	18.7	推	24	推	15.1		4.3	推	19.3	B	b	Y-Y-Y	やや粗	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙	中型甕（0.80）
12	46	111	推	16		23.7		12.4		4.6		20.4	D	b	N-N-N-N	粗	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙	中型甕（0.86）
13	47	124	推	17.2		21.3	推	14.3		4.3		18.6	B	a	N-N-N-N	やや粗	7.5YR7/4 にぶい橙 5YR7/6 橙	中型甕（0.87）
16	47	128		18.2		20.1		14.4		4.5		19.6	B	a	N-Y	密	5YR7/8 橙 5YR7/8 橙	中型甕（0.98）
13	47	125	推	15.7		20.1	推	13		4.1		17.3	B	b	Y-Y-N-N	やや密	10YR7/4 にぶい黄橙 5YR6/6 橙	中型甕（0.86）
	47	126	推	15.8	残	20	推	12.3			推	19.2	B		N-Y-N	粗	10YR7/4 にぶい黄橙 7.5YR7/6 橙	中型甕（0.96）
	46	107		17.7	残	7.9		13.5					A			粗	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙	底部欠損 中型甕？
	46	108	推	15.8	残	12	推	12.8			推	19.7	B		Y-Y	やや粗	5YR6/8 橙 5YR6/8 橙	底部欠損 中型甕？
13	46	110	推	15.2	残	17.9		12.4		4.7		18.5	A		Y-Y	粗	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙	底部欠損 中型甕？
	46	112	推	18	残	20.4	推	14			推	20.8	B		N-N-N	やや密	10YR8/4 浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙	底部欠損 中型甕？
	47	122	推	16.8	残	14.9		13.8				16.3	A		Y-Y-Y	粗	10YR7/3 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	底部欠損 中型甕？
16	47	127		15.5	残	19.8		13.9				23.3				やや密	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙	底部欠損 外面ハケ調整 阿波からの搬入品
16	47	120		13.2		17.5		10		3.9		15.4	D	b	N-N-N	やや密	5YR5/6 明赤褐 5YR5/6 明赤褐	小型甕（0.88）
13	47	123	推	15.8		17.5	推	13.1		3.9		16.2	A	b	N-Y-N	やや粗	10YR7/2 にぶい黄橙 10YR7/2 にぶい黄橙	小型甕（0.93）

第２表　甕観察表１

写真図版番号	挿図番号	遺物番号	法量										口縁部の形状	底部の形状	外面タタキの方向（下～上）	胎土	色調 上段（内面） 下段（外面）	備考 ()の数字は最大腹径／器高を示す
			口径		器高		頸部径		底径		最大腹径							
14	48	145	推	15.4		16.8		12.3		3.9		15.6	A	a	Y- -Y	やや粗	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	小型甕 (0.93)
	48	146	推	13.6	推	16.5	推	10.8	推	3	推	14.2	A	a	N-N-N	密	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙	小型甕 (0.86)
	48	136	推	11.7	推	16	推	9.4	推	4.5	推	12.6	C	c	Y-Y	やや粗	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	小型甕 (0.79)
15	48	144	推	13.9		15.8		10.8		2.3		13.7	B	a	-Y-Y	やや粗	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	小型甕 (0.87)
14	48	142	推	13.8		15.5		11.4		3		14.1	B	b	N-Y-Y	粗	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	小型甕 (0.91)
15	48	134		14.4		15.2		11.6		3.7		13.1	D	a	Y-Y-N	粗	10YR6/4 にぶい黄橙 10YR6/3 にぶい黄橙	小型甕 (0.86)
15	48	133		13.7	推	15		10.3	推	2.9		12.5	D	a	Y-Y-N	粗	10YR7/2 にぶい黄橙 10YR7/3 にぶい黄橙	小型甕 (0.83)
14	48	140	推	13.6		14.7		10.3		4		13.2	B	b	N-Y-Y-N	やや粗	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	小型甕 (0.90)
14	48	137		11.5		14.5		10.1		3.4		12.4	C	c	N-N-Y	粗	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙	小型甕 (0.86)
15	48	131	推	13.2		14.4		10.6		3.5		14.1	B	a	N-N-N	粗	2.5YR5/8 明赤褐 2.5YR5/8 明赤褐	小型甕 (0.98)
15	48	143	推	14.2	推	14.4		11.6	推	3.2		14.3	B		Y-Y-Y	粗	2.5YR6/6 橙 2.5YR6/6 橙	小型甕 (0.99)
13	48	139		13.8		14		11.4		3.5		13.9	B	a	N-N-N	密	2.5Y6/1 黄灰 5YR6/6 橙	小型甕 (0.99)
14	48	135		11.4		14		9.1		4.5		11	C	c	Y-N	粗	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙	小型甕 (0.79)
16	48	138	推	11.2	推	13.5	推	9		4	推	13.4	A	a	N-N- -N	やや粗	10YR6/1 褐灰 10YR7/4 にぶい黄橙	小型甕 (0.99)
15	48	132	推	13.2		12.2	推	11.9		3.7		13.7	B	a	Y-N-N	粗	5YR5/8 明赤褐 5YR5/8 明赤褐	小型甕 (1.12)
	47	116	推	14.6	残	8.7	推	12			推	13.4	A		Y-Y	粗	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	底体部欠損 小型甕？
	47	117	推	14	残	9.8	推	11.8			推	16	B		Y-N	やや密	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	底体部欠損 小型甕？
	47	118	推	13.8	残	11	推	11			推	15.4	E		N-N	密	2.5YR8/3 浅黄 5YR6/8 橙	底体部欠損 小型甕？
	47	119			残	9.2		11.8							Y	粗	7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部、 底部欠損 小型甕？
	47	121			残	18.6	推	11		4.6	推	16.5		c	Y- -Y-Y	やや密	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙	口縁部欠損 小型甕？
13	48	141			残	15.2	推	11.3		4		13.9		a	N-N-Y-N	密	10YR8/2 灰白 5YR7/6 橙	口縁部欠損 小型甕？
16	48	147	推	13.2	残	13.8		11				13.7	A		Y-Y- -N	密	5YR6/6 ～ 7.5YR7/6 橙 5YR6/6 ～ 7.5YR7/6 橙	底部欠損 小型甕？
	46	115			残	9.5				4.3					N	粗	2.5Y5/2 暗灰黄 5YR5/6 明赤褐	底部のみ
	47	129			残	5.9				4.2				b	N	やや粗	7.5YR4/2 灰褐 7.5YR4/2 灰褐	底部のみ
	47	130			残	8.2				4.5				b	Y	粗	10YR4/2 灰黄褐 5YR5/4 にぶい赤褐	底部のみ

第３表　甕観察表２

大型の甕は第43図91～94、第44図95～100、第45図101～106の16点で、104は口頸部を欠損している。器高は93の34.5㎝が最大で、これらの大型の甕は最大腹径／器高が0.71～0.83の間に収まる。口縁部の形状はA～Eまでの五種類があり、底部の形状はａ・ｂ二種類がある。外面タタキの方向は下～上までナナメ方向のもの、ヨコ方向のもの、方向が変化するものが存在する。16点の甕のうち、口縁部の形状と外面タタキの方向が同一である甕のグループが2群抽出できた。

●口縁部の形状がEで外面タタキの方向がすべてナナメ方向

第43図91～94はこのグループに属する。口縁部の形状がEで、口縁端部に面がある。４点共外面タタキは角度がかわるものの、おおむねナナメ方向にほどこされている。体部は肩が張り、最大腹径は体部の中位以上にある。底部と体部の継ぎ目はタタキの上からナデ、指おさえが目立ち、とくに94は底部と体部の継ぎ目を縦方向にナデ、体部のタタキもところどころナデ消されている。第44図98は上記の4点に比べると、器高、最大腹径など一回り小さいが、口縁部の形状はEであり、外面タタキは一部ヨコ方向が入るが、おおむねナナメ方向であり、このグループに属すると思われる。

●口縁部の形状がBで外面タタキの方向がすべてヨコ方向

第44図95・96、第45図101・102がこのグループに属する。口縁部の形状Bで、口縁部は外反し、端部が丸く終わる。外面タタキはおおむねヨコ方向に施されている。このグループの甕は最大腹径が体部高の中位にあり、とくに95・96は体部の形状が球形に近い。

グループに属さない残りの6点の甕は、口縁部の形状ABCDの順に詳細を記述する。口縁部の形状がAの第45図106は外面タタキの方向はほぼヨコ方向、器壁はやや厚めである。最大腹径は体部の中位にある。

口縁部の形状がBの第44図100は図上で器高を復原した。外面タタキはほぼヨコ方向であるが、肩部はナナメ方向である。同じく口縁部の形状がBの97は底部外面に刺突がある。外面タタキは下～上まですべてナナメ方向で、他の個体に比べタタキ原体の溝幅がせまい。

口縁部の形状がCの第45図103は外面タタキはほぼヨコ方向である。

口縁部の形状がDの甕は第44図99、第45図105の2点で、99は外面タタキの方向が下から順にヨコ、ナナメ、ヨコと変化する。タタキの上からほどこされたナデ、おさえが目立つ。105は口縁部、頸部の屈曲がはっきりしており、外面タタキの方向がほぼ横方向である。

次に器高が25㎝未満20㎝以上の中型の甕について記述する。中型の甕は第46図109・111・113・114、第47図124～126・128の8点で、残存高より中形の甕と推定できるもの6点を含めると14点になる。第47図127は、底部を欠損しているが、外面を縦方向のハケ調整で仕上げられた甕で、阿波地域からの搬入品である。

口縁部の形状はA、B、Dの三種類、底部はａ、ｂの二種類があり、外面タタキの方向は下～上までヨコ方向のもの、ナナメ方向のもの、方向が変化するものが存在する。最大腹径／器高が0.77～0.98と幅があり、最大腹径／器高が0.8以下で大形の甕を一回り小さくしたようなタイプと、最大腹径／器高が1に近い球形に近いタイプ、その中間に位置するタイプが混在する。

大形の甕を一回り小さくしたようなタイプは第46図109・113の2点で、最大腹径／器高は0.8以下になる。109は中形の甕なかで最も体部が細身である。口縁部の形状はB、外面タタキの方向は下から

順にヨコ→ナナメ→ヨコ方向である。113 は体部が一部欠損しており図上で器高を復原しているが、最大腹径／器高が 0.8、口縁部の形状は B、外面タタキの方向はほぼヨコ方向である。

体部が球形に近いタイプは、第 47 図 126・128 の 2 点で、126 は最大腹径／器高が 0.96、128 は 0.98 になる。ともに口縁部の形状は B、外面のタタキの方向は 126 は底部付近はナナメ、体部中位はタタキを上からナデ消し、肩部はナナメになる。128 は底部から体部中位までナナメ、体部中位から頸部までヨコでタタキ目の方向の違いがはっきりわかる。

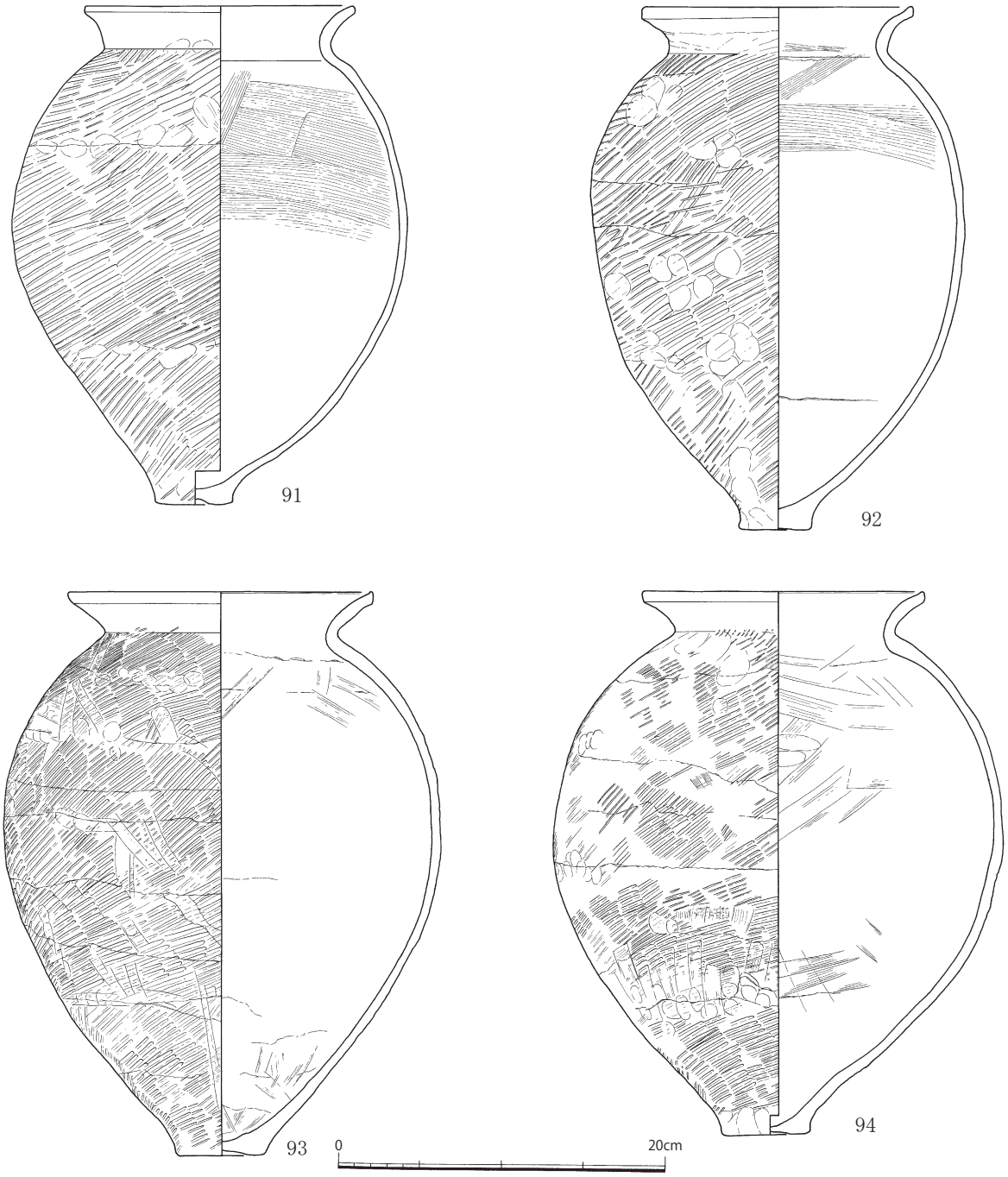
最大腹径／器高が 0.86, 0.87 になる中間タイプは、第 46 図 111･114、第 47 図 124･125 の 4 点である。111 は口縁部の形状が D で外面タタキの方向はやや向きをかえながらも底部から頸部までナナメ方向である。114 は口縁部の形状が A で外面タタキの方向は底部付近はヨコ方向、体部中位から頸部まではナナメ方向になり、頸部径が小さく、肩が張る形状をもつ。124・125 は口縁部の形状が B で、124 は外面タタキの方向は底部から頸部まですべてナナメ方向、外面に粘土の継ぎ目がよく観察できる。125 は外面タタキの方向は底部付近はヨコ方向、体部中位から頸部はナナメ方向になる。

最後に器高が 20 ㎝未満の小型の甕について記述する。小型の甕は第 47 図 120・123、第 48 図 131 ～ 140, 142 ～ 146 の 17 点で、残存高より小型の甕と推定できるもの 7 点を含めると 24 点になる。最も器高の低い甕は 132 で 12.2 ㎝である。

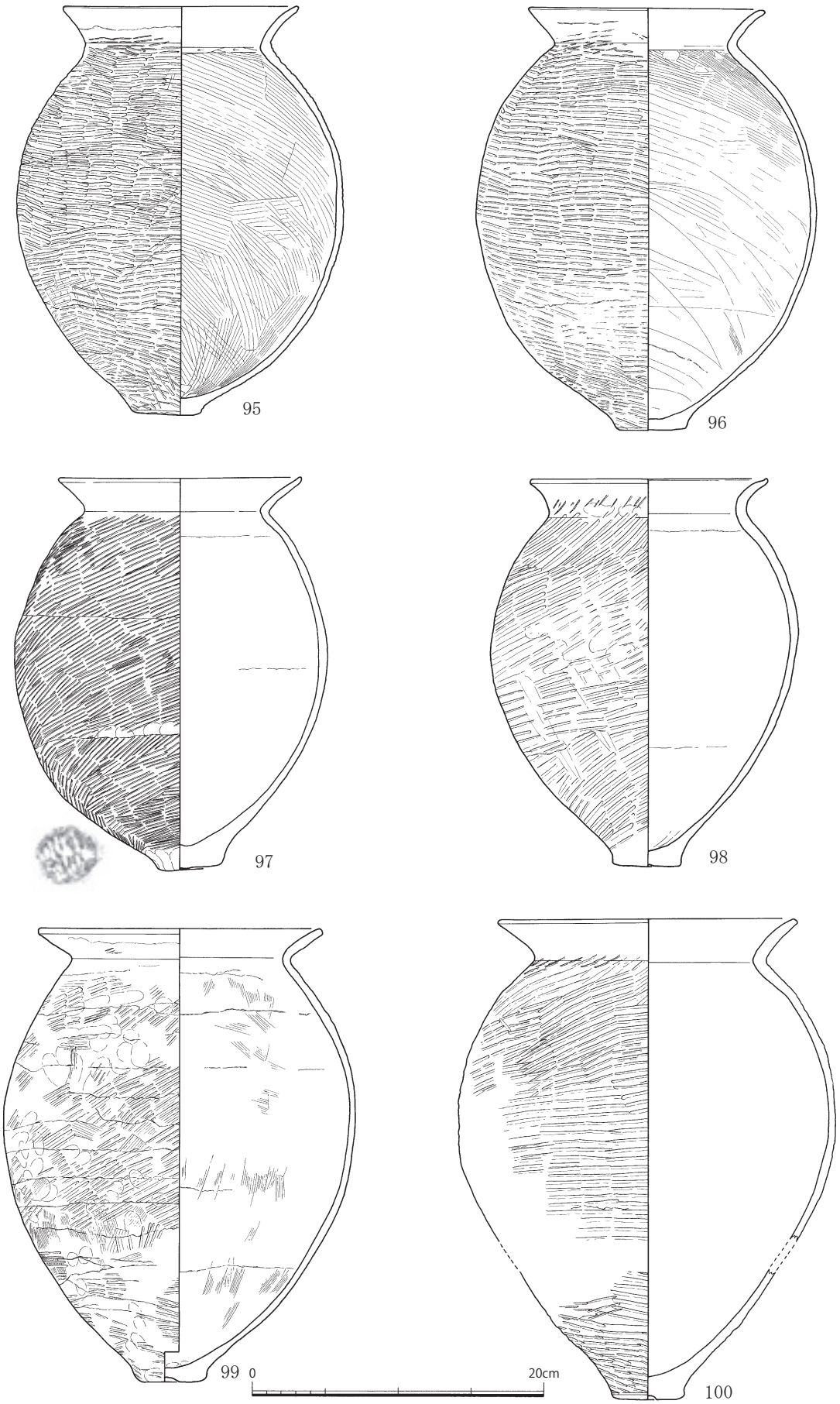
これらの小型の甕の中には、同じ粘土で作られた、色調、形態等がほぼ同じ甕が２組ふくまれている。1 組は 131 と 132 で、胎土は 2 ㎜前後の白・灰色砂粒を大量にふくみ、色調は赤褐色を呈する。口縁部の形状は B、131 のほうがやや器高が高いが、両者ともに最大腹径は体部の 2 ／ 3 位にある。もうひと組は 133 と 134 で、胎土は 3 ㎜前後の茶褐色粒を大量にふくみ、色調はにぶい黄橙色を呈す。口縁部の形状は D で最大腹径は体部の 1 ／ 2 位にある。

この 2 組の甕以外は、全く類似のものは存在しなかったが、全体の形状（とくに底部の形状）と、外面の調整技法から小型の甕に際立った特徴を二点あげてみる。まず一点目の特徴は 135 ～ 137 のようないびつな甕が存在することがあげられる。いずれも底部の形状が c すなわち突出した底部を持ち、口縁部の形状が C である。全体の形態はゆがみが大きく、137 の口縁端部は粘土が波打っている。

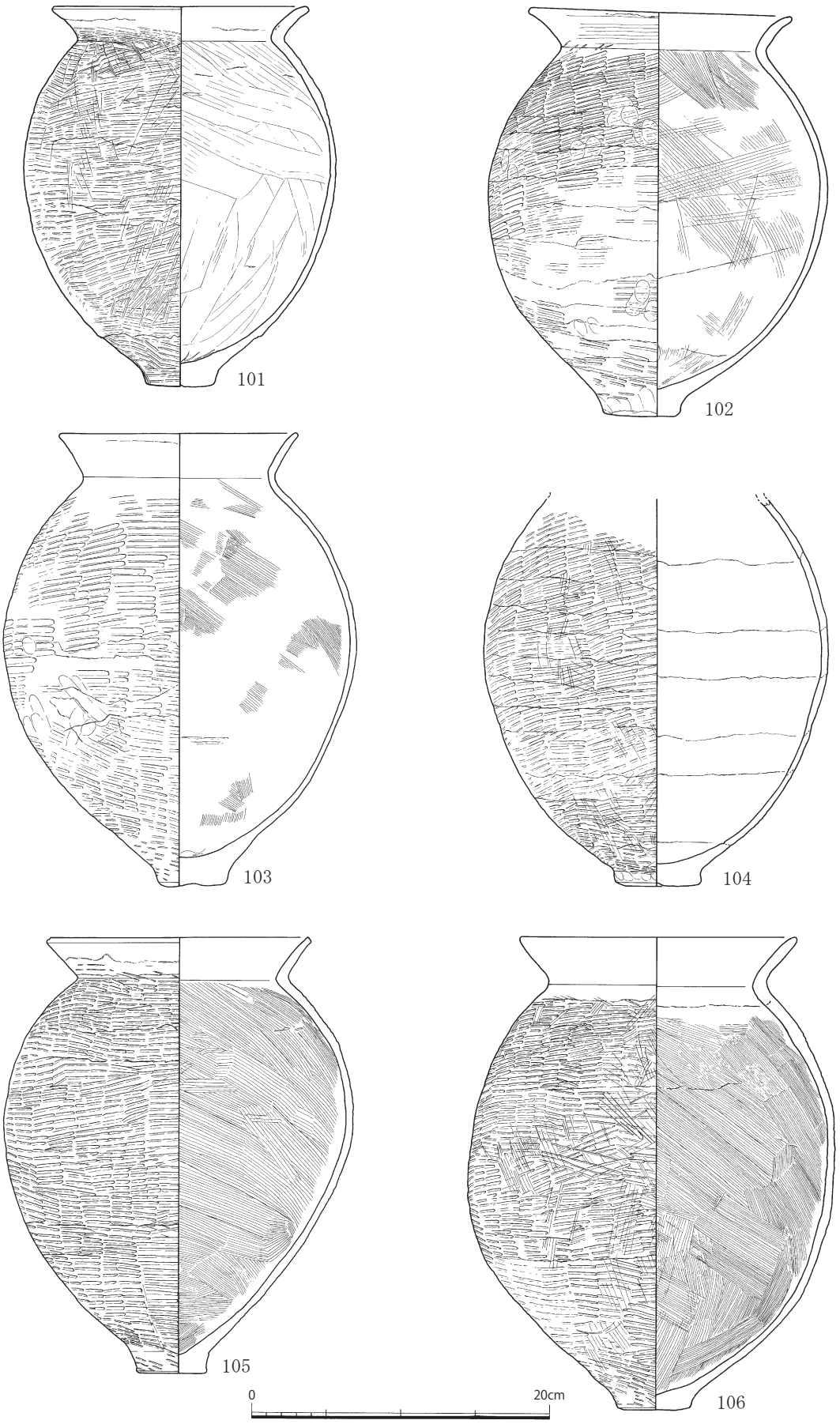
二点目の特徴としてあげられるのは、粘土の継ぎ目やタタキ目をナデやヘラ状工具で大きく消した甕が存在することがあげられる。粘土の継ぎ目を消すことは、小形の甕にとどまらずすべての大きさの甕でも施されているが、とくに小型甕において広範囲のナデ消しが目立つ。138 は体部中ほどのタタキ目を指おさえで消している。143・147 は同じく体部中ほどのタタキ目をヘラ状工具でナデ消している。139・145 は体部下半のタタキ目をナデ消している。144 は底部から体部中ほどまでナデ消し、体部中位から頸部までのタタキ目は部分的にナデ消している。これに対し、120・123・140・142 のようにナデ消しの跡がほとんど見られない個体も存在する。



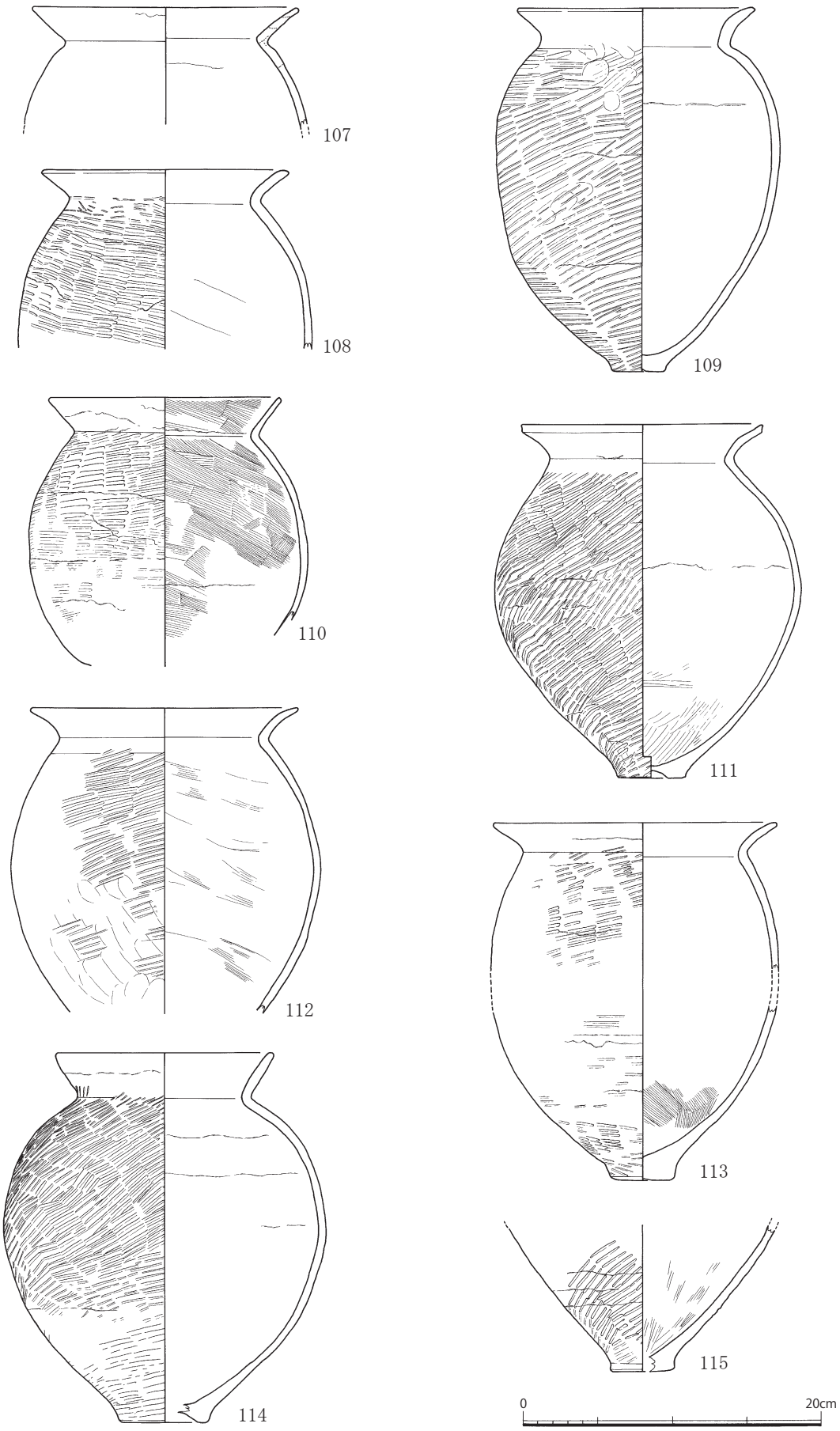
第 43 図　土器群２・３出土甕実測図（１）



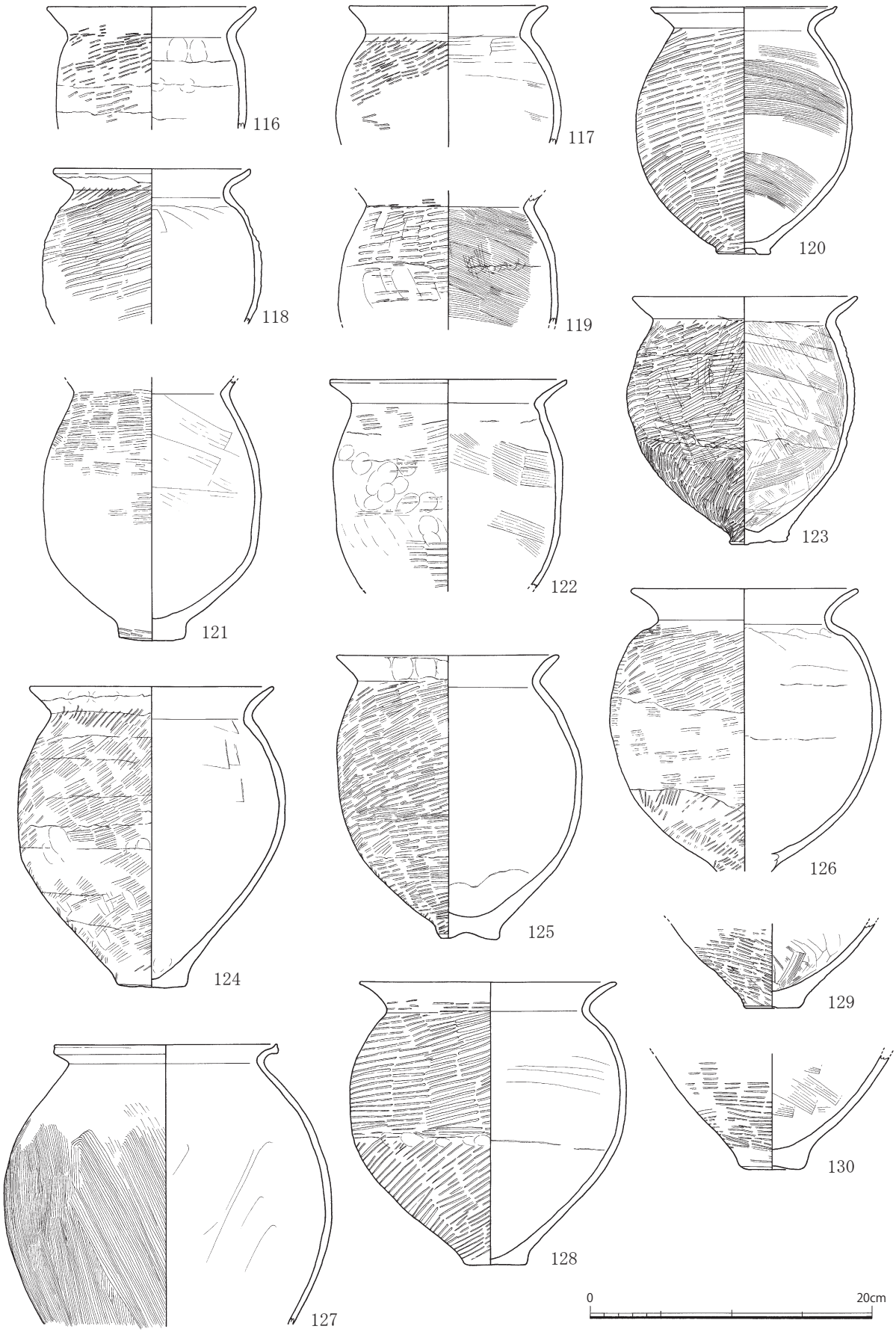
第 44 図　土器群２・３出土甕実測図（２）



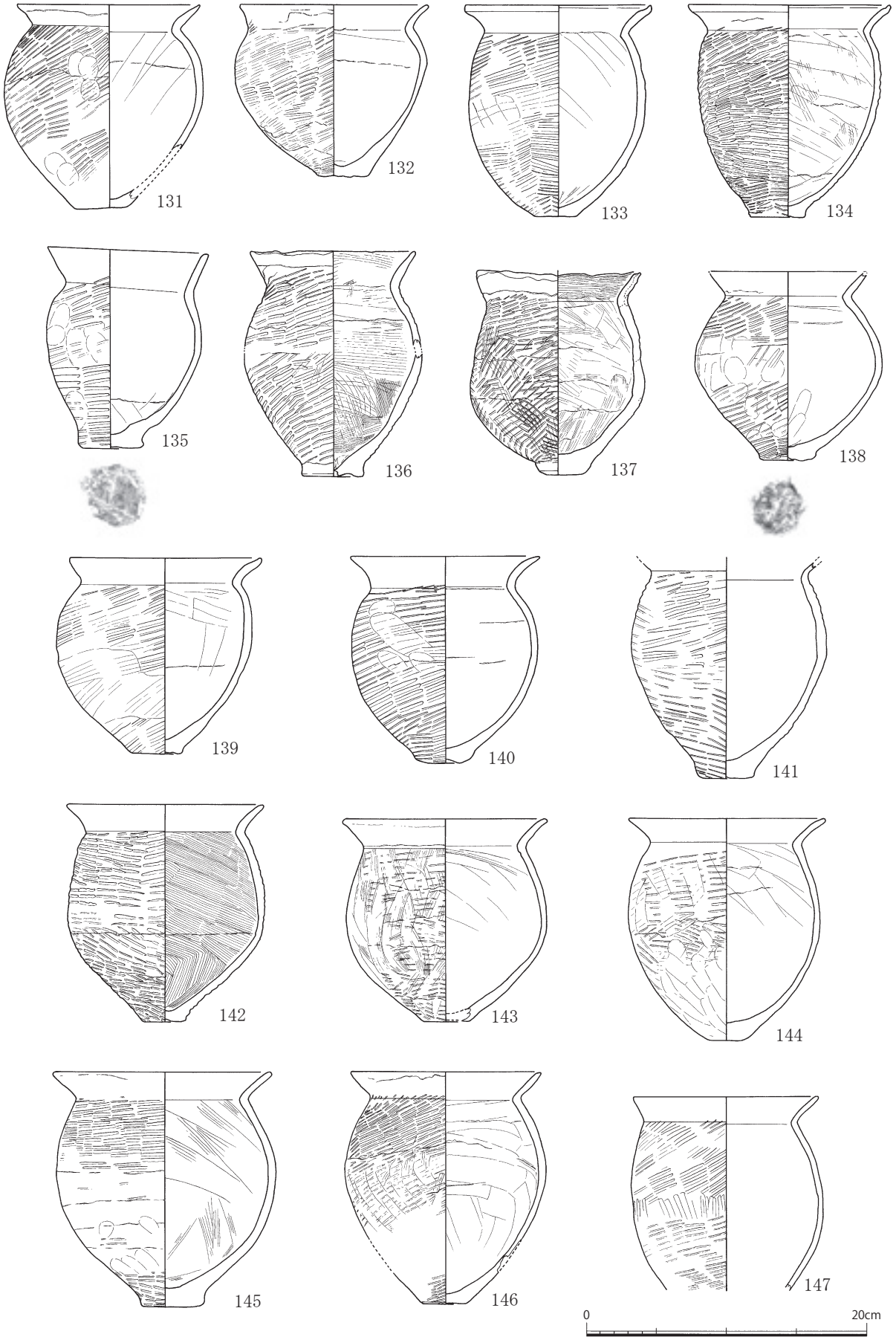
第 45 図　土器群２・３出土甕実測図（３）



第 46 図　土器群２・３出土甕実測図（４）



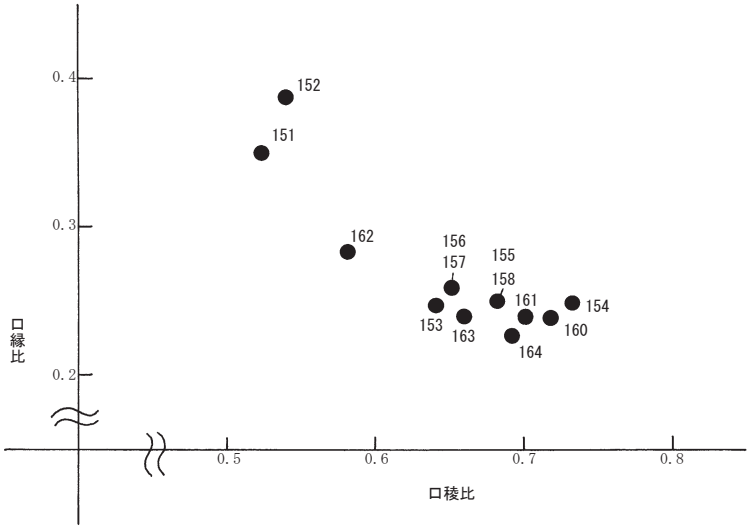
第 47 図　土器群２・３出土甕実測図（５）

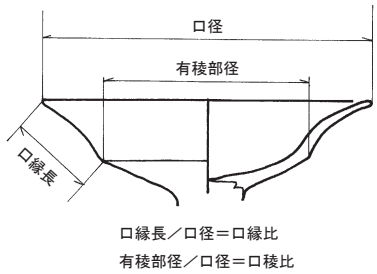


第 48 図　土器群２・３出土甕実測図（６）

（3）高杯

高杯は椀形高杯、有稜高杯があり、坏部、底部のみの個体も含めて 17 点図化掲載した。有稜高杯は杯部の形状、によりＡ、Ｂ２種類に分けた。種類別に法量、胎土、色調などを観察表にしたものが第４表である。有稜高杯は、口径・有稜部径（稜径）・口縁部の長さ（口縁長）の計測値をもとにした指数化の研究（註 1）を踏まえ、観察表には口径に対する稜径比、口径に対する口縁長比も掲載した。この数値をもとに杯部の形状の類似関係をさぐるために縦軸を口縁長／口径、横軸を稜径／口径としたグラフも作成した（第 49 図）。





第 49 図　有段高杯の指数分布

種類別に詳細を記述する。第 50 図 148 ～ 150 は椀形高杯である。3 点共杯部､脚部の形状がことなる。148 の杯部はやや内湾しつつ上外方に伸び、脚柱部は中実で直径 4 ㎝と太く裾部でわずかに下外方に広がる。スカシ孔は現存部分からは認められない。149 の杯部は上外方に伸び、脚部は基部から下外方に広がる。スカシ孔は円形で 3 方に穿たれている。150 は杯部の上部、口縁部は欠損しているが、残存する部分から判断すると 3 点のなかでは、最も丸みをおびた椀に近い杯部をもつ。脚部は基部から下外方に広がり、スカシ孔は円形で 4 方に穿たれている。

第 50 図 151 ～ 158､160 ～ 164 は有稜高杯である。154 は脚底部欠損､151･152･160 は脚部欠損している。有稜高杯は口縁部長と杯部の深さから有稜高杯Ａ・Ｂに細別した。

151・152 は口縁部の長さが長く坏部が深い有稜高杯Ａである。2 点共に杯部のみ残存で、上外方に大きく外反して伸びる口縁部を持つ。口径は 151 が推定 13.6 ㎝、152 が推定 14.8 ㎝と小さい。152 の外面調整はヘラ磨きが施されている。

153 ～ 158、160 ～ 164 の 11 点は有稜高杯Ｂである。外反する口縁部をもち、稜径比・口縁長比もほぼ同じ数値で第 49 図のグラフをみても指数の分布点は集中しているが、162 のみわずかに口縁長比が高く、稜径比が小さい。外面の調整は 162 のみハケ調整で、他の個体は（磨滅が激しくて不明の２点を除けば）ヘラ磨きで仕上げられている。有稜高杯Ｂの脚部の観察をまとめると、次のとおりになる。

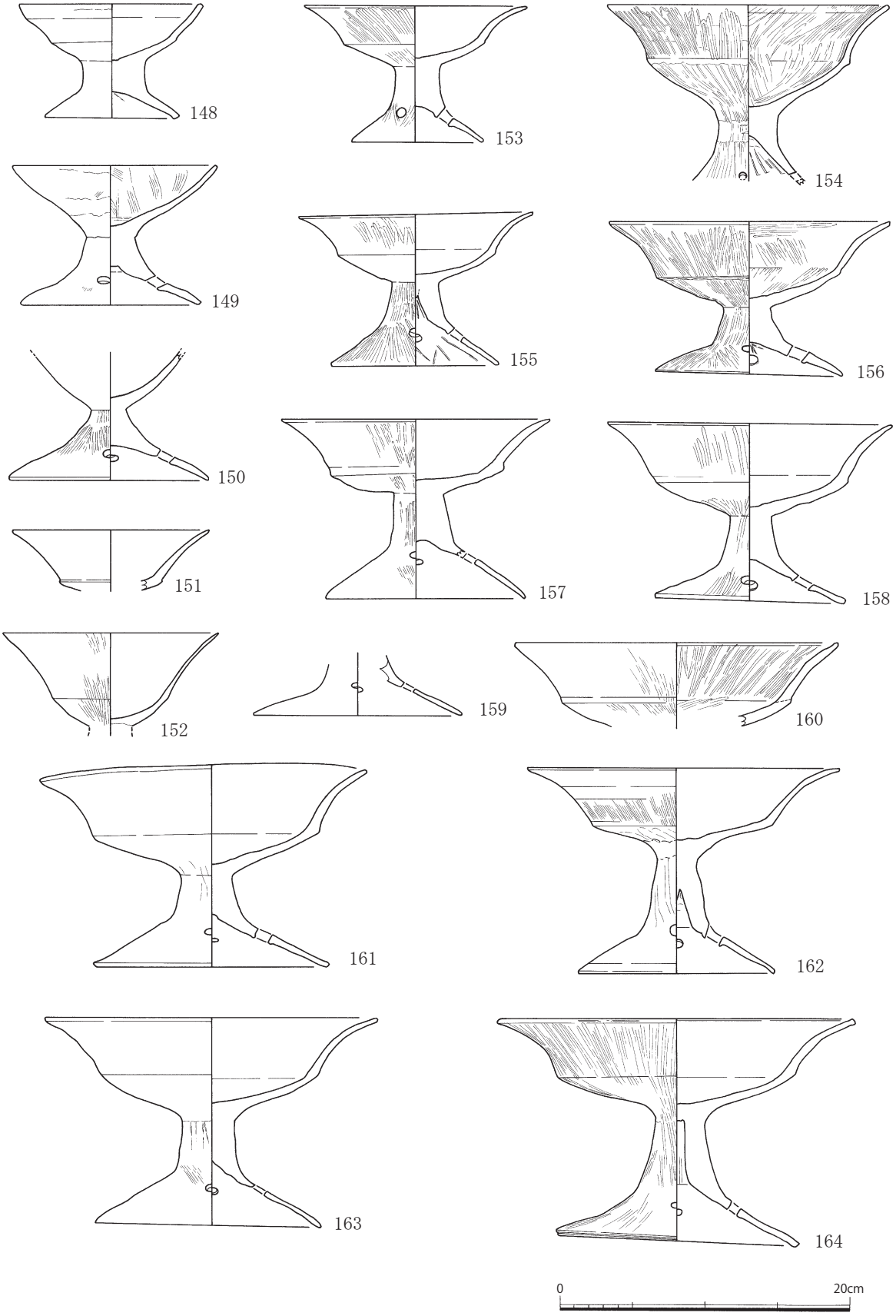
・脚柱部を持つ ──→［脚柱部が中実］　→　153・156・157・158・161・163
　　└──→［脚柱部が中空］　→　155・162・164

・脚部が基部から円錐形 ──────▶154

全体の形状を観察すると杯底部が深く脚部が円錐形の 154 や杯部高より脚部高が低い 156 など形態に特徴を持つ個体もある。最も多いのは脚柱部が中実の有稜高坏Ｂで 6 点出土している。

写真図版No.	挿図No.	遺物No.	法量										杯部の形状	脚上部の形状	スカシ孔の形状と数	胎土	色調 上段（内面） 下段（外面）
			口径		有稜部径／口径	口縁長／口径	器高		基部径	底径		脚部高					
19	50	148		12.6				7.8	4.2	推	9.3	3.9	椀形	筒状、中実	不明	密	5YR5/6 明赤褐 5YR5/6 明赤褐
19	50	149	推	14				9.6	3.4	推	12.1	4.7	椀形	円錐形	円形、3	粗	2.5Y6/6 橙 2.5Y6/6 橙
	50	151	推	13.6	0.52	0.35	残	4.1					有稜A			粗	5YR6/8 ～ 5/8 橙～明赤褐 5YR6/8 ～ 5/8 橙～明赤褐
	50	152	推	14.8	0.54	0.39	残	6.4					有稜A			密	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙
18	50	153		15.4	0.64	0.25		9.5	3.1	推	9	5.3	有稜B	筒状、中実	円形、3	密	10YR8/3 浅黄橙 5YR7/6 橙
18	50	158		19.8	0.68	0.25		12.1	3.9		13	5.9	有稜B	筒状、中実	円形、4	粗	10YR8/4 浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙
18	50	155		16.1	0.68	0.25		10.5	3.3		11.5	5.8	有稜B	筒状、中空	円形、4	やや密	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙
	50	157	推	19.6	0.65	0.26		12.3	3.4	推	13.8	7.3	有稜B	筒状、中実	円形、4	やや密	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙
18	50	156		19.4	0.65	0.26		10.4	3.3		12.9	4.5	有稜B	筒状、中実	円形、4	やや密	5YR6/8 橙 5YR6/8 橙
18	50	161		22.4	0.70	0.24		14	3.6		15.9	6.3	有稜B	筒状、中実	円形、4	粗	2.5YR6/6 橙 2.5YR6/6 橙
18	50	164		24.2	0.68	0.23		15.7	3.5		16.4	8	有稜B	筒状、中空	円形、4	やや粗	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙
18	50	162	推	21.5	0.58	0.28	推	14.1	2.7		13.5	8	有稜B	筒状、中実	円形、4	密	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙
18	50	163		23	0.66	0.24		14.3	3.6		15.5	7.2	有稜B	筒状、中実	円形、4	粗	5YR7/8 橙 5YR7/8 橙
	50	160	推	22	0.72	0.24	残	5.7					有稜B			やや粗	5YR6/8 橙 5YR6/8 橙
	50	154	推	19.2	0.73	0.25	残	12.5	4				有稜B	円錐形	円形、数は不明	やや粗	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙
	50	159					残	4.2		推	14.2					やや密	5YR7/8 橙 5YR7/8 橙
	50	150					残	8.7	2.4	推	14	4.8	椀形	円錐形	円形、数は不明	密	7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙

第４表　高杯観察表



第 50 図　土器群２・３出土高杯実測図

（4）鉢

鉢は口縁部のみの個体も含めて 10 点図化掲載でき、小型鉢、有孔鉢、大型鉢がある。種類別に法量・胎土・色調などを観察表にしたものが第５表である。

小型鉢は口縁部、底部の形状からＡ、Ｂ、Ｃの 3 種類に分けた。第 51 図 167・168・170 は平底の底部に内湾しつつ上方に伸びる口縁部をもつ小型鉢Ａである。167 の内面はハケ目が残るが、ナデ調整により仕上げられている。第 51 図 169 は突出した底部に内湾しつつ上方に伸びる口縁部をもつ小型鉢Ｂである。外面底部付近は底部を突出させたときの指おさえ痕がのこり、口縁部体部はナデ調整により仕上げられている。内面はハケ調整の跡が残る。第 51 図 166 は小型鉢Ｃである。平底の底部から内湾しつつ上外方に体部が伸び、口縁部は短く外反する。ナデ調整により仕上げられている。

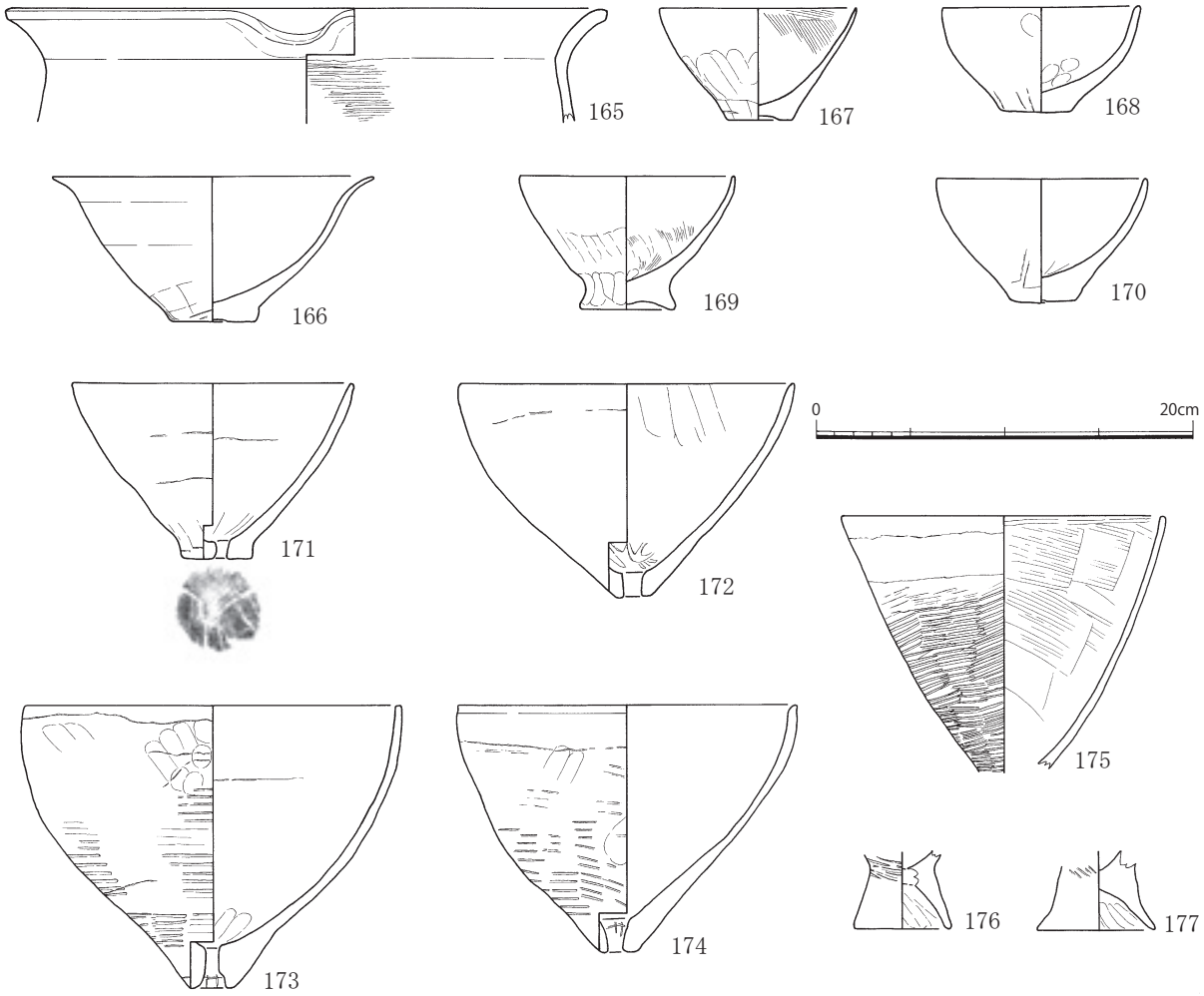
有孔鉢は底部の形状からＡ、Ｂ 2 種類に分けた。第 51 図 172・173・174 は有孔鉢Ａである。突出した底部に穿孔があり、体部は内湾しつつ上外方に伸びる。172 は非常に磨滅が激しく、調整は不明だが、内面底部に工具の当たり痕が残る。173 は口縁端部は面をなし、外面にタタキ目、内面底部に工具の当たり痕が残る。174 は外面にタタキ目が残る。第 51 図 171 は有孔鉢Ｂである。平らな底部に穿孔があり、体部は内湾しつつ上外方に伸び、口縁端部は丸く終わる。内外面とも磨滅が激しく調整は不明である。第 51 図 165 は大型鉢である。口頸部のみ残存で、外反する口縁部に片口が付く。

写真図版No.	挿図No.	遺物No.	種類	法量						胎土	色調 上段（内面） 下段（外面）	備考
				口径		器高		底径				
17	51	170	小型鉢Ａ	推	13.2		6.6		3.4	密	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3 浅黄橙	
17	51	167	小型鉢Ａ		10.3		6		3.5	やや密	10YR7/3 にぶい黄橙 7.5YR6/6 橙	
17	51	168	小型鉢Ａ		10.5		5.5		3.8	密	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙	
17	51	169	小型鉢Ｂ	推	11.3		7.1		5	密	5YR6/6 橙 一部黒斑 5YR6/6 橙	
16	51	166	小型鉢Ｃ	推	17.1		9.7		4.6	密	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	
17	51	171	有孔鉢Ｂ		15		9.3		3.7	密	7.5YR8/4 浅黄橙 7.5YR7/4 にぶい橙	
17	51	172	有孔鉢Ｃ	推	17.8		11.3			やや密	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/8 橙	
17	51	174	有孔鉢Ｃ		18		13.1			やや密	7.5YR7/6 橙 5YR7/6 浅黄橙	
17	51	173	有孔鉢Ｃ		20		15			密	5YR7/4 にぶい橙 5YR6/6 橙	
	51	165	大型鉢	推	32	残	6.1			粗	7.5YR6/6 橙 5YR5/8 明赤褐	
20	51	175	製塩土器		17.3	残	13.5			やや粗	5YR5/8 明赤褐 5YR5/8 明赤褐	
20	51	176	製塩土器			残	4	推	5	やや粗	5YR4/4 にぶい赤褐 5YR4/4 にぶい赤褐	脚台のみ
	51	177	製塩土器			残	4.3	推	6.2	やや粗	7.5R4/6 赤 2.5Y5/8 明赤褐	脚台のみ

第５表　鉢・製塩土器観察表

（5）製塩土器

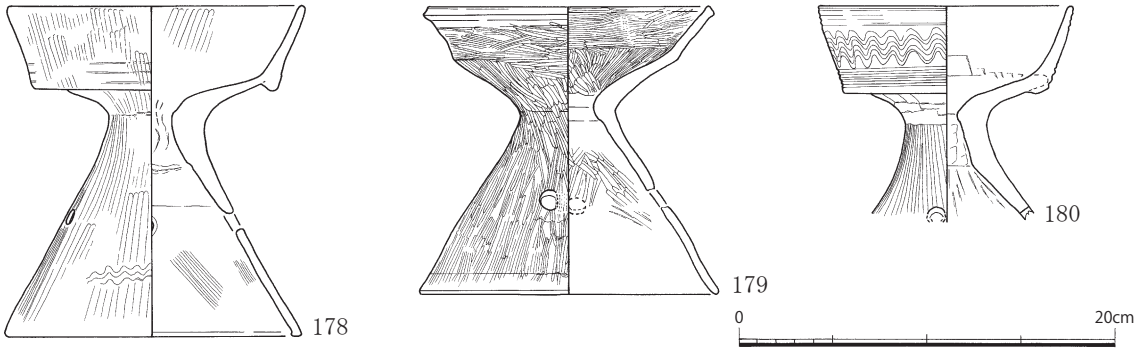
製塩土器は３点出土し、図化掲載した。法量・胎土・色調などの観察表は第６表である。第51図175は口縁部が上外方に伸びる深鉢形の体部で口縁端部は水平面をもつ。脚台部は欠損している。外面はタタキで成形されており、口縁部は粘土の継ぎ目が残り、ナデやおさえで仕上げられている。内面はハケ調整が施されており、口縁端部内面はヨコ方向のナデで仕上げている。176・177は脚台部のみの個体で、体部との接合部分のみに外面タタキ目が残る。



第51図　土器群２・３出土鉢・製塩土器実測図

（6）器台

器台は3点出土し、すべて淡路型器台で、複合口縁状の口縁部に円錐形の脚部が付く。第52図178は磨滅が激しく調整はわかりにくいが、外面はヘラ磨きにより仕上げられている。脚部は円形スカシが三方に穿たれており、裾部の一部に波状文が残る。第52図179の口縁部は外方にやや開き、口縁端部は面を成す。内面はとくに磨滅が激しいが、内外面ヘラ磨きで仕上げられているようである。脚部に円形スカシが三方に穿たれているが、その他の装飾は施されていない。第52図180は脚底部は欠損している。口縁部外面に一条の波状文と上下に沈線を施しており、脚部は外面ヘラ磨き、円形スカシが三方に穿たれている。今回の出土資料を含めて当遺跡から出土した淡路型器台は10点となった。



第52図　土器群２・３出土器台実測図

（7）小結

これまで土器群の詳細を記述してきた。ここでこの土器群の特徴をまとめてみる。

器種は壺・甕・高杯、とくに甕の出土数が多く、その他に鉢、少量の器台・製塩土器がある。

最も器形変化が速く現れ、編年をとらえることができる高杯は、有稜高杯Ｂの出土数が多い。これらの有稜高杯は有稜部径／口径は0.73～0.58の間に、口縁長／口径は0.28～0.23の間に収まる。報告書Ｉに掲載の2008年度調査分の高杯もこの数値内に収まり、これらの高杯は庄内式期古相に近い傾向を示す。

一方、甕は外面にタタキを残す弥生形甕のみで、庄内式の甕は含まれていない。ただし体部が球形化した資料もあり、また外面タタキを消す技法も見られる。唯一搬入品と断定できた甕は外面ハケ調整の阿波地域の甕である。

３点出土した器台はすべて淡路型器台で、淡路地域では庄内式併行期にみられるものである。

以上の特徴から、自然流路土器だまりの土器群２・３は、弥生時代後期末から庄内式期の境期に該当する一群であると推定する。

註１　森岡秀人・西村歩　「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題」2006『古式土師器の年代学』

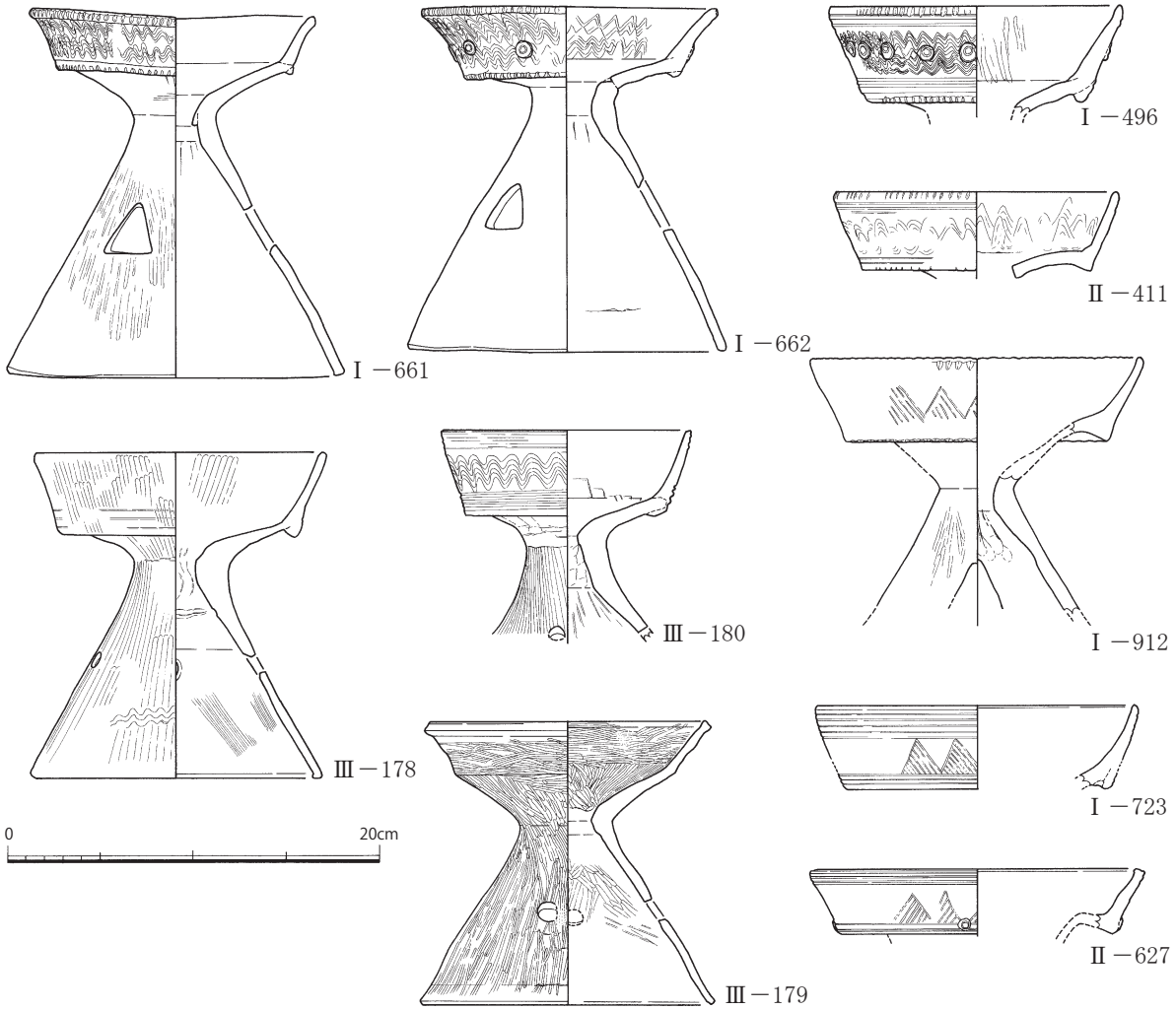
和泉寺跡・府中遺跡出土の淡路型器台について

淡路型器台は弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけてのすなわち庄内式併行期に属する集落遺跡で出土する特殊な器台である。その名のとおり淡路地域を中心として出土しており、精製タイプと粗製タ

イプという異なる2つのタイプがあり、庄内式併行期の淡路地域特有の器種として提示されてきた（註1)。ところが近年淡路地域以外でも出土報告があり、淡路島の対岸にあたる兵庫県明石川流域にも玉津田中遺跡、吉田南遺跡（註2・3）などでまとまった出土例が報告されている。これらの出土例については集成をはじめとして、池田毅氏がさまざまな検討をおこなっている（註4・5)。

和泉寺跡・府中遺跡でも10個体（内確実なものは9個体）の淡路型器台が出土している。これまでのところ一遺跡からの出土点数が10個体近い数になる遺跡は他にない。しかも当遺跡は淡路地域とその周辺という出土数の分布の中心から遠く離れている。そこであらためて当遺跡出土資料の特徴を、淡路地域とその周辺で出土している資料と比較するため検討していきたい。

第53図は和泉寺跡・府中遺跡から出土した淡路型器台で、遺物に付した番号は報告書番号－遺物番号である。報告書Ⅰに掲載した個体は496・661・662・723・912の5点、報告書Ⅱに掲載した資料は411・627の2点、本報告（報告書Ⅲ）に初出の資料が178・179・180の3点である。ここでは可能性のある資料（Ⅱ－627）も含めている。Ⅱ－627は複合口縁の壺の口縁部の可能性もある。



第53図　和泉寺跡・府中遺跡出土淡路型器台実測図

各資料の出土地点、法量、装飾やスカシの状況、胎土、色調などの項目を調べた観察表は第６表に示した。これらの図、表をもとに当遺跡の淡路型器台の特徴を挙げると次のようになる。

・当遺跡の淡路型器台は精製タイプしか出土していない。また淡路型器台以外の種類の器台は出土していない。

・淡路型器台の出土地点は自然流路内土器だまりや包含層などで、そのうち５点の資料が出土した土器だまりは弥生時代後期末から庄内期への境界期に該当する土器群である。

・形態の特徴は、受部の口縁部がほとんど外反せず上外方にのびることがあげられる。したがって他地域で出土しているものに比べ口径が 13.2 ～ 17.6 ㎝と小さい。また基部径も 4.0 ～ 5.0 ㎝と小さい。

・口縁部・受部の装飾はバラエティ豊かである。第 53 図のとおり①②の波状文か鋸歯文が施され（文様が無い場合もある）、④刻み目・⑤沈線・⑥円形浮文三種類の装飾をくみあわせて、あるいは単独でプラスしている。

①波状文
②鋸歯文
③文様なし
＋［　④刻み目・⑤沈線・⑥円形浮文　］

脚部は波状文が残る個体が１点のみある。

報告書番号	写真図版番号	挿図番号	遺物No.	出土地点	法量（cm）						口縁部・受部の装飾	脚部スカシの形状・装飾	胎土	色調 上段（内面） 下段（外面）
					口径		器高		底径					
Ⅰ	44	53	661	自然流路内 土器溜り		15.1		19.9		18.3	口縁外面２段の波状文 口縁端部と受部に刻み目	三角形スカシ 三方	やや粗	2.5YR6/6 橙 2.5YR6/6 橙
Ⅰ	44	53	662	自然流路内 土器溜り		15.7		18.6		17.2	口縁外面２段の波状文と円形浮文 口縁内面２段の波状文 口縁端部と受部に刻み目	三角形スカシ 三方	やや粗	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙
Ⅰ	29	53	496	自然流路		15.8	残	5.6			口縁外面２段の波状文と円形浮文 口縁外面上下に沈線 口縁端部と受部に刻み目		やや粗	2.5YR6/8 橙 2.5YR6/8 橙
Ⅰ	49	53	912	自然流路	推	17.6	残	13.6			口縁外面三角形の線刻 口縁端部と受部に刻み目	三角形スカシ 四方	やや粗	10YR8/4 浅黄橙 10YR6/7 明黄褐
Ⅰ	45	53	723	中世上層 遺構検出面	推	17	残	4.5			口縁外面三角形の線刻 口縁外面に沈線		やや粗	5YR7/6 橙 5YR7/8 橙
Ⅱ	24	53	411	包含層	推	15	残	4,7			口縁外面波状文と上下に沈線 口縁内面に波状文 口縁端部と受部に刻み目		やや密	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙
Ⅱ		53	627	落込み 137	推	17	残	3.5			口縁外面三角形の線刻と円形浮文 口縁外面に沈線		やや密	2.5YR5/3 明赤褐 5YR6/6 橙
Ⅲ	19	53	178	自然流路内 土器溜り		15.3		17.5		15.3	口縁部外面に沈線？	円形スカシ 三方 波状文あり	やや密	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/4 浅黄橙
Ⅲ	20	53	179	自然流路内 土器溜り		14.7		15.3	推	15.4	装飾なし	円形スカシ 三方	やや密	7.5YR4/1 褐灰 7.5YR4/1 褐灰
Ⅲ	20	53	180	自然流路内 土器溜り	推	13.2	残	11.4			口縁外面１段の波状文と上下に沈線	円形スカシ 三方	やや粗	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙

第６表　淡路型器台観察表

・脚部のスカシは円形が 3 点、三角形が 3 点で、三角形スカシの 1 点のみが四方スカシ、他は三方スカシである。

・胎土はやや密～やや粗まで、どの個体も直径 3 ～ 4 ㎜の砂礫を含んでおり、緻密な胎土ではない。

以上のように当遺跡の淡路型器台の特徴をあげてみた。これらの特徴の中で当遺跡出土資料の顕著な特徴は

●口縁部が大きく外反しないで、上外方にのびること

●装飾文様に鋸歯文が施されている

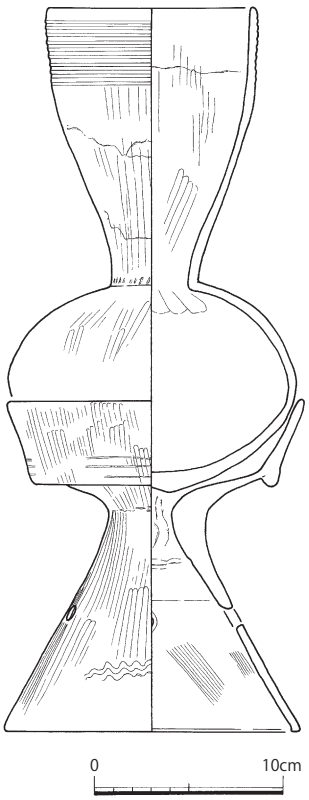
●脚部に装飾文様を施すものもある。

があげられる。

平成 23 年度の整理事業では、これらの器台が淡路地域からの搬入品か調べるため、土器の胎土分析をおこなった。その結果は報告書Ⅰに詳しい。この結果を踏まえて、おなじ土器だまりから出土した 5 点の淡路型器台（Ⅰ－ 661・662、Ⅲ－ 178 ～ 180、以後報告書番号は省略する）胎土を検討してみる。胎土分析した資料は 661・662 によく似た橙色系の色調の胎土をもつ 411 と、白色系の胎土を持つ 912 であるが、411 は搬入品の可能性も残す結果が出ている。したがって土器だまり出土資料の 5 点のうち 411 と似た 661・662 の 2 点は搬入品の可能性も捨てきれないことになる。残りの 3 点（178 ～ 180）の胎土は橙色系とは異なり、178 は白色系の胎土で粗い砂粒は比較的少ない。179 は色調は褐灰色で粗い砂粒を多く含む。180 は色調は明赤褐色で 5 ㎜前後のチャートの粗い粒を非常に多く含み、細かい金雲母も含む。あくまで肉眼観察であるが、178・179 は在地産、180 は搬入品だが少なくとも淡路地域からの搬入品ではない可能性が高い。すなわち土器だまり出土の 5 点の淡路型器台は淡路地域にちかい要素を持つ個体ばかりではないようである。淡路型器台は少なくとも和泉寺跡・府中遺跡では器形や装飾などで独自の発展をしているともいえよう。

ここで当遺跡での淡路型器台の使用例として上部に同じ土器だまりから出土した細頸壺を置いてみた（第 54 図）。この細頸壺は同じ土器だまり出土資料であるが、178 の器台と接近して出土したのではない。あくまで使用想定図であることは断わっておく。しかし今回の調査ではじめて淡路型器台と組み合わすことが可能な壺が出土し､使用例を考えることができた。この壺と器台の組み合わせでは細頸壺を安定して置くことができ、淡路型器台の使用法の一つのプランとして示したい。

淡路型器台の発祥地については再考を求める考えもあるが、今後の課題としてまず資料の再検討（註 6）が必要であろう。その結果さらに詳細な分析により、その実態が明らかになれば、和泉寺跡・府中遺跡についてもより深い理解が得られることと思われる。



第 54 図　淡路型器台の使用例

註１　松下勝「兵庫県南部の弥生時代」『日本の古代遺跡 3 －兵庫南部』保育社　1984

註２　『玉津田中遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2000

註３　『吉田南遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会　2006

註４　池田毅「揺籃期の象徴『淡路型器台』」『水野正好先生古希記念論文集　続文化財学論集　第一分冊』文化財学論集刊行会　2003

註５　池田毅「淡路系遺物の展開とその背景－弥生時代～古墳時代の過渡期の様相から－」『古代学研究会２月例会資料』2014．2．15

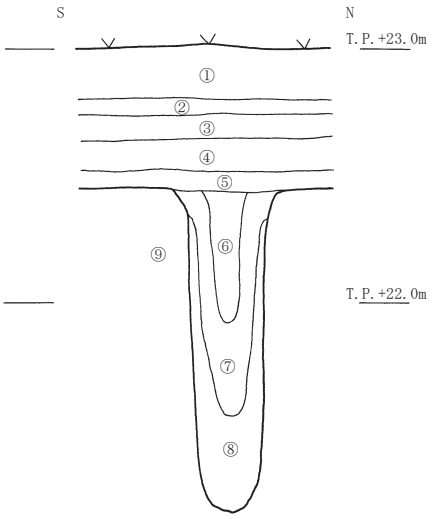
註６　『和泉寺跡・府中遺跡　Ⅱ』で土屋が指摘している通り、淡路型器台は破片では複合口縁壺との区別の困難なものが多い。

第７節　Ｇ区の調査

１．基本層序

Ｇ区の基本層位は①耕土･②床土、③旧耕土と旧床土、④黒褐色砂質シルト、⑤暗灰黄色砂質シルト、⑥褐色砂質シルト礫混じり、⑦灰色粘土、⑧暗褐灰色粘土、⑨大礫混じり粗砂（地山）である。

このうち⑥～⑧は溝遺構の埋土である。③層を除去した面を１面、④層を除去した面を第２面、⑤層を除去した地山面を第３面とした。第１面は前回調査の「耕作溝検出面」（18 ～ 19 世紀）、第２面は「中世上層遺構検出面」（15 ～ 16 世紀）、第３面は「中世下層検出面」（12 ～ 13 世紀）・「自然流路全体図」（弥生時代後期～古墳時代後期）に相当する（第 55 図）。



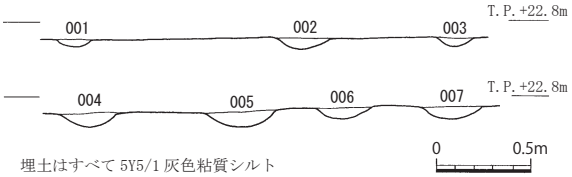
①耕土［2］　②床土［3］
③旧耕土・旧床土［4］
④10YR3/1 黒褐色シルト［5］
⑤2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト［6］
⑥10YR4/6 褐色砂質シルト礫混り
⑦7.5Y5/1 灰色粘土
⑧10GY4/1 暗褐色粘土
⑨10YR4/4 大礫混り粗砂（地山）［8 以下］
⑥～⑧は 3-002 溝の埋土

第 55 図　Ｇ区断面模式図

２．遺構

第１面

Ｇ区の南半部において、③層を除去した面で幅 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.05 ～ 0.1 mの溝が南北の正方向に７条平行して走る遺構を検出した。Ｇ－１－ 001 ～ 007 溝と名付けた。検出面のレベルはＴ.Ｐ.＋ 22.7 mである。この溝群は方向がすべて南北の正方向に走っており、埋土は灰色砂質シルトであった。溝群は前回調査 10001 －３区「耕作溝検出面」の溝 026 ～ 032 と位置や方向、幅、深さが一致するので、この溝群の続きに相当することが明らかである（第 56、57 図）。溝群からは土師器・須恵器・瓦器の細片が出土した。



第 56 図　Ｇ区第１面溝群断面図

前回調査では近世の遺物が出土しており、これが遺構の時期と思われる。溝群はこの時期の畑耕作の際に鋤かれて造成された畝に伴う溝となろう。溝の方向が道路用地買収以前の田畑の方向と一致するので、現代

の田畑の区画が近世にまで遡ることを窺わせる。

第 57 図　Ｇ区遺構平面図

第２面

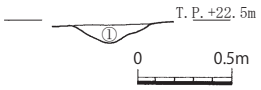
Ｇ北区のうち今回調査のＢ区の西に隣接する箇所で、Ｇ－２－001 井戸を検出した。検出レベルはＴ.Ｐ.＋22.5ｍである。この遺構はＢ区で検出されたＢ－002 井戸の西半分に相当する井戸である。この井戸は径 2.5 ～ 3.0ｍ、深さ 0.9ｍ以上の素掘りのものであることが判明した。埋土は暗灰黄色礫混じり砂質土で、埋土から弥生・土師器・須恵器・瓦・陶器・炮烙が出土した。瓦は古代と思われる布目瓦が目立つが、近世瓦も含まれる。遺構の時期は近世以降であろう（第 57 図）。

今回のＧ区第２面は、前回調査 10001 －３区の「中世上層遺構検出面」に相当する。前回では掘立柱建物 11 棟、柱穴 705 基、溝 22 条など多数の遺構が密集して検出されたが、今回の調査ではそのような遺構群は検出されなかった。

第３面

⑤層を除去した地山面を第３面とした。レベルはＴ.Ｐ.＋22.4ｍである。この面で小ピットと溝を検出した。この面は前回調査 10001 －３区の「中世下層遺構検出面」および「自然流路全体図」に相当する。

Ｇ－３－001 ピットはＧ区の北部で東側壁に沿った位置で検出した焼土坑である。径 0.4ｍ、深さ 0.1ｍで、東半分は調査区外となる（第 57 図）。埋土はにぶい暗褐色砂質シルトで、焼土・炭が混じる（第 58 図）。



①10YR3/4 暗褐色砂質シルト焼土炭混り

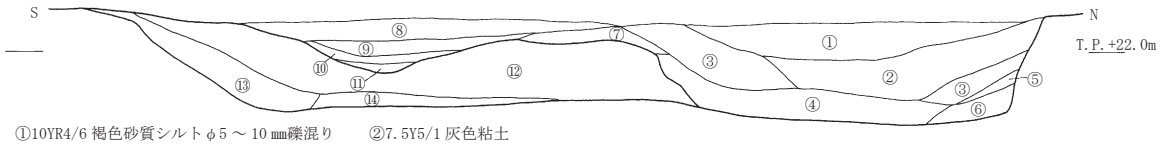
第 58 図　Ｇ区３－001 ピット断面図

Ｇ－３－002 溝はＧ区中央で検出した。南北幅は 10ｍ、深さ 1.2ｍを測る。溝は断面観察により新旧の二時期があることが判明した。新しい時期のものは、溝の北肩から急な斜面で下って溝底に至り、３ｍ程の底幅となる。溝底南からは高低差 0.3ｍの段を上がって幅 2.5 ～ 3.5ｍのテラスとなって一部窪みを有し、さらに高低差 0.8ｍの斜面を上がってこの遺構の南肩となる。埋土は概ね三層に分かれ、上から褐色砂質シルト礫混じり、灰色粘土、暗褐色粘土である。古い時期のものは、南肩から１ｍの斜面を下って、4.5ｍ以上の溝幅となり、北側は新しい溝に切られる。埋土は暗灰黄色砂質シルトで、溝底は黄灰色砂礫～暗灰黄色粘質シルトである。この 002 －溝は、前回調査における溝 399 の延長に相当する。

３．遺物

Ｇ－３－001 焼土坑からは、須恵器杯蓋（181）、須恵器杯身（182）、須恵器有蓋高杯（183）が出土している。時期は古墳時代中期である。

Ｇ－３－002 溝からは、常滑焼大甕（184）土師質羽釜（185、186）、東播系甕（187）などが出土している。



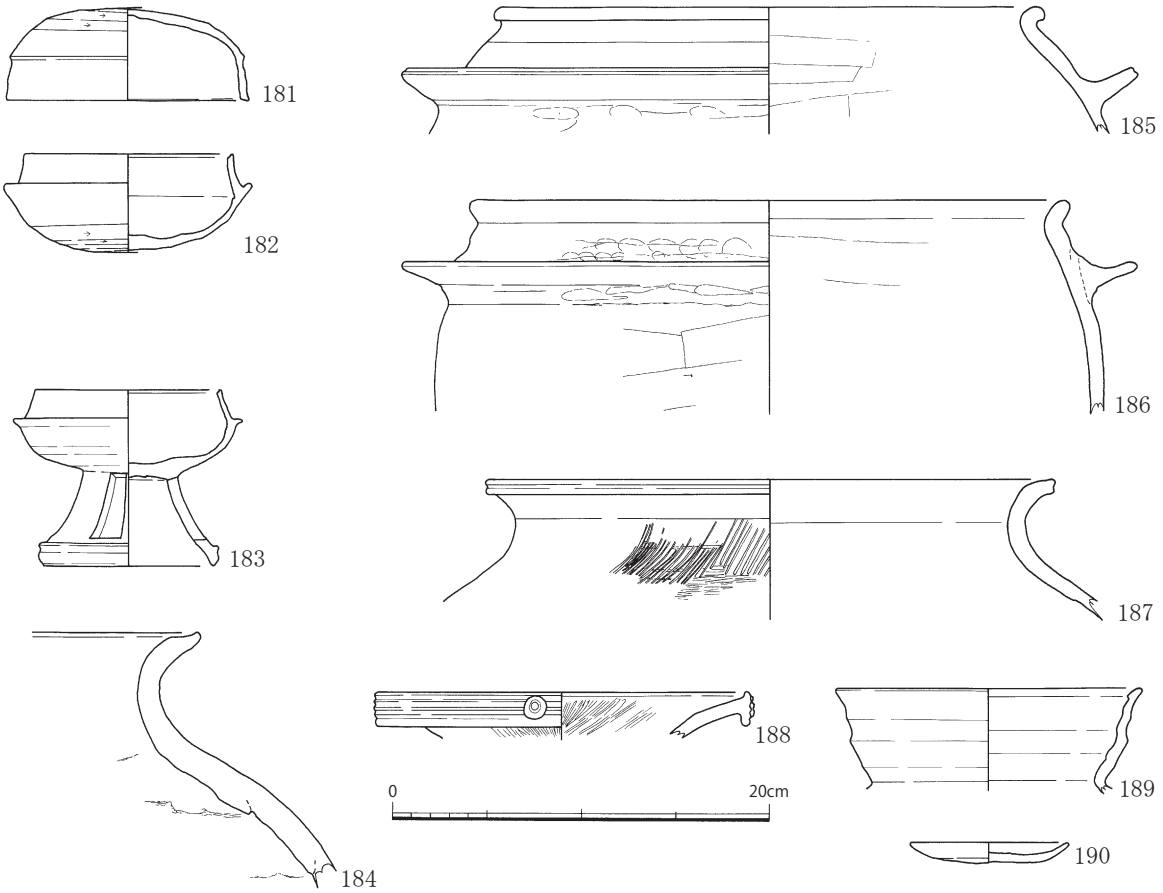
①10YR4/6 褐色砂質シルトφ５～ 10 ㎜礫混り
②7.5Y5/1 灰色粘土
③10YR4/1 褐灰色砂礫φ５～ 10 ㎜
④10GY4/1 暗褐灰色粘土
⑤2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト
⑥2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト
⑦10YR3/2 黒褐色砂質シルト
⑧2.5Y4/1 黄灰色砂質シルトφ２～３㎜礫含む
⑨10YR5/2 灰黄褐色砂礫φ２～３㎜
⑩2.5Y4/1 褐灰色砂質シルト
⑪10YR4/1 褐灰色砂質シルト
⑫2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
⑬2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト
⑭2.5Y4/1 黄灰色砂礫φ５～ 10 ㎜
①～⑪は新しい時期　⑫～⑭が古い時期の溝

0　1m

第 59 図　Ｇ区３－002 溝断面図

弥生時代後期の壺か器台の口縁部片や古墳時代前期の布留甕の口縁部も出土しているが、時期は中世である。

190 は⑥層中から出土した瓦器小皿である。



第 60 図　G区出土遺物実測図

３章　まとめ

１．遺構

今回の調査区は、都市計画道路大阪岸和田南海線整備事業に伴う発掘調査のうち、平成 20 年度に調査した 08019 －１区、08019 －４区、平成 22 年度に調査した 10001 －３区周辺における未調査となっていた擁壁部分及び水路部分の発掘調査であった。このため擁壁部分の調査など、細長い調査区となっているものが多い。ここでは、平成 20 年度及び平成 22 年度の調査の成果も含めて、今回の調査の遺構の時期の変遷をまとめていきたい。

近世

平成 20 年度、22 年度の調査では、全調査区から近世の鋤溝を検出している。特に 10001 －３区南半では、鋤溝群を検出している。10001 －３区の西側に設定したＧ区においてもこの続きを検出した。10001 －３区北半、08019 －１、４区でも鋤溝等を検出しているが、遺構の密度としては疎であった。今回のＡからＦ区でも鋤溝等を検出したが、同じように遺構の密度は疎である。

これまでの調査及び今回の調査で検出した鋤溝は、北東方向のものと、南北方向のものに大別される。特に 10001 －３区、Ｇ区において検出した鋤溝群は、南北方向をとる。『和泉寺跡・府中遺跡』第９章総括でも述べられているとおり、和泉寺跡、府中遺跡が立地する地域の条里地割がほぼ海岸線に平行する条里地割であるのに対し、和泉寺跡の推定寺域と考えられている区域は、ほぼ正方位の条里地割となっており、推定寺域に隣接する 10001 －３区、Ｇ区の周辺の条里地割もほぼ正方位の条里地割になっているものと考えられる。

中世

中世の遺構は、Ｃ、Ｄ、Ｆ区で検出した。特にＤ区では、08019 －４区で検出していた掘立柱建物跡と近接して掘立柱建物跡を検出した。

第６節でも記載したように、前回調査で検出された「建物１」と方向を同じくしており、また建物１の柱穴列の延長上に今回の掘立柱建物のピットが位置し、そして建物１の西端から今回の掘立柱建物の 016 ピットまでの距離は 4.0 ｍ、および 014 ～ 016 ピット列までの距離は 6.0 ｍを測り、これが両建物の柱間距離である 2.0 ｍの倍数となっていることが判明した。これにより両建物は互いに非常に関係のあることが確実であり、同一建物である可能性はあると考えられる。

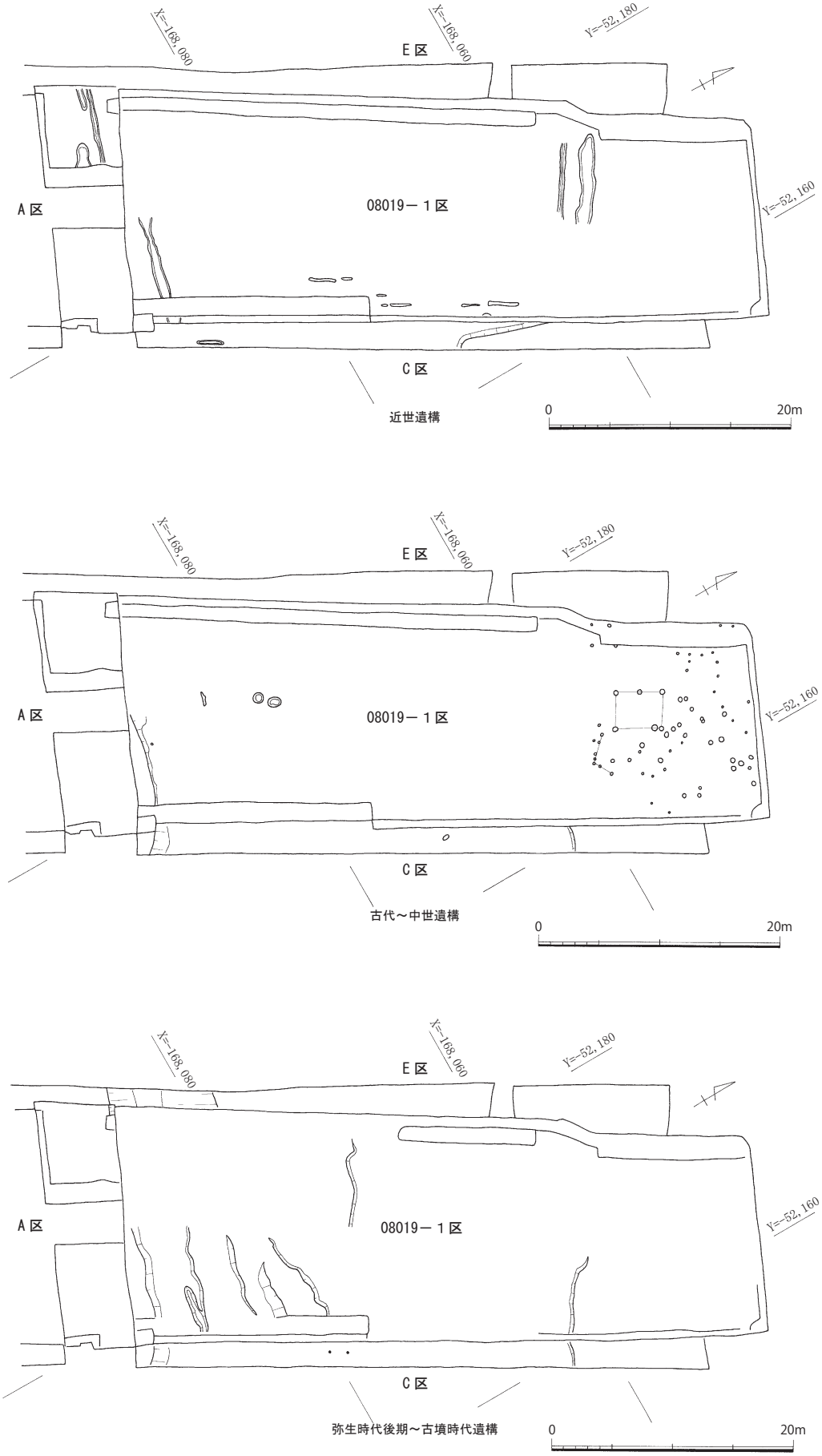
他の調査区でも中世の遺構面は確認できたが遺構は検出できなかった。

古代

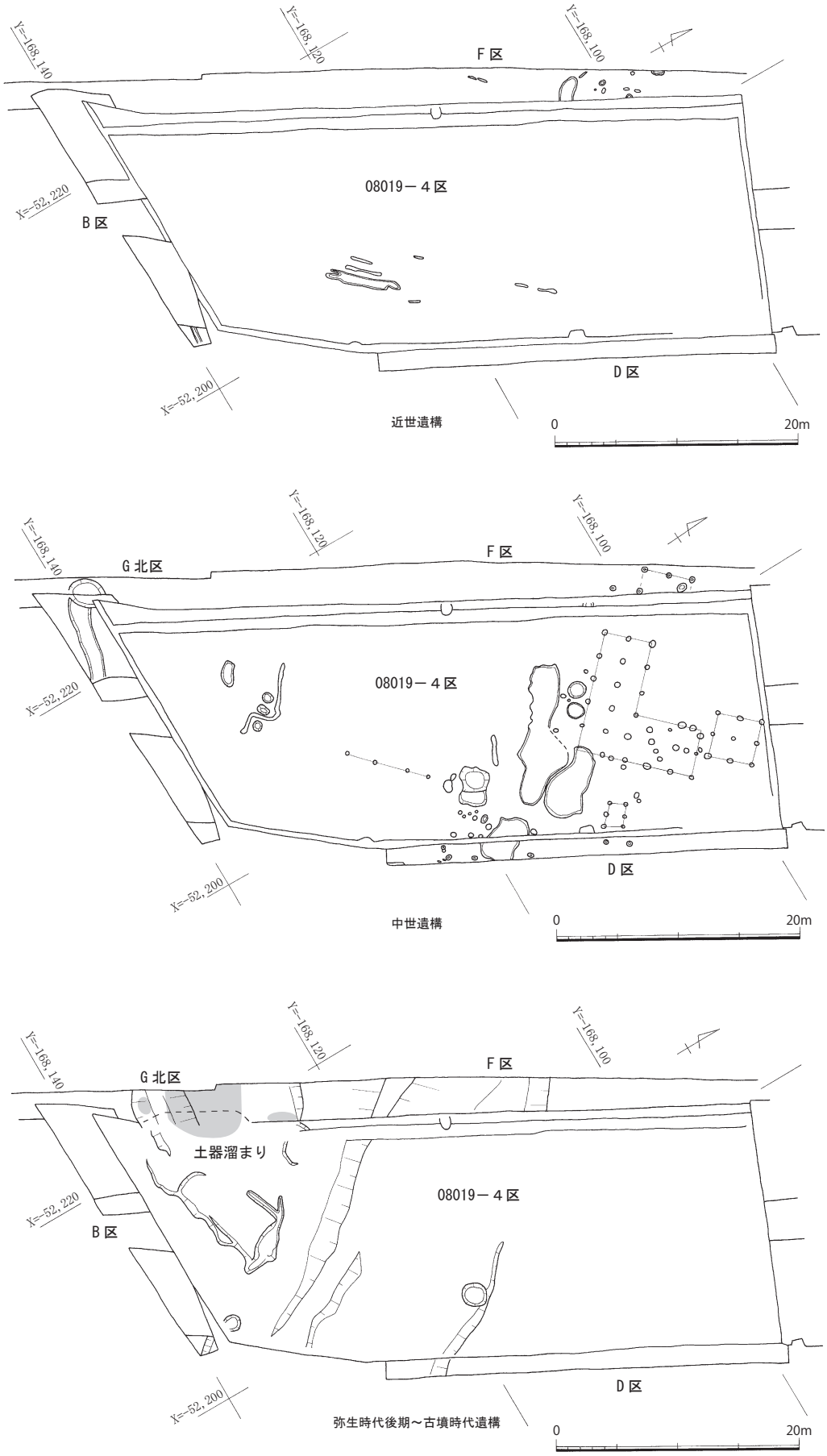
前回の調査でも、古代の遺構は希薄であったが、今回の調査でも古代の遺構は検出できなかった。

弥生時代後期から古墳時代

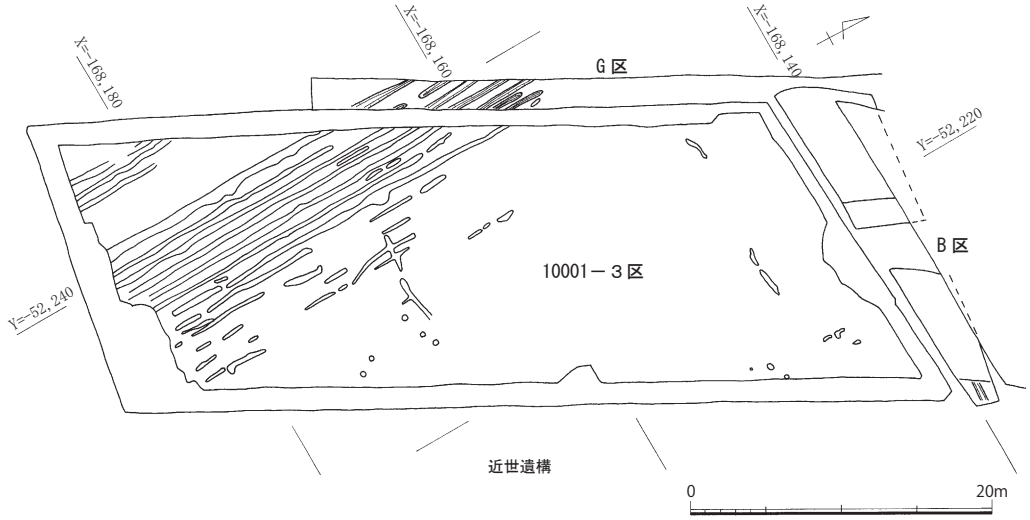
前回の調査と同様に自然流路を検出した。特にＦ区の南部からＧ区の北部で検出した自然流路からは、

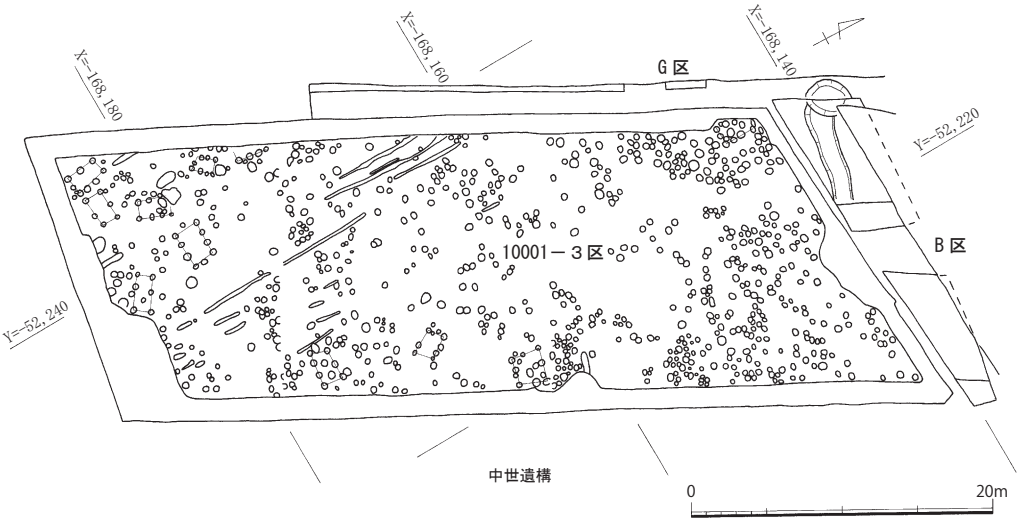


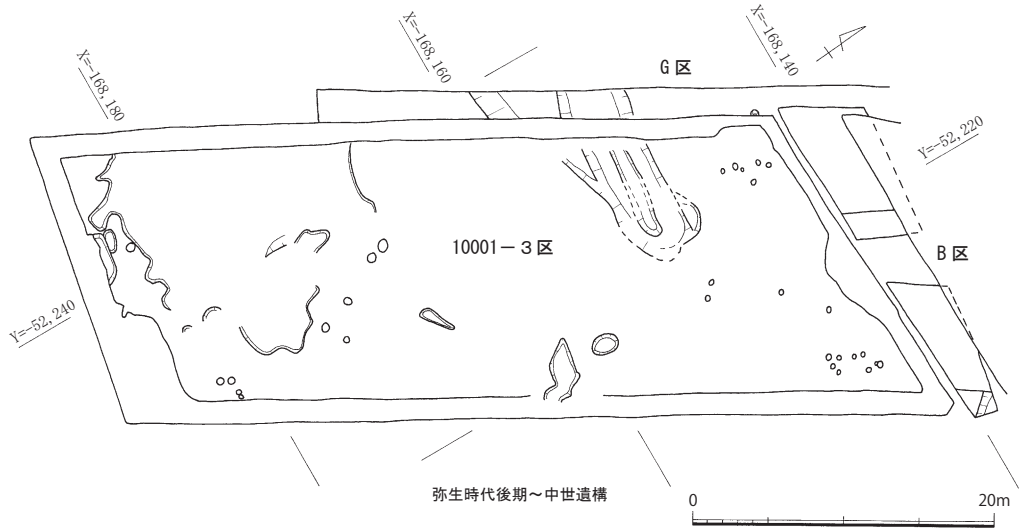
第61図　Ａ区・Ｃ区・Ｅ区・08019－１区遺構平面図



第62図　Ｂ 区・Ｄ区・Ｆ区・08019 －４区遺構平面図







第 63 図　Ｂ 区・Ｇ区・Ｆ区・10001 －３区遺構平面図

08019 － 4 区から検出していた土器溜りの続きを検出した。土器溜りは、調査区外にも伸びており、その広がりを明確にすることはできなかった。

土器溜り出土遺物

Ｆ区の南部からＧ区の北部及び 08019 － 4 区で検出した土器溜りから出土した遺物を出土位置に基づいて図化したものが第 64 図である。

出土土器の組成は『和泉寺跡・府中遺跡』第９章　総括でも記載されているとおり、圧倒的に甕が多い。以下壺、高坏、鉢、製塩土器、器台となる。

土器溜りは、自然流路の肩に近いところから検出され、また完形に復元できるものが多いことから、人為的に置かれたものでると考えられるが、その配置には法則性はないように思われる。

土器溜りの性格については、人為的に置かれたことや、淡路型器台という和泉地域では他に見られない遺物が出土していることから、この場が何らかの祭祀の場であったことが考えられる。

第 64 図　Ｆ区南半部・Ｇ北区・08019 －４区第３面自然流路遺物出土状況図

図　　版

図版1　A区・B区・C区・D区遺構

a. A区第１面（東から）

b. B区第２面（北東から）

c. B区第３面（北東から）

d. B区西側断面（東から）

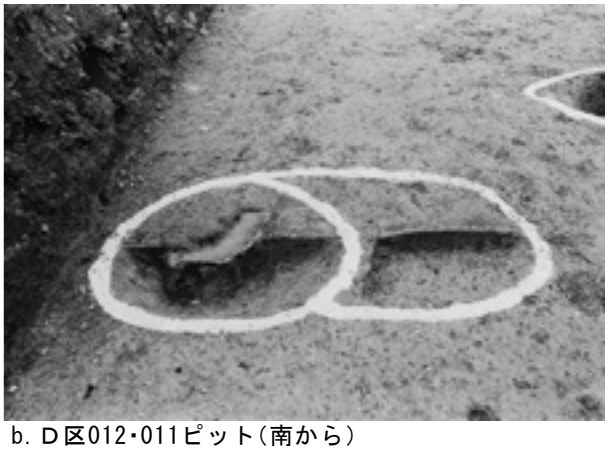
e. C区第１面（北から）

f. C区第３面（北から）

g. D区第２面（南から）

図版２　Ｄ区・Ｅ区・Ｆ区遺構

a. Ｄ区005土坑（南から）


b. Ｄ区012・011ピット（南から）

d. Ｅ区001自然流路と断面（南東から）

c. Ｄ区016段と断面（西から）と断面（南東から）

e. Ｄ区第３面（南から）

f. Ｅ区第２面（北から）

g. Ｆ区第３面（北から）

図版３　Ｆ区・Ｇ区遺構

a. Ｆ区第２面近世遺構（北から）

b. Ｆ区第３面中世遺構（北から）

c. Ｆ区013ピット（南西から）

d. Ｆ区断面（北東から）

e. Ｆ区第２面（南から）

f. Ｇ区第１面（南から）

g. Ｇ区第３面（南から）

図版４　Ｆ区・Ｇ区土器溜り

a. 土器群２（南西から）

b. 土器群２（北東から）

c. 土器群３（北東から）

d. 土器群１（南東から）

e. 土器溜りの断面（南西から）

図版５　Ａ区・Ｂ区・Ｃ区・Ｄ区・Ｆ区遺物

a. Ａ区包含層。縄文土器深鉢

b. Ｂ区包含層。弥生土器鉢（線刻）

c. Ｃ区包含層。土師器甕

d. Ｃ区包含層。須恵器杯身

e. Ｄ区包含層。複合口縁　壺（内側に黒漆）

f. Ｄ区土坑５。瓦器椀

g. Ｆ区包含層。須恵器有蓋高杯・蓋

図版6　F区遺物

a. F区包含層。瓦器椀・小皿、土師器皿・台付皿

b. F区土器群１。土師器　小型丸底壺

c. F区土器群１。土師器　高杯・甕

図版7　土器群2・3出土弥生土器　壺

73

69

72

71

70

64

62

61

図版8　土器群2・3出土土器　壺

58

65

66

67

68

74

75

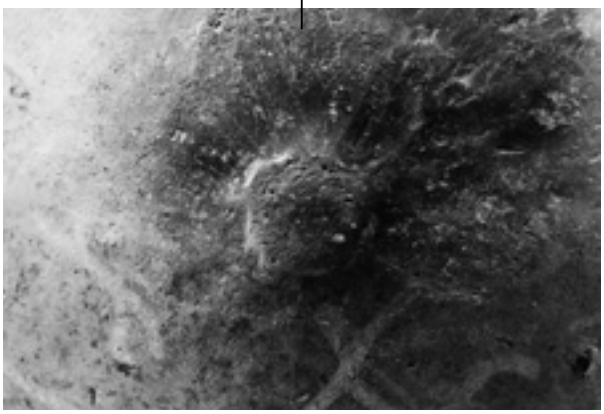
図版9　土器群2・3出土土器　壺

82

83

85

81



84

図版10　土器群2・3出土土器　甕

93

94

100

106

96

95

図版11　土器群2・3出土土器　甕

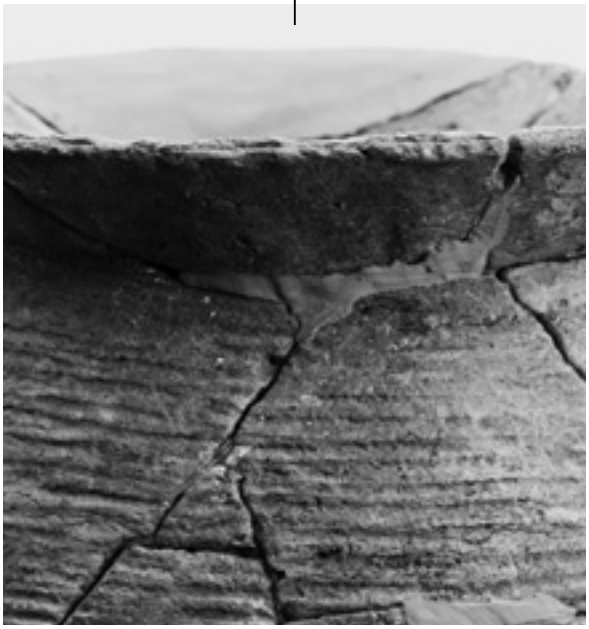
91

92

98

105

109



図版12　土器群2・3出土土器　甕

99

103

102

97

111

図版13　土器群2・3出土土器　甕

124

125

110

123

139

141

図版14　土器群2・3出土土器　甕

145

137

142

135

140

図版15　土器群2・3溜り出土土器　甕

133

132

134

143

131

144

図版16　土器群2・3出土土器　甕・鉢

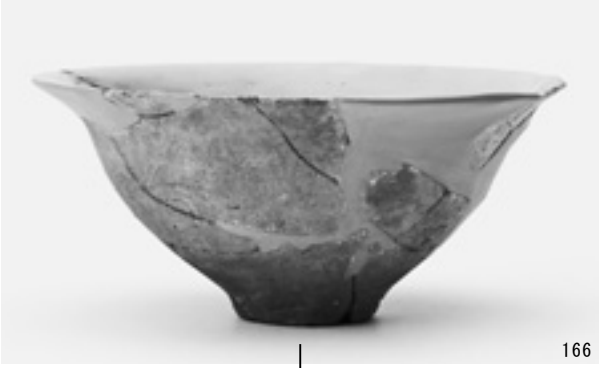
120

138

128

127

147


166

図版17　土器群2・3出土土器　鉢

図版18　土器群2・3出土土器　高杯

164

163

161

162

158

156

155

153

図版19　土器群2・3出土土器　高杯・器台

149

148

178

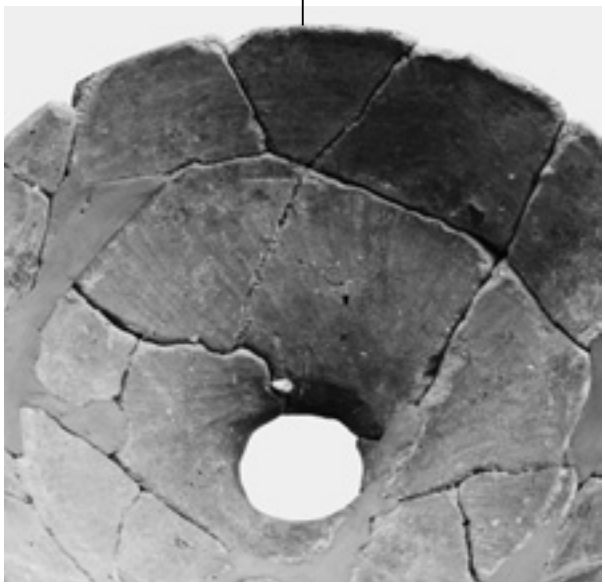
図版20　土器群2・3出土土器　器台・製塩土器

178

180

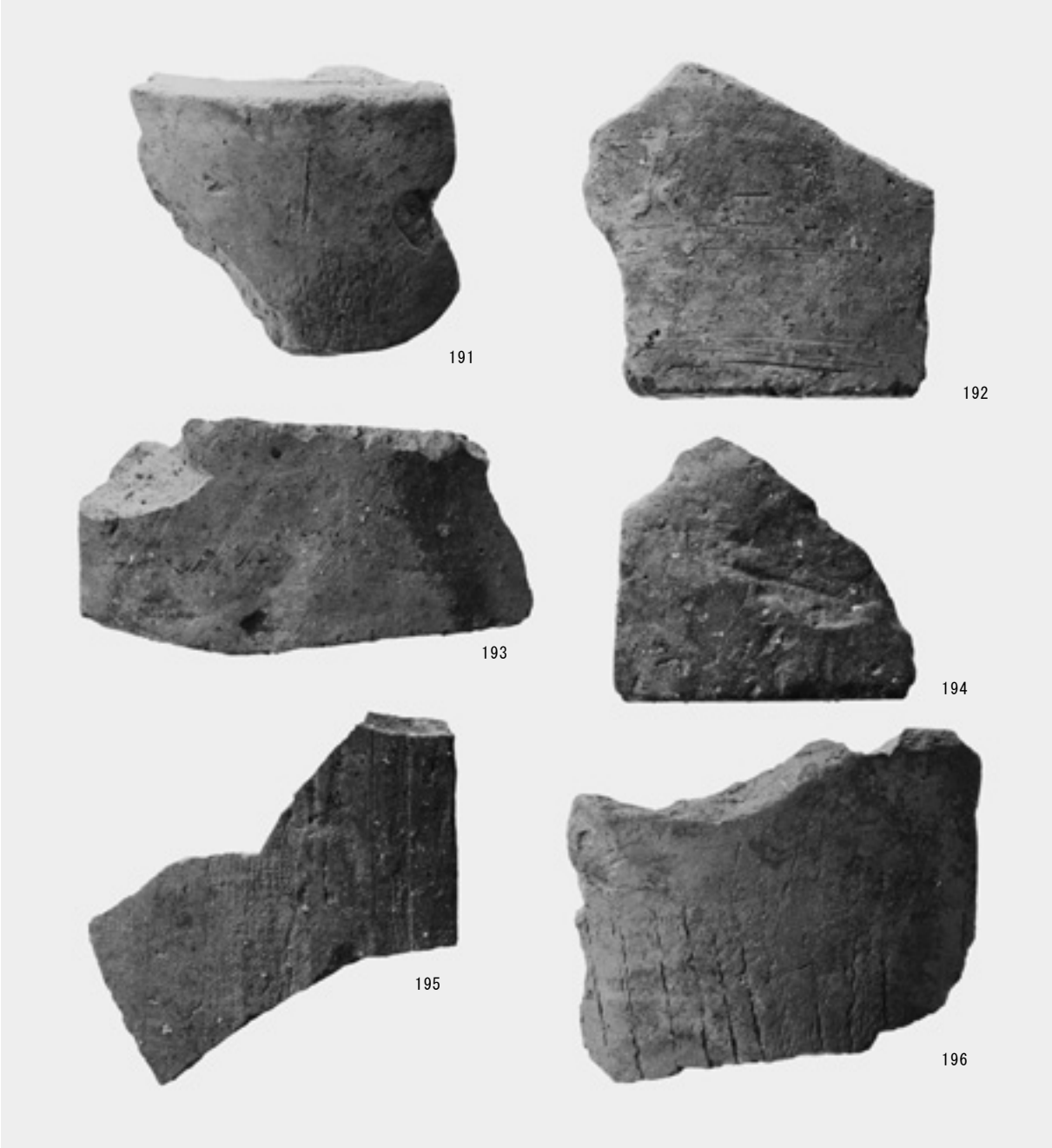
179

175



176

a. G区包含層。須恵器杯身・杯蓋・有蓋高杯



b. G区包含層。玉縁付丸瓦・平瓦

報告書抄録

ふりがな	いずみでらあと・ふちゅういせき　さん
書　　名	和泉寺跡・府中遺跡　Ⅲ
副書名	都市計画道路大阪岸和田南海線整備事業に伴う発掘調査
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財報告
シリーズ番号	2014-5
編著者名	竹原伸次・辻本武・西口陽一・藤田道子
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前二丁目　℡　06-6941-0351（代）
発行年月日	2015年2月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積 （㎡）	調査 原因
いずみでらあと 和泉寺跡 ふちゅういせき 府中遺跡	いずみし 和泉市 ふちゅうちょうよんちょうめ 府中町四丁目	27219	35 34	□□ 29′ 00″	□□□ 25′ 54″	20130201 ～ 20130430	740	記録 保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
和泉寺跡	社寺跡	奈良時代		瓦、土師器、須恵器	弥生～古墳時代の土器溜りを検出。完形に復元できるものが多数出土。
府中遺跡	集落跡	弥生時代～古墳時代	自然流路、土器溜り	弥生土器、土師器、須恵器	
		中世	掘立柱建物、土坑、ピット	瓦器、磁器、須恵器、土師器	

要約	和泉寺跡では古代寺院としての明確な遺構は検出できなかったが、寺院の存在を推定できる古代瓦が出土した。 府中遺跡では前回調査に引き続いて弥生後期～古墳時代前期の土器溜りを検出した。この時期の一括遺物として貴重な資料である。 中世では掘立柱建物跡を検出した。 これ以降の時期になると耕作関係の遺構が検出され、この一帯が生産域になって現在に至る様相が判明した。

大阪府埋蔵文化財調査報告 2014-5

和泉寺跡・府中遺跡　Ⅲ

―都市計画道路大阪岸和田南海線整備事業に伴う発掘調査―

発　行　大阪府教育委員会

〒540-8571　大阪市中央区大手前二丁目

TEL　06-6941-0351（代表）

発行日　平成27年2月27日

印　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所

〒537-0002　大阪市東成区深江南二丁目6番8号